小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2019. 3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例　言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者・既往報告は次のとおりである。

【二ツ梨豆岡向山窯跡群】（平成 17 ～ 21 年度）

[調 査 地]　石川県小松市二ツ梨町

[調査原因]　個人農地

[調査面積]　2,267m²

[発掘調査]　2005. 7.21 ～ 2005.10.17（260m²）
2006. 9.19 ～ 2006.12.12（640m²）
2007.10. 2 ～ 2007.11.30（280m²）
2008. 9. 1 ～ 2009. 3.18（487m²）
2009. 9. 1 ～ 2009.12.11（600m²）

[調査担当]　大橋由美子

発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。

[既往報告]　遺 構 編：2015. 3.31 刊行（『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』）
遺物編 1：2017. 3.31 刊行（『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』）

4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 29・30 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、一部を田邊朋宏氏に協力いただき、ほかは執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第 I 章の執筆を宮田　明が担当し、第 II 章（付章）・第 III 章の執筆を横幕　真が担当した。全体の編集は横幕が行った。執筆に際し、望月精司氏に御教示をいただいた。
7. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡　例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高（T.P.）で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目　次

I　位置と環境 …… 1
II　二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2（遺物編 2）…… 13
付章　その他の遺構 …… 63
III　まとめ …… 69
写真図版 1 ～ 10
報告書抄録

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

１　市勢と沿革

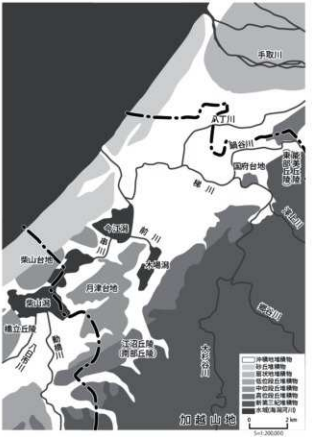
小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km^2 を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

第1図　小松市の位置

２　加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には 5 ～ 10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約 3 分の 2 が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図 2 は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。



第 2図　小松市の地形

３　梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ

第３図　遺跡分布図

0
2 km
S= 1:50,000

れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第 2 節　歴史的環境

1　旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A ～ F 遺跡（300 ～ 305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A ～ D 遺跡や宮竹うっしょやま A･B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2　弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂（たかんどう）遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3　古　墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では臼のほぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4　古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6 世紀以降 8 世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7 世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7 世紀代の月津台地では、額見町遺跡（32）の発掘調査以降、矢田野遺跡（43）、薬師遺跡（70）でＬ字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、本場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8 世紀、在郷の財（たから）氏関連遺跡とされる佐々木遺跡（231）が異彩を放つほかは、概ね盛期が 9 世紀後半～ 10 世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図 3 には中宮八院（319、322、331、338、347、348、349、352）を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺（きよみずでら）跡（243）、八里向山 B 遺跡（301）、里川 E 遺跡（314）が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡（349）では、8 世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6 世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（105）で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群（100）、二ツ梨殿様池古窯跡群（101）で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10 世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7 世紀前半に八里向山 J 遺跡（地蔵谷古窯跡：309）で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群（図郭外）に操業の拠点を移動する。8 世紀前半には和気古窯跡群（図郭外）へさらに移動し、9 世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯 1 基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡（183）で製鉄に伴うと見られる製炭窯が 7 世紀後半～末ないし 8 世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡（いずれも図郭外）が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡（218）、漆町遺跡（220）は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡（漆町遺跡：220）周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5　中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡（339）、岩倉城跡（345）、波佐谷城跡（354）など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12 世紀末までには二ツ梨奥谷 1 号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に 14 世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6　近世～現代

1640（寛永 17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では 19 世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（上百（ゴヤク）古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿（サもん）古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第 1 表　遺跡地名表

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
1	柴山水戸貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世窯	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一百A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡 集落跡	縄文 古代	加賀市指定史跡
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A地点） 柴山出村遺跡（B地点）	集落跡 集落跡	弥生 古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	分河遺跡	散布地	不詳	
13	勘橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猿橋遺跡	散布地 集落跡	縄文 弥生～中世	
15	都名どり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	勘橋遺跡	墓地跡	中世（室町）	
17	梶川高等学校センター遺跡	散布地	古代	
18	梶川遺跡	散布地	古代	
19	分校A遺跡	散布地	古墳	
20	分校B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分校ケンヒ山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3，円墳10，方墳6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越A遺跡	散布地	縄文	
25	打越B遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	熊坂町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山A遺跡 茶臼山B遺跡	散布地 散布地	不詳 縄文	
29	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
30	月津才ヵ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津A遺跡	散布地	古代（奈良）	
32	熊見町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
33	熊見神社前A遺跡	散布地	古墳	熊見町遺跡の一部
34	熊見神社前B遺跡	散布地	縄文	熊見町遺跡の一部
35	津町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田原遺跡	集落跡	古代（奈良）	
40	刀列塚遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
41	矢田A遺跡	散布地	縄文	
42	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白山迫平古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳，2段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳，木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳，切石積横穴式石室，家形石棺
51	鳶森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 14，前方後円墳 3，不明 1，木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3，前方後円墳 1
55	矢田野エビリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	鶴輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	狩津石山古墳	古墳	古墳	円墳，切石積横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳，切石積横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
60	下郷津A横穴群	横穴墓	不詳	横穴7～8
61	鼎経塚	経塚	不詳	
62	下郷津B横穴群	横穴墓	不詳	横穴2
63	島遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	島B遺跡	散布地	古代	
65	島C遺跡	散布地	古墳	方墳？
66	狩津A遺跡	散布地	縄文	
67	狩津B遺跡	散布地	縄文	
68	狩津C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	象崎遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	中ウシノヤマA遺跡	散布地	古代（奈良）	
72	中ウシノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	中ウシノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土山遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎神貝塚	貝塚	縄文	
79	矢崎B古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土山古墳	古墳	古墳	
82	鼎中屋古墳	古墳	古墳	前方後円墳，小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴4
84	鼎中屋城跡	城館跡	中世	土豪と商編の一部
85	市古遺跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	瓦窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	浅川横穴墓群	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林経塚寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡（林タカヤマ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯3，南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林オオカミダニ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯2，土師器1，南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林製鉄跡）	生産遺跡	古代	製鉄炉2，製炭窯4，鍛冶炉2，鞴羽口2
91	戸津5・12号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯2，南加賀古窯跡北群
	戸津シンブザワ製鉄跡	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉4，製炭窯3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代，中世（鎌倉）	須恵器窯36（丸陶窯窯5），土師器焼19，製炭窯2，加賀窯1，南加賀古窯跡北群
93	戸津バテ谷古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯7，製炭窯1，南加賀古窯跡北群
94	戸津1号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯
	戸津ワタゾニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1，製炭窯1
95	戸津シュウガダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器1，製鉄炉1，南加賀古窯跡北群
96	戸津2号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
	戸津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯2，製鉄炉1，南加賀古窯跡北群
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯12，土師器12a，製鉄炉1，製炭窯2，南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨宮ノ山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵器窯4
100	**二ツ梨芝岡向山古窯跡群**	**生産遺跡**	**古墳～古代**	**須恵器窯12（埴輪窯窯2，瓦陶窯窯2），南加賀古窯跡北群**
101	二ツ梨相場池古窯跡	生産遺跡	古墳～古代（平安）	須恵器窯（埴輪窯窯）3，土師器6，3，南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨ゲミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器6，須恵器窯，南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯3，南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨向山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯8，南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯5，南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨福至遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1，製鉄1，製炭窯1，南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1，製鉄1，南加賀古窯跡北群

No	名　称	種　別	時　代	備　考
108	二ツ梨南谷古墳群	生産遺跡	古代（平安末）	泥磨跡第2、加賀第1、南加賀古墳跡北群
109	二ツ梨南谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	二ツ梨谷古墳群	生産遺跡	古代	泥磨跡第6（高岡東第11）、南加賀古墳跡北群
111	二ツ梨カモイ古墳群	生産遺跡	不詳	泥磨跡第2、南加賀古墳跡北群
112	矢田野向山古墳群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	泥磨跡第6、南加賀古墳跡北群
113	矢田野高尾山遺跡	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	泥磨跡第4、加賀第2、製鉄3、南加賀古墳跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古墳群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	泥磨跡第6、加賀第2、南加賀古墳跡北群
115	箱宮A遺跡	窯業地	中世	
116	箱宮B遺跡	窯業地	中世	
117	小矢王谷1～2号遺跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀第2
118	小矢王谷1号製鉄跡（天王山1号製鉄跡）	生産遺跡	不詳	製鉄4
119	小矢王谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷遺跡	生産遺跡	不詳	
122	都谷1号遺跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀第
123	矢田野カチウダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	矢田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	都谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	都谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	都谷西山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？3
128	上荒屋エルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	泥磨跡第4、製鉄3、南加賀古墳跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	泥磨跡第4～5、製鉄2、横穴1、地下式壕1、南加賀古墳跡北群
131	上荒屋サンマイダニ中ヤカ古墳群	生産遺跡	古墳・古代（奈良）	泥磨跡第4、南加賀古墳跡北群
132	上荒屋ネダン古墳群	生産遺跡	古代（奈良）	泥磨跡第2、南加賀古墳跡北群
133	上荒屋トリダニ古墳群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	泥磨跡第1、加賀第1、製鉄4？1、南加賀古墳跡北群
134	上荒屋オジマヤマ古墳群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀第4、製鉄3？1
135	戸津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世（室町）	
137	戸津八幡神社前遺跡	窯業地	古代～中世	
138	上荒屋都谷1遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？1
139	馬場二カヤマ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	泥磨跡第1、製鉄4？1、南加賀古墳跡北群
140	馬場三ヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？1
141	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墓墓	古代（平安）～中世	泥磨跡第5、製鉄4？2、墓墓、南加賀古墳跡北群
142	上荒屋ハカンタニ古墳群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀第2
143	湯上谷古墳群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀第10、製鉄4？2
144	西郷フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西郷ムカイヤマカラツ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
146	牧ヨキドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
147	牧1神供屋跡	墓墓	中世（鎌倉）	牧郷塚比定地
148	江口田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄6？複数
149	用1神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	用1エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	用1遺跡	窯業地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世（室町末）	
153	津波倉ホットシ遺跡	横穴墓	中世（室町末）	地下式壕6、2基調査
154	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	窯業地	不詳	鉱津窯業地
156	小山田スギトク製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？2
157	小山田イケサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？1、製炭窯複数
159	本場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	本場古墳	古墳	古墳	地元で熊田城跡とされる
161	熊田城跡	城郭跡	不詳	
162	本場窯業遺跡	窯業地	縄文	
163	本場A遺跡（本場遺跡H地区）	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄4？1、製炭窯2
164	本場B遺跡	窯業地	古代（平安）～中世	
165	本場C遺跡	窯業地	弥生	
166	本場遺跡A地区（1号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯3、鉱津窯業地
167	本場遺跡B地区（2号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製鉄4？2、製炭窯2
168	本場遺跡C地区（3号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
169	本場遺跡D地区（4号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄4？1、製炭窯1
170	本場遺跡E地区（5号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
171	本場遺跡F地区（6号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
172	本場遺跡G地区（7号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄4？
173	本場遺跡D地区（8号遺跡）	横穴墓	不詳	横穴1
174	大血遺跡	窯業地	不詳	鉱津窯業地
175	長小路地域の石遺跡	窯業地	不詳	鉱津窯業地
176	三谷遺跡	窯業地	縄文	
177	三谷B遺跡	窯業地	弥生～古墳	
178	三谷T-ガ谷遺跡	不詳	不詳	遺在又は塚
179	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄4？1、鉱津窯業地
181	蓮台寺城跡	城郭跡	不詳	小規模な側砦か
182	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	製鉄4？1、製炭窯1
183	蓮代寺サッショウタン遺跡	窯業地	古墳	製炭窯3、鉱津窯業地
184	蓮代寺A遺跡	窯業地	不詳	鉱津窯業地
185	本江古墳群	生産遺跡	近世	製陶
186	蓮代寺遺跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺北遺跡	生産遺跡	近世前期	慶長窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	宗川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
189	安宅関跡	その他	不詳	船岡定史跡
190	安宅住吉神社遺跡	窯業地	不詳	
191	安宅中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
192	安宅天塚古墳	不詳	不詳	墓石塚とも墳丘の残存とも、現存せず
193	小松城跡	城郭跡	近世	本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸橋付は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・武町の町屋跡

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
194-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	中町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	埋納銭出土地
197	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
198	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
200	福田浜橋遺跡	散布地	弥生	福田に分断された石狩側伝承地
201	福田浜橋B遺跡	散布地	弥生	福田に分断された石狩側伝承地
202	高田A遺跡	散布地	古墳～古代	
203	高田B遺跡	散布地	古墳	
204	御館遺跡	城館跡	中世（室町）	
205	踊場遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・鞍川新七郎率和田屋伝承地
206	城遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
207	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
210	大長野A遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野B遺跡	散布地	不詳	
212	牛島四ノ坪遺跡	集落跡	古代（平安）	
213	千代ダンロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウハン遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	宇田福田遺跡	集落跡	弥生	福田に分断された石狩側伝承地
216	宇田福田B遺跡	散布地	弥生	福田に分断された石狩側伝承地
217	江口福田遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	江口窪跡	城館跡	中世（室町）	江口新開部落防御伝承
219	江口遺跡	散布地	古墳～中世	湯町遺跡の一部
220	湯町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一折遺跡	散布地	縄文	
222	一折B遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一折C遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地印跡	社寺跡	中世（室町）	
225	千代ヶ丘美遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	千代オオキ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳６
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城館跡	中世（室町）	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	源氏屋敷（奈良）
232	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉遺跡	生産遺跡	近世末	両側九谷「若杉窯」、連房式登窯
236	古竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	古竹Ⅱ遺跡（古竹遺跡19地区）	散布地	古墳	8河道の解跡
238	古竹C遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千本野遺跡	散布地	縄文	
	千本野（A）遺跡	古墳	古墳	方墳８
	千本野（B）遺跡	集落跡	古墳	
240	蟠生１号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	茶谷古墳・茶谷２号墳	古墳	古墳	短小横穴式石室
242	若杉オノボル１号遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺間辺山林寺院跡の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（奈良）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳８、木芯粘土室
	八幡石材遺跡	生産遺跡	近世末	両側九谷「八幡石窯」、八幡６号墳を削平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西谷遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大宮１遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓９
251	軽海廃寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
252	西谷寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西谷寺伝承地
253	古屋しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古屋遺跡	集落跡	古代（平安）	
255	古屋ドドンド遺跡	散布地	古代（平安）	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
258	古屋横穴	不詳	不詳	
259	古屋シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
260	南野谷遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
262	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
263	小野遺跡	生産遺跡	近世末	両側九谷「小野窯」
264	前田利家公民家	その他の墓	近世	前田利家公が誕生に村された地とされる
265	植田の水塚	その他	近世末	洪水の浮没供養と解除方法を記した石祠、小松市指定史跡
266	植田ミヤケ遺跡	散布地	不詳	

No	名　　称	種　別	時　代	備　考
267	姫田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
268	姫田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	姫田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（屋敷）	
271	姫田遺跡	散布地	古代	
272	姫田塚	不詳	不詳	
273	姫田地古墳群	古墳	古墳	円墳9，木棺直葬，木芯粘土室
274	姫田山古墳群	古墳	古墳	円墳12，方墳4
275	鍋谷陽明古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落，河田山10～12号墳が垂直
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓，河田山11号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2，前方後方墳2，円墳22，方墳34，不明1，木棺直葬，木芯粘土室，切石積横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式民，河田山54号墳の南に隣接
278	河田山1号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，能美古窯跡南部　八里・河田山支群，河田山60号墳の北西側面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯，能美古窯跡南部　八里・河田山支群
279	河田B遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
280	河田C遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式民6，横穴1，不明1，3地点で計8基
282	宇頃横穴群	横穴墓	不詳	横穴2基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世（屋敷）	横穴11基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（屋敷）	
285	上八里A遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
286	上八里B遺跡	散布地	古代（奈良）	
287	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	横穴2基
288	上八里D遺跡	散布地	古代（奈良）	
289	上八里1号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，能美古窯跡南部　八里・河田山支群
290	上八里2号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯窯，能美古窯跡南部　八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田遺跡	散布地	縄文～中世	
293	下向地遺跡	散布地	不詳	
294	佐野A遺跡	散布地	弥生	
295	佐野B遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	佐野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
298	河田山古下遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
299	河田山古墳群	古墳	古墳	円墳7
300	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺西辺山林寺院群の一
302	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1，木棺直葬
303	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2，木棺直葬
304	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
305	八里向山F遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳10，木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世（屋敷）	集石墓1，横穴3
306	八里向山G遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
307	八里向山H遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石墓群，96基調査
308	八里向山I遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，能美古窯跡南部　八里・泉台支群
309	八里向山J遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯，能美古窯跡南部　八里・泉台支群
310	里川A遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯2，製炭民約20
311	里川B遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川C遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川D遺跡	散布地	縄文	
314	里川E遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺西辺山林寺院群の一
315	里川F遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺西辺山林寺院群の一
316	里川G遺跡	散布地	不詳	
317	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
318	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代（平安）～中世	社寺（隠明寺）又は城館伝来地
319	空明寺古墳群	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯（古坂窯跡）
	空明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
	隠明寺跡	社寺跡	古代（平安）	中世八院，掘数ある伝承地の一
320	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	宮の池造墓群	その他の墓	（平安）	墓塔4，3基調査，2号墓は鎌倉時代に経塚に利用された？
322	浦泉寺跡	社寺跡	古代（平安）	中世八院，掘数ある伝承地の一
323	常徳寺跡	社寺跡	中世（屋敷）	一向一揆・宇川原徳の居宅跡とも
324	鶴田城跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川原徳の居城伝承地
325	鶴田横穴	不詳	不詳	地下式民？
326	仏大寺伝院寺跡	社寺跡	中世	
327	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
328	仏生寺跡	社寺跡	中世	
329	仏生寺塚	墓塚	中世	
330	ブッショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2，木芯粘土室
331	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
	「伝」長覚寺跡	社寺跡	古代（平安）	中世八院，地名伝承のみ
332	中海C遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
333	中海遺跡・宮岡遺跡	散布地	縄文	
	宮岡上野遺跡	散布地	旧石器	

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
334	長覚寺中世遺跡	その他の墓	中世	
335	赤絵沢1遺跡	散布地	縄文	
336	柏の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明。5基開口とされる
337	赤絵沢スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴9、地下式穴4
338	雅楽谷遺	社寺跡	古代（平安）	中世八幡
339	宮腰城跡	城館跡	中世	
340	広ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	広瀬前原館跡・広瀬前墓	その他の墓	古代（平安）	小松市指定史跡
342	花ヶ瀬跡	散布地	縄文	
343	花ノ坪世遺跡	その他の墓	中世	
344	下花ヶ瀬横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
345	宮森城跡	城館跡	中世（室町）	
346	柏の木1遺跡	散布地	縄文	
347	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中世八幡
348	護国寺跡	社寺跡	古代（平安）	中世八幡
349	松谷観音 松谷寺跡	社寺跡 社寺跡	古代（奈良） 不詳	本堂仏像半に源各古代法隆寺院 中世八幡
350	平野遺跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・平野定品城伝承地
351	江指城跡（山田山砦跡）	城館跡	中世（室町）	
352	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中世八幡
353	波佐谷遺跡	散布地	中世（室町）	
354	波佐谷城跡 （伝）波佐谷松岡寺跡	城館跡 社寺跡	中世（室町） 中世（室町）	一向一揆・宇津呂円波宇品城伝承地
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13、地下式穴5
356	六郎遺跡	集落跡	縄文	
357	麻倉尾谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
359	大石谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
360	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
361	穴谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
362	池城跡屋	館屋	中世（室町）	
363	曽谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ瀬遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	殿谷下城跡	城館跡	不詳	
367	和泉地谷無遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑、能美古窯跡南部　梅山谷支群
368	和泉地谷谷2号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　梅山谷支群
369	和泉下和泉古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部
370	和泉近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和泉坂口A遺跡	散布地	縄文	
372	和泉公文尾遺跡	城館跡	不詳	
373	和泉中和泉古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南部　梅山谷支群
374	虎谷城城跡	城館跡	中世	
375	虎谷横穴横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺島古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南部
377	寺島薬師坂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷寺跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷城跡	城館跡	不詳	

参考文献

イ　石川県教育委員会 (1992) 石川県遺跡地図

石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡Ⅱ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅲ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅳ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡Ⅱ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1995) 石川県小松市荒木田遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡 , 石川県能美市
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
ウ　上野 與一 (1965) 考古篇 , 小松市史 4. 風土・民俗篇 , 小松市教育委員会 , 石川県
カ　軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌 , 小松東部土地改良区 , p75-77. p201-221.. 石川県
コ　小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1990) 二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳 , 石川県
小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I , 石川県
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群 , 石川県
小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I , 二ツ梨豆岡向山窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II , 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I , 石川県
小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III , 薬師遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II , 石川県
小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III , 石川県
小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV , 石川県
小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V , 石川県
小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII , 矢崎宮の下遺跡 , 薬師遺跡 V 次 , 石川県
小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡 , 石川県
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦 , 小松市 , 石川県
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園 , 小松市 , 石川県
タ　辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群 , 石川県能美市
テ　寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群 , 石川県能美市
ヘ　日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌 , 能美郡役所 , p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343. , 石川県
日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌 , 江沼郡役所 , p679. , 石川県
ホ　北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸 , 桂書房 , p193-208.

第Ⅱ章　二ツ梨豆岡向山窯跡群２（遺物編２）

はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』（小松市教委 2015）にて遺構編を報告した「二ツ梨豆岡向山窯跡群２」の遺物編２にあたる。報告遺物は５号窯・６号窯・13 号窯関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委（2015）を参照されたい。

付章として、土師器焼成坑 SJ01 ～ 04、及び土坑 SK06 ～ 08 について報告する。最後に、第Ⅲ章にて、これまで行った調査から当窯跡群の窯場動向をまとめ、結びとする。

【凡例】

1.　遺物の器種分類と編年観

須恵器・土師器ともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じ、第５・６図の通り設定した。貯蔵具に関しては、北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第８号』に基づいたものである（ただし壺Ａ・壺Ｂおよび壺Ｄ・壺Ｅは区分していない）。

土器編年と暦年代観は、田嶋明人氏の古代土器編年軸（田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』、及び 1997「加賀地域での 10・11 世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の 10・11 世紀代の土器様相』、2013「平安期土器の暦年代と横江荘の変遷」『加賀 横江荘遺跡』）に基づいて、望月精司氏が示した編年観と編分案に準じる（望月精司 2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」「二ツ梨－貫山窯跡」及び 2005「第８章考察－能美窯跡群の８世紀後半～９世紀中頃の須恵器編年と窯場動向－」『和気後山谷窯跡群』、2009「南加賀地域古代土器編年軸と暦年代観」『須見町遺跡Ⅳ』）。

2.　遺物図版について

- 縮尺は食膳具と焼台 1/3、貯蔵具と煮炊具 1/4 を基本とする。
- 掲載番号と [実測図番号] を併記。
- 須恵器は断面黒塗、土師器は断面白抜き。
- 粘土塊や焼台片等付着物は断面斜線パターン、赤彩は黒 20% 塗。
- 「▼」を正中線上にイすするのは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と稜線・調整線等が離れているものは、ゆがみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す
- 底部に回転糸切痕をもつものは「●」を付す。
- その他特徴的な調整は観察表に付記した。

3.　遺物観察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点・取上げ詳細：出土した遺構名・グリッド名を示し、「窯床」「窯前廃部（焼口前面土坑）」「窯外底状ピット内」「灰原」「窯埋土」等の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。

法量：「口」＝口径、「底」＝底径、「台」＝高台径、「胴」＝胴部最大径、「頸」＝頸部径、「つ」＝つまみ径、「高」＝器高、「台高」＝高台高、「頸高」＝頸部高、「つ高」＝蓋つまみ高、「頸高」＝頸部高で示し、（　）は残存値、［　］は推定復元値を表す。単位は cm に統一した。

性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「転」は主に２次被熱痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅緻」－焼き締まりが非常に強いもの、「良好」－焼き締まりが強いが堅緻より弱いもの、「良」－還元状態を保つが焼き締まりが弱いもの、「やや良・やや不良」－「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」－白い生焼け状態のもの（生）や酸化状態の焼成不良で軟質のもの（酸）をそれぞれ示す。

色調：降灰部分、釉付着部分を除いた大まかな色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は適宜降灰や釉の色調も示した。色調の判別は以下のとおりマンセル表色系に準拠して表記する。白色－－N-8（生焼け品）、灰白色－N-8、灰色－N-7 ～ 5、灰オリーブ色－5Y6/1 ～ 4/1、明青灰色－5PB7/1 あるいは 5P7/1、青灰色－5PB6/1 ～ 5/1 あるいは 5P6/1 ～ 5/1、暗（青）灰色－N-3 あるいは 5PB4/1 ～ 3/1、灰褐色－7.5YR4/2、褐灰色－10YR6/1 ～ 4/1、（明）赤灰色－2.5YR7/1 ～ 6/1 あるいは 2.5YR7/2 ～ 6/2（酸化焼成品）、ほか例外となる色調はその都度付記した。

胎土：「通常」－南加賀窯跡群の弓津オオダニ支群窯で通常見られる、粘土質の素地に適度に砂粒（粒径 2mm 未満）が混在し、まれに礫粒（粒径 2mm 以上）を含む胎土、「砂少」－砂粒の混入が少ない比較的良質な粘土質胎土、「砂（礫）多」－通常の胎土よりもやや砂粒や礫粒が多い胎土、「礫極多」－混和材と呼べる大粒の礫を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率（36 分率）を示す。他の部位で示す場合は胴、底、台、脚等を数値に付記する。

回転：ロクロ回転の方向がヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の観察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

- 底部糸切り－糸切りがある場合に記す。ただし、埼玉窯種については記さない。ヘラ切りの場合は特に記さない。
- ヘラケズリ－部位を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「手持ちケズリ」と記す。
- ヘラ記号－部位と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ書き」。
- 重ね焼き分類－坏Ｂ焼成痕跡の分類。北野博司 1988「重焼の観察」「辰口西部遺跡群Ⅱ」に基づく（１類－蓋身正位組合せ

重ね焼き、Ⅱａ類－蓋逆位と身正位の組合せ重ね焼き、Ⅱｂ類－蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、Ⅲ類－蓋および身の柱状重ね焼き）。対象は有蓋器種（坏Ｂ）だが、無蓋器種（坏Ａ・盤Ａ・埦Ａ・皿Ｂ）についてもⅢ類が観察されたものは付記する。また、皿Ｂで身と身の口を合わせる合わせ口法を確認した。

- タタキ分類－貯蔵具の胴部成形や調整の際に生じる叩き具・当て具痕跡の分類。花塚信雄 1984「須恵器費類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』に基づく。
- 頸部接合分類－瓶類の頸部接合法は『和気後山谷窯跡群』（2005）に倣い、A 類（風船技法）と B 類（開口法）に大別し、A 類は 3 細分した（A1 類－大円盤閉窯、A2 類－中円盤閉窯（円盤痕見えるタイプ）、A3 －小円盤閉窯（円盤痕見えないタイプ）もしくは円盤閉窯しない絞り切り）。
- 貯蔵具専用焼台分類は望月精司 2008「須恵器窯専用焼台に関する考察」『白門考古論叢Ⅱ』を参照した。

※観察箇所を示す場合、（部位）－（内面・外面）－（上半・下半）の順に略して記載

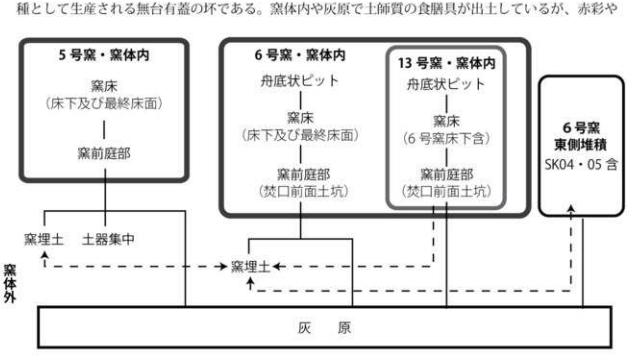
第 1 節　報告遺物の概要と器種分類

対象となる 5 号窯・6 号窯・13 号窯は調査区Ｅ－Ⅰ区～Ｅ－Ⅲ区に位置し、南側のＥ区にかけて灰原が広がる（調査区の位置は第 33 図参照）。灰原は 4 号窯同様に後世の切土・盛土によって撹乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲（こ 5 ～し 5 グリッドおよび、こ 6 ～し 6 グリッド）を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、撹乱による 2 次堆積のものが多数含まれている。

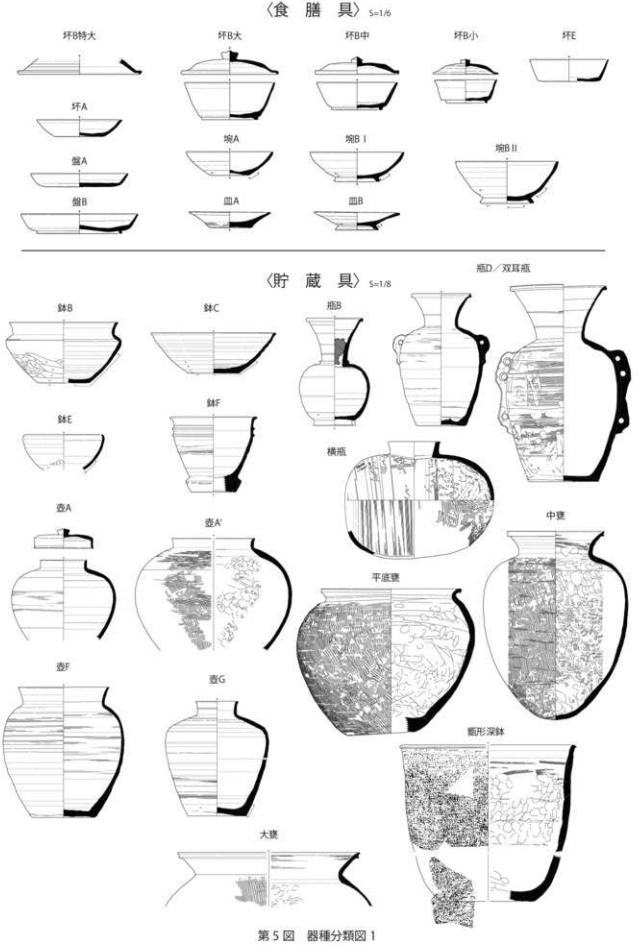
6 号窯東側堆積は、遺構編で 6 号窯に関連する施設（SK04・05）として扱った区域であるが、切り合い関係が不明瞭で、各窯に属する遺物が混在する。また、5 号窯前庭部左側部にある土器集中は、基本的に 5 号窯出土遺物で構成されるが、混在が認められた。さらに、5 号窯と 6 号窯は隣り合い、13 号窯は 6 号窯に再利用（改造）されているため、各窯埋土（覆土）出土遺物も混在が著しい。よって、報告では主に窯体内出土遺物を取り上げ、それ以外に窯体外出土遺物の中で形態的特徴から抽出できたものに関しては各窯に含めて提示した。

確認された主要器種は第 5 図と第 6 図のとおりである。

食膳具は底部ヘラ切りの坏・盤と底部糸切りの埦・皿に分けられ、それぞれ無台を A、有台を B としている。有蓋の坏 B は、口縁計測の際に蓋身で数値の高い方を採用した。坏 E は坏 B 中小法量器種として生産される無台有蓋の坏である。窯体内や灰原で土師質の食膳具が出土しているが、赤彩や



第 4 図　出土地点概略図


〈食　膳　具〉S=1/6
坏B特大
坏B大
坏B中
坏B小
坏E
坏A
盤A
盤B
椀A
椀B Ⅰ
椀B Ⅱ
皿A
皿B
〈貯　蔵　具〉S=1/8
鉢B
鉢C
鉢E
鉢F
瓶B
瓶D／双耳瓶
横瓶
壺A
壺A'
壺F
壺G
平底甕
中甕
鉢形深鉢
大甕

第５図　器種分類図１

第６図　器種分類図２

内黒のないものは基本的に須恵器器種として集計している。意図的な無垢土師器の可能性があるものは図化の際に断面白抜きとした。灰原からのみ内黒埦をわずかに確認しているが、主要な生産器種とはならない（計測値 61/36）。

貯蔵具は調理・盛り付け容器の鉢を含め、壺・瓶・甕類を確認している。鉢は頸部くびれをもつ広口の鉢 B が主体で、埦形の鉢 C、口縁内湾の鉢鉢形となる鉢 E、深身厚底の鉢 F が出土している。甑形深鉢は当窯跡群 1 － A 号窯及び 1 － B 号窯で確認・命名された 10 世紀代の器種で、他地域ではみられないタイプであり（小松市教委 2005）、大型の甕に類する器種と思われる。瓶は肩丸長頸の瓶 B と長胴の瓶 D（いわゆる双耳瓶）があり、特に瓶 D は貯蔵具全体からみても生産の中心となる器種である。横瓶は口頸が短い古手のタイプが 1 個体のみ灰原から出土している。壺は短頸で有蓋の壺 A、同器形で無蓋の壺 A'、広口なで肩の壺 F、狭口なで肩の壺 G（= 平底無蓋短頸壺（小松市教委 1993））がある。壺 A' は（小松市教委 2005）にて「壺 G・壺 H」に区分されたものだが、本報告では器形的に壺 A の流れを汲むものとして一括した。壺 G は 10 世紀代に生産される器種で、（小松市教委 2005）にて「壺 F 系」とされた一群にあたるが、壺 F は広口器種であり適当でないと感じたため、再設定した。1 － A 号窯、1 － B 号窯及び 7 号窯には頸が長くなるタイプが存在する。なお壺 A につく蓋は口縁計測から除外した。甕は中甕、大甕、平底甕があり、小甕は確認していない。

煮炊具は釜と鍋を確認している。須恵器窯由来のものは大半が長胴釜で、灰原から鍋が極わずかに出土している。付章で述べる土師器焼成坑から短胴小釜と鍋が出土している。

以上のほかに、小型貯蔵具（壺・瓶）、特殊蓋、コップ形、平瓶、円面硯、獣足片、管状土錘、窯道具（貯蔵具専用焼台）が出土しているが、計測対象には含めず、個別に報告する。

なお、各窯の所属時期は、遺構編で 13 号窯 =9 世紀中頃～後半、6 号窯 =9 世紀末～ 10 世紀初頭、5 号窯＝ 10 世紀前半（北陸古代土器編年Ⅴ$_2$～Ⅵ$_3$期）に位置づけたが、今報告の遺物報告をもって時期を確定したい。

参考文献（第Ⅱ章及び付章）

望月精司・福島正実 1988「南加賀古窯跡群の概要」『北陸古代土器研究の現状と課題』石考研・北陸古代土器研
小松市教育委員会 1991『戸津古窯跡群 I』
小松市教育委員会 1992『戸津古窯跡群 II』
望月精司 1992「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』2 号
小松市教育委員会 1993『二ツ梨豆岡向山古窯跡』
春日真実 2001「横瓶の製作法」『北陸古代土器研究』9 号
窯跡研究会 1997『古代の土師器生産と焼成遺構』
小松市教育委員会 2002『二ツ梨一貫山窯跡』
小松市教育委員会 2005『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』
辰口町教育委員会 2005『和気後山谷窯跡群』
小松市教育委員会 2015『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』
小松市教育委員会 2017『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』

※凡例で記載したものは一部省略

第２節　13 号窯関連遺物

13 号窯は先述したように、6 号窯構築時の再利用により窯体の大半を改変されており、確実に窯に伴う遺物は床下及び舟底状ピット出土のものに限られる。そのため、器種構成も生産の全容を示さないことを前提とする。

器種構成表を第２表に示した。食膳具は底部ヘラ切り器種の坏盤が合わせて 90% 以上を占め、わずかに糸切り器種の埦皿を伴う。有蓋の坏 B・坏 E が２割半、無蓋の坏 A・盤 A が６割、盤 B がわずかに残存する。坏 E と盤 B は灰原からの出土であるが、形態的特徴から本窯に含めた。埦皿は口縁部片のみの分類で、器厚や見込みの有無等で判断している。貯蔵具は鉢瓶類が主体で、これに壺が伴う。甕と煮炊具は確認できなかった。これら各器種の中には、焼き色が白色系で堅緻に焼かれて降灰あるいは釉付着する一群が一定量存在しており、それを基準に抽出したものも含む。以下、各器種の概要を述べる。

第２表　13 号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,596 ／ 36）

器種	坏 B（蓋・身）		坏 E	坏 A	盤 A	盤 B	埦類	皿類	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	210	324	31	428	390	105	32	23	1,333
占有率 (%)	24.3		2.3	32.1	29.3	7.9	2.4	1.7	83.5

器種	鉢類	瓶類（瓶 D 内訳）	壺類	貯蔵具計
口縁部計測値 (/36)	101	123	63	39	263
占有率 (%)	38.4	46.8	24.0	14.8	16.5

1　食膳具

〈坏 B（1 ～ 16）〉　蓋口径から法量分化を見ると、18cm 以上を特大、18cm 未満 15cm 以上を大、15cm 未満 12cm 以上を中、12cm 未満を小の 4 法量に分けられる。小法量は口縁端部折り曲げの無いタイプ（8）として作り分けるが、極わずかである。大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大 4%、大 71%、中 22%、小 2% となり、特大・大法量が７割以上を占める。

蓋は全形の分かるものでは有紐が主体と言えるが、破片で柱状重ね焼き（Ⅲ類）を確認しており、無紐も確実に存在している。つまみは宝珠形あるいは擬宝珠形（1・2・4 ～ 8）があり、小型化の傾向にある（6 ～ 8）。主に大法量では厚手（4・7）・薄手（1・2・5・6）の２種があるほか、天井部平らの偏平器形（2・7）と天井部丸くやや器高の高い器形（1・4・5・6）に分けられる。端部は折り曲げるものと鋭く突出するものが中心となる。天井部ヘラケズリは確認できていない。

身は蓋よりも口径が 1 ～ 1.5cm 程小さくなるサイズで、体部外傾する。径高指数は大法量 40 前後、中小法量 35 ～ 40 で、大法量よりも中小法量（特に小法量）の方が偏平な器形となる。また、台径指数は大法量 57 ～ 63 に対し、小法量は 65 以上となり、大法量で台部小型化と体部外傾が顕著であることが分かる。底部及び体部の明瞭なヘラケズリは確認できていない。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数 64 点中で、Ⅰ類２点（3%）、Ⅱ a 類 52 点（81%）、Ⅱ b 類５点（8%）、Ⅲ類５点（8%）とⅡ a 類が突出して多く、Ⅲ類は無紐蓋の存在を示すものである。以下、無蓋器種に関しては、Ⅲ類が主体となる。

〈坏 E（17）〉　口径 12.4cm のものを１点確認している。底部大きめで体部直立気味に外傾し、薄手づくりである。二ツ梨一貫山３号窯灰原（小松市教委 2002）の B1 類に該当すると考えられる。

〈坏 A（18 ～ 23）〉　全形が分かるものが少ないが、食膳具の中で最も高い占有率をもつ器種である。口径 12 ～ 13cm の 1 法量。舟底状ピット出土の 18・19 は径高指数 25 前後となり、体部薄手で外傾する。灰原から抽出した 20 ～ 22 は白色堅緻焼成、23 は体部に沈線を施し底部が極端に厚くなるもので、本窯に属すると判断したが、混入かもしれない。

〈盤 A（24 ～ 33）〉　口径は概ね 15 ～ 17cm、器高 2cm 前後に分布する。底部から体部立ち上がり付近が厚く、外面の強いナデによって直線的あるいはやや外反気味に外傾するものが多い。坏 A とともに食膳具の中で高い占有率をもつ。

〈盤 B（34 ～ 37）〉　口径は概ね 18.5 ～ 21cm に分布する。すべて灰原出土であるが、形態的特徴から本窯に伴うものと判断した。坏 A・盤 A 同様に体部外傾し、底部が丸味を帯びるタイプ（34・35）と体部が外反気味になるタイプ（36・37）がある。底部ヘラケズリの比率は算出していないが、計測個体中でわずかに確認している。

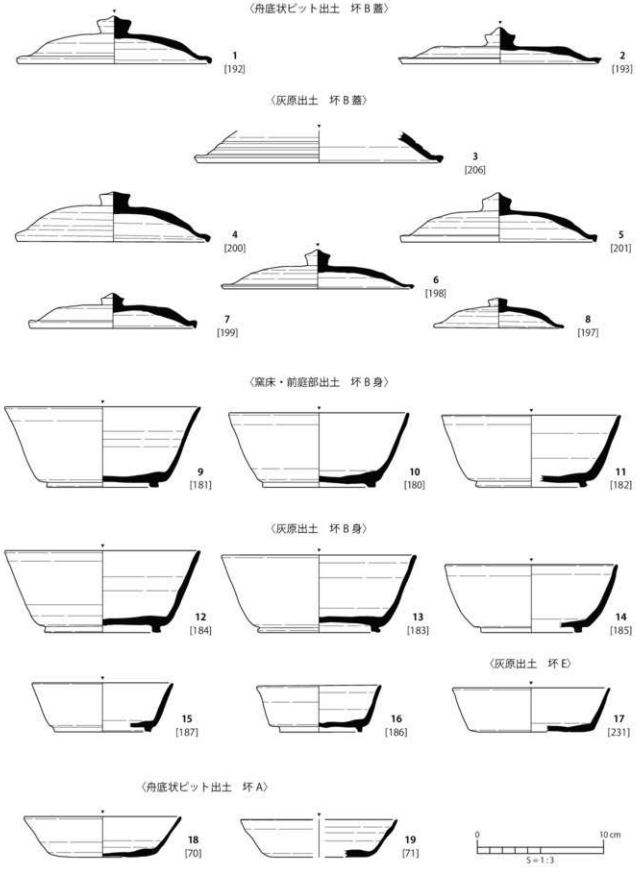
〈埦皿類（38）〉　冒頭で述べたとおり、すべて口縁部片から分類しており、埦に関しては図化に耐えうるものがなかった。皿については、図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、体部上半にロクロヒダが残る薄手の破片を提示した。古有率が圧倒的に低く、本窯では未だ定量生産には至っていないと判断される。

2　貯蔵具

〈鉢類（40 ～ 43）〉　鉢 B・鉢 E・鉢 F を確認しているが、鉢 F は小破片で図化できなかった。把手付の鉢 B（42）は古代Ⅴ期以降消失するタイプで、編年の指標となる。鉢 E は口径 20cm以上と 16cm程（43）の 2 法量がある。同時期の能美窯跡群で生産が確認されており、$Ⅴ_1$ 期（和気後山谷 1 号窯）から$Ⅴ_2$ 期（和気白石窯）にかけてやや小型化し、口縁端部内湾するものと短く摘み上げるものがある（辰口町教委 2005）。本窯でも前者（43）のほか、後者も灰原出土のもので 4 個体確認している。薄手で体部下半にヘラケズリを施し、丁寧なつくりである。

〈瓶類（39・44 ～ 48）〉　瓶 B と瓶 D を確認しており、後者が主体となる。瓶 B（44 ～ 47）は、口頸部が外反弱くたちあがり先端に向かって極端に薄手となる形態や、頸胴境界に突帯を巡らせるのはⅤ期的な要素である。頸部接合法は風船技法 A2 類（44）ないしは A3 類（45・46）を採用する。瓶 D は容量 11 ℓ 程の大法量（48）を抽出したが、頸部接合に開口法 B 類ではなく風船技法 A3 類を採用し、頸径大きく頸部が立ち気味となる古手の器形を示す。ただし耳下方が胴部の下へ伸びるという新しい要素が加わっている。体部下半には丁寧な回転ヘラケズリを施す。口径から概ね 19cm 以上、12 ～ 15cm、10cm 以下の 3 法量に分かれると推測され、小型品（39）も生産される。

〈壺類（228 ～ 255）〉　壺 A と壺 F を確認している。壺 A は前庭部から出土した口径 12 ～ 13cm の蓋を基準に、灰原から蓋身を抽出した。身は口径 10cm 程、容量 3 ～ 4 ℓ 程で、脚台のつく器形である。蓋は天井部ヘラケズリし、宝珠形のつまみがつく。蓋身ともに堅緻に焼かれており、降灰や釉着が顕著である。台部は焚口前面土坑付近で足高タイプを確認している。壺 F は窯体内で図化できるものはなかったが、灰原出土遺物として提示した 281 と 282 が焼き色からみると本窯に属するものかもしれない。ただし、この器種はⅤ期からⅥ期にかけて形態的な変化が乏しいため、本窯に伴うものとして扱うのを避けた。



第７図　13 号窯 遺物実測図１

〈灰原出土　坏 A〉

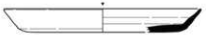
20
[227]

21
[225]

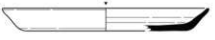
22
[234]

23
[237]

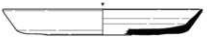
〈窯床・舟底状ピット出土　盤 A〉



24
[72]



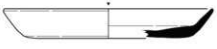
25
[73]



26
[74]

27
[75]

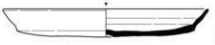
〈灰原出土　盤 A〉



28
[239]

29
[240]

30
[241]



31
[249]

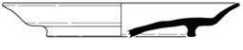
32
[254]

33
[246]

〈灰原出土　盤 B〉

34
[204]

35
[205]



36
[202]

37
[203]

〈舟底状ピット出土　皿〉

38
[188]

〈舟底状ピット出土　小型瓶〉

39
[191]

第 8 図　13 号窯 遺物実測図 2

〈窯前庭部出土　鉢 B〉

40
[130]

41
[176]

〈窯前庭部出土　鉢 E〉

43
[175]

〈窯前庭部出土　瓶 B〉

44
[119]

〈6 号窯埋土・東側堆積出土　瓶 D〉

48
[102]

〈灰原出土　鉢 B〉

42
[165]

〈6 号窯床下・灰原出土　瓶 B〉

45
[93]

46
[94]

47
[95]

〈窯前庭部出土　壺 A 蓋〉

49
[194]

50
[195]

〈灰原出土　壺 A 蓋〉

51
[208]

52
[209]

〈灰原出土　壺 A〉

53
[140]

0　10 cm
S＝1：4

第 9 図　13 号窯 遺物実測図 3

第３節　６号窯関連遺物

６号窯は３窯の中で最も遺物出土量が多いが、窯埋土及び東側堆積には 13 号窯や５号窯との接合資料も多く、時期が混在する。よって、窯体内出土遺物、窯埋土出土遺物、東側堆積出土遺物の３つに分け、窯体内出土遺物を参照しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第３～５表のとおりである。第３表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の埦皿合わせて 78% 程の占有率で、ヘラ切り器種の坏盤が伴う。埦は無台Ａと有台Ｂがほぼ同率で存在し、有台皿Ｂが埦類をしのぐ。無台皿Ａは窯埋土でわずかに出土するのみである。坏盤は無台Ａがそれぞれ１割程残存する。貯蔵具では瓶類、特に瓶Ｄが他を圧倒し、９割近くを占める。窯埋土及び東側堆積からは煮炊具の長胴釜が出土しているが、窯体内からの出土はなく、５号窯からの混入かもしれない。各器種の焼成度合いにはバラつきがあるが、灰色～青灰色の製品が多くみられる。以下、各器種の概要を述べる。

第３表　６号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 2,112 ／ 36）

器種	坏Ａ	盤Ａ	埦Ａ	埦Ｂ	皿Ｂ	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	185	205	354	378	631	1,753
占有率 (%)	10.6	11.7	20.2	21.6	36.0	83.0
器種	鉢類	瓶類 (瓶Ｄ内訳)		壺類	甕類	貯蔵具計
口縁部計測値 (/36)	6	319	310	21	13	359
占有率 (%)	1.7	88.9	86.4	5.8	3.6	17.0

第４表　６号窯 窯埋土器種構成表（口縁部計測値総計 3,027 ／ 36）

器種	坏Ｂ（蓋・身）		坏Ｅ	坏Ａ	盤Ａ	埦Ａ	埦Ｂ	皿Ａ	皿Ｂ	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	31	7	13	782	234	582	731	71	189	2,633
占有率 (%)	1.2		0.5	29.7	8.9	22.1	27.8	2.7	7.2	87.0
器種	鉢類	瓶類 (瓶Ｄ内訳)		壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計		
口縁部計測値 (/36)	60	217	189	78	13	368	26	26		
占有率 (%)	16.3	59.0	51.4	21.2	3.5	12.2	100.0	0.9		

第５表　６号窯 東側堆積器種構成表（口縁部計測値総計 1,412 ／ 36）

器種	坏Ｂ（蓋・身）		坏Ａ	盤Ａ	埦Ａ	埦Ｂ	皿Ａ	皿Ｂ	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	50	0	360	96	301	182	96	89	1,174
占有率 (%)	4.3		30.7	8.2	25.6	15.5	8.2	7.6	83.1
器種	鉢類	瓶類 (瓶Ｄ内訳)		壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計	
口縁部計測値 (/36)	16	135	131	52	12	215	23	23	
占有率 (%)	7.4	62.8	60.9	24.2	5.6	15.2	100.0	1.6	

１　食膳具

〈坏 E（66）〉　口径 13.2cm、底径 9.2cm、器高 4.5cm と、底径大きく体部が立つ深身器形で、坏 A とは異なる器形である。5 号窯埋土出土であるが、5 号窯では衰退した器種で 13 号窯よりも後出的な特徴をもつため、本窯に含めた。しかし、本窯でも有蓋の坏 B の出土は窯体内で認められず、蓋が欠落した状態で残存したものかもしれない。

〈坏 A（54 ～ 65）〉　口径 13cm 前後で、器高 2.5 ～ 3cm 前後を測り、径高指数 20 ～ 25 とやや偏平な器形が主体となる。窯埋土出土のやや深身のもの（62・63）や底部が丸く埦形となるもの（59）は、13 号窯製品の混入かもしれない。

〈盤 A（67 ～ 75）〉　口径は概ね 14 ～ 15cm、器高 2cm 前後に分布する。時期が下るにつれて体部長が短くなり偏平化する傾向にあるが、舟底状ピット出土のもの（67・69・70）は体部が長く立ち上がり、床面出土のもの（68）はやや体部短く偏平となる。灰原では底部が極めて薄く、器高 1.6cm しかない未期的な器形もみられる（75）。

〈埦 A（76 ～ 93）〉　口径 13 ～ 13.5cm 前後を測り、窯床出土のものは径高指数 27 ～ 29 にまとまるが、窯埋土出土のものには 30 以上の深身タイプが含まれる。また前者はやや厚手で底部糸切り痕を残すものが主体となるのに対し、後者は薄手で底面ヘラケズリを施して糸切り痕を消すものが存在する。

〈埦 B（94 ～ 113）〉　２法量存在し、大型Ⅰ類は口径 16 ～ 17.5cm 前後、通常Ⅱ類は口径 14.5 ～ 15.5cm 前後を中心に分布し、量比はおおまかに 1：3 であった。Ⅱ類については、径高指数が 30 より大きくなるものと、30 以下の偏平気味になるタイプ（97 ～ 99・109・112）が存在する。器形は体部内湾して立ち上がるものと、外傾して直線的になるものがある。台径はⅠ類が 8cm 台、Ⅱ類が 7cm 前後主体で 6cm 程の小型になるもの（112）が伴う。台径指数はⅡ類で 48・49 を中心に分布する。ヘラケズリは底面まで施して糸切り痕が残らないもの（101・105）もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものが多くみられ、ヘラケズリのないもの（100・102・104・106・109）もある。窯体内出土のものはやや厚手のものが多いが、窯埋土には極めて薄手になるもの（107 ～ 109）が存在する。以上の中で、体部の外傾化、径高指数の低下、高台径の縮小、高台高の低下、つくりの粗雑化、ヘラケズリの省略は、新しい要素にあげられる。

〈皿 A（114）〉　窯体内からの出土は認められず、全形の分かるものは窯埋土出土の 1 点のみである。114 は口径 13cm、底径 6.6cm、器高 2.7cm で、分厚い底部から外反して開く器形となる。ヘラケズリはなく、底部付近にカキメ風の工具痕が残る。5 号窯埋土と混在しているが、焼き色から判断して本窯に含めた。

〈皿 B（115 ～ 136）〉　食膳具で最も高い占有率をもつ器種である。口径は 13cm 前後を測り、径高指数は 20 ～ 22 を中心に分布し、19 以下の偏平なタイプ（127・128・132）と 24 以上の皿部の深いタイプ（124・125）も存在する。変化は埦 B 同様に高台径の小型化や高台高の低下、あるいは高台の踏ん張りが開く傾向にあるが、逆に高台径が大きめのもの（125・132）や 1cm 以上の高い高台のつくもの（86・87）は古い要素として捉えられる。ヘラケズリは底面まで施すもの（116・118・126・128・131）もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものや、ヘラケズリのないものの方が多い。129 は高台端部が三角形状となり、皿部が埦形となるタイプで、より新しい要素としてあげられる。

2　貯蔵具

〈鉢類（137～141）〉　鉢B・鉢C・鉢Fを確認している。主体となるのは鉢Bで、口径から28cm以上、21～26cm、15cm前後に法量のまとまりがあると推測される。肩がしっかりと屈曲し、内外カキメを施すもの（137）や体部下半に手持ちヘラケズリ、底面に回転ヘラケズリを施すもの（138・139）が認められる。鉢C（140）は口径26cmの無台埦形で、体部上半にロクロヒダを残し、下半から底面にかけて回転ヘラケズリを施す。鉢F（141）は口径17cmの内湾器形。口縁端部を面取りしつつ外面を突出させ、体部に1条の突帯を巡らせる。

〈瓶類（142～155）〉　瓶Bと瓶Dを確認しており、瓶Dが窯体内出土貯蔵具内で8割以上と突出している。特に口径20cm前後で容量8～9ℓ台の大法量は5個体がまとまって出土しており、器形にも統一感があって同一工人による製作を示唆するものである（147～151）。耳が垂れ下がる新しい要素をもつ。ほかに口径14cm前後（144・145・155）と口径12～13cm（容量2～3ℓ前後、142・143・146・153・154）にまとまりがありそうだが、その差は近接している。通常$Ⅵ_2$～$Ⅵ_3$期には耳孔の数に対応して3法量が認められるが、新しくなるにつれてその規格がくずれていく傾向にある。

〈壺類（156～162）〉　壺Aと壺Fを確認している。壺Aは窯床から足高の台部が出土している（156・157）。ほかに窯埋土から口径14.4cmの蓋を抽出しており、つまみ形状や青灰色系の焼き色から13号窯ではなく本窯に含めた。壺Fは、窯床出土で体部から底部に平行線文叩き出し成形を行う個体が認められ、底部が極端に薄手となる（159）。東側堆積出土の162は下層の灰層出土で本窯に伴うものとしたが、内外に釉が付着しており159との焼き色が異なるため、混入の可能性もある。底部にはD類焼台が溶着している。

〈甕類（163）〉　甕は口径30cm以上の大甕と、口径20cm台の中甕（163）を確認しており、後者が多い。163は口頸部が外反気味に立ち上がり、胴部砲弾形となる。胴部の叩き成形は、外面縦軸の平行線文叩き出し（Ha類）後カキメ調整、内面無文当て具後擦り消しを行っている。叩き工具痕の集計・分類はできていない。

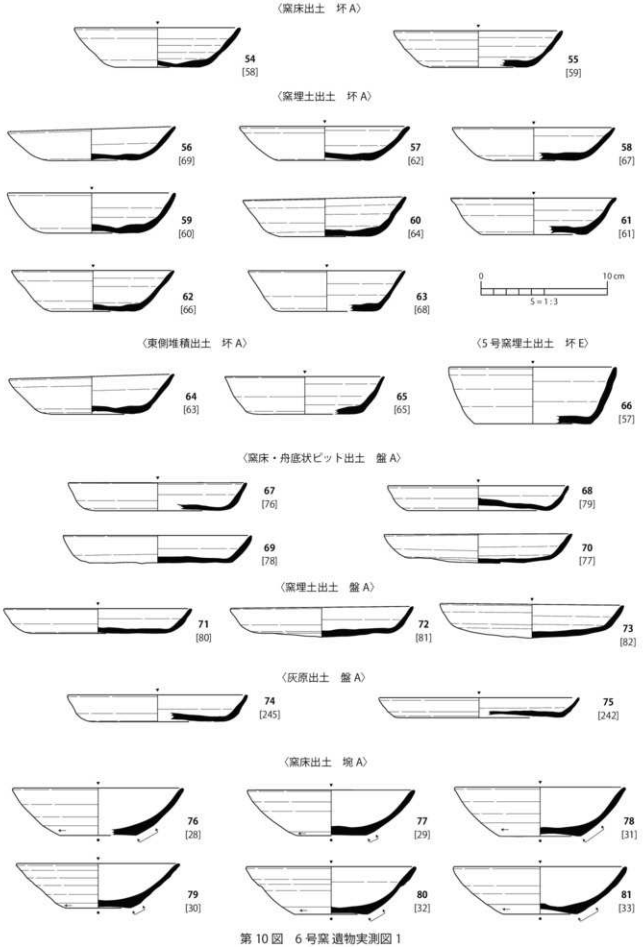
3　煮炊具

長胴釜のみ窯埋土と東側堆積で確認している。通常は土師器煮炊具として焼成されるものを還元焔焼成している器種で、胎土も混和材の礫粒を多量に含むものが存在する。後述する5号窯土器集中でまとまった出土があるが、それらに比べて164は若干焼き色が異なり、土器集中出土遺物が白色から明青灰色を呈するのに対し、164は青灰色が濃く、本窯由来として扱った。ただし口縁端部の摘み上げに大きな違いは認められず、時期差を捉えることはできない。164は口径23.1cmを測り、叩き工具痕は外面平行線文叩き出し（He類）となり、内面当て具痕は擦り消していて不明である。カキメ調整は行っていない。

4　その他の製品

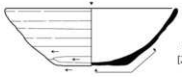
165と166は小型貯蔵具の瓶である。165は体部下半がすぼまる器形で、166はいわゆる徳利形の後出的な器形を呈する。両方ともに底部糸切り痕が残る。

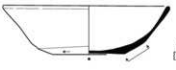
167～171は管状土錘（陶錘）である。全て窯体外からの出土であるため、13号窯及び5号窯からの混入の可能性も考えられる。図化した5点は窯埋土と東側堆積からの出土で、これらのほかに

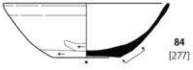


第 10 図　6 号窯 遺物実測図 1

〈窯埋土出土　埴 A〉

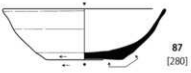

82
[273]


83
[274]

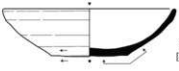

84
[277]

85
[278]

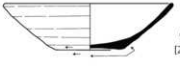
86
[279]


87
[280]

88
[281]


89
[282]

90
[284]

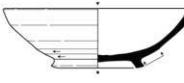

91
[275]

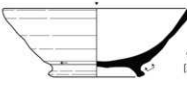
92
[276]

〈東側堆積出土　埴 A〉

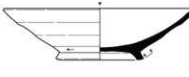
93
[283]

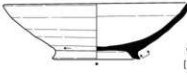
〈窯床・舟底状ピット出土　埴 B〉

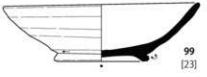

94
[18]


95
[20]

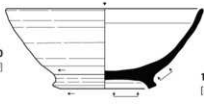
96
[22]

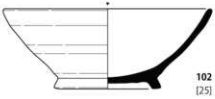

97
[16]


98
[17]


99
[23]

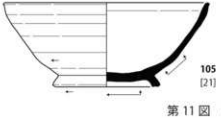
100
[19]


101
[24]

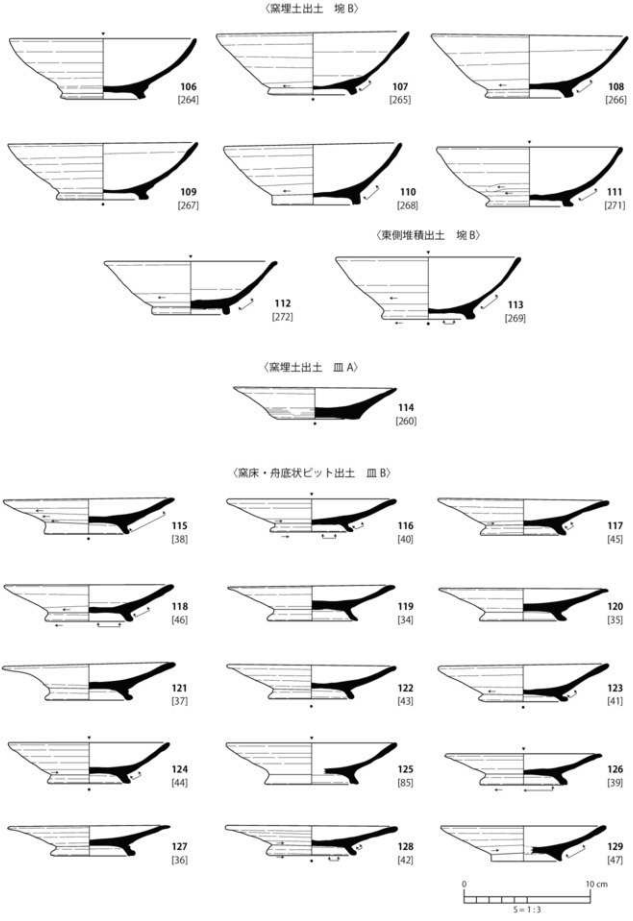

102
[25]

103
[26]

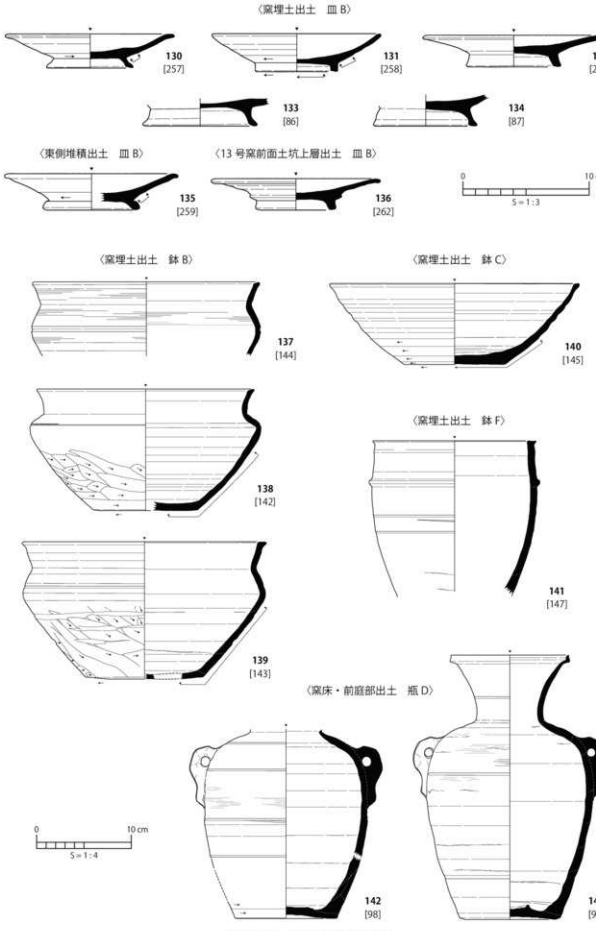
104
[27]


105
[21]

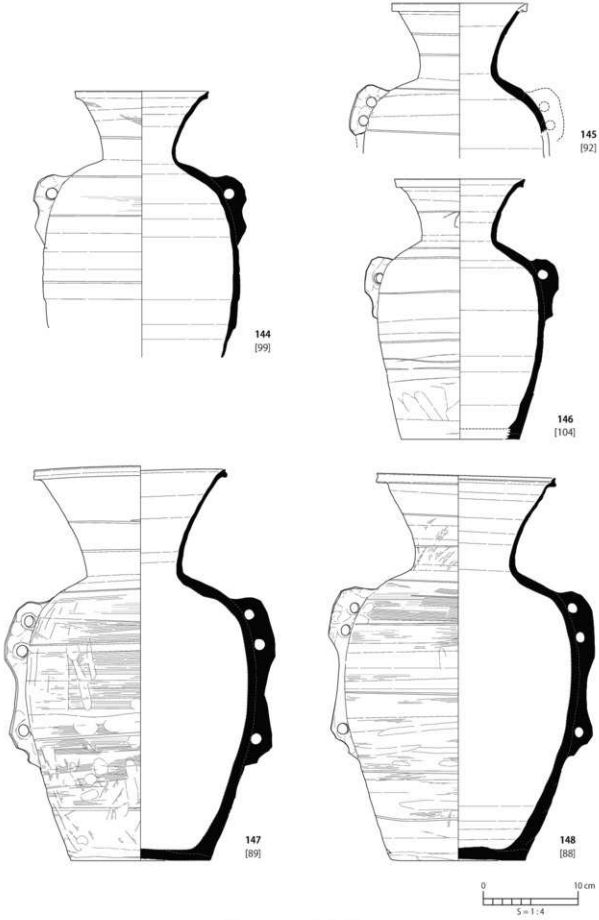
第 11 図　6 号窯 遺物実測図 2



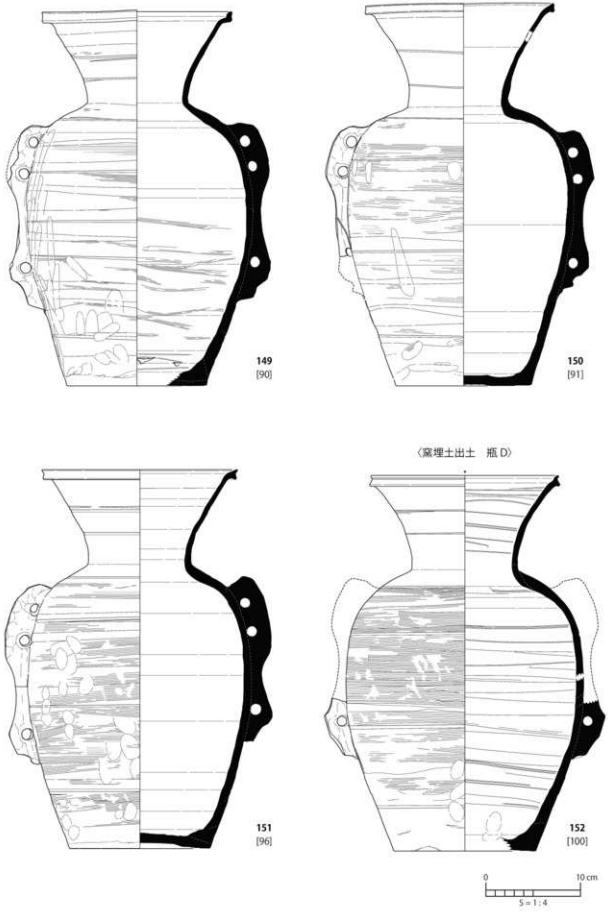
第 12 図　6 号窯 遺物実測図 3



第 13 図　6 号窯 遺物実測図 4

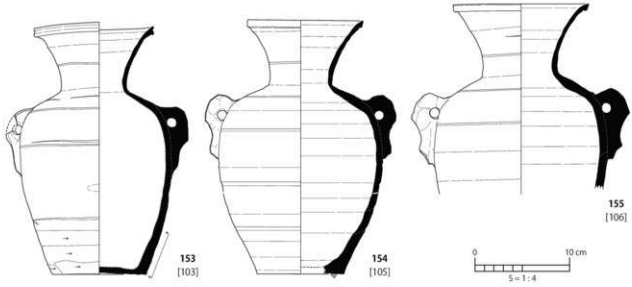


第 14 図　6 号窯 遺物実測図 5

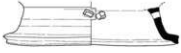


第 15 図　6 号窯 遺物実測図 6

〈東側堆積出土　瓶 D〉

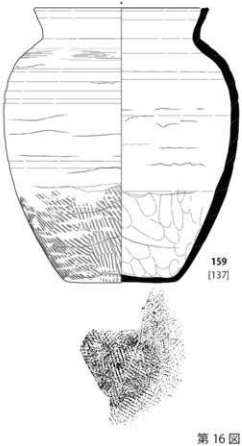


〈窯床出土　壺 A 台部〉

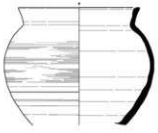


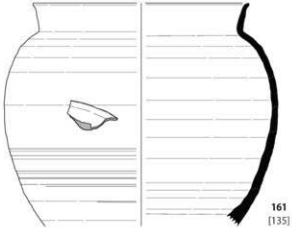
〈窯埋土出土　壺 A 蓋〉

〈窯床出土　壺 F〉

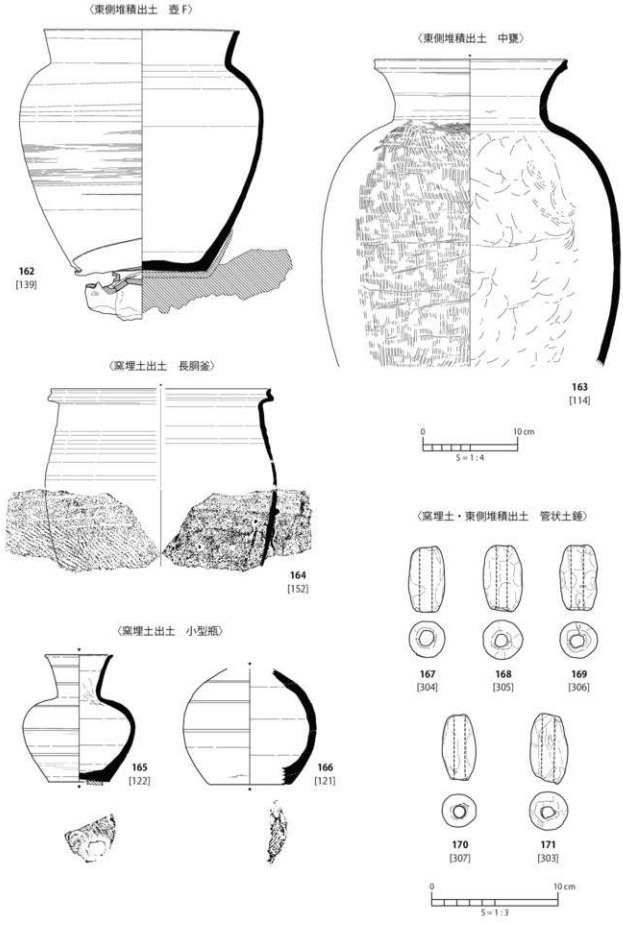


〈窯埋土出土　壺 F〉





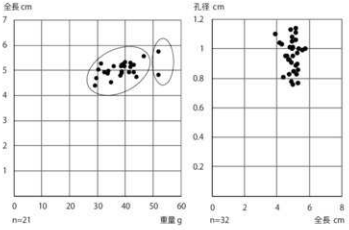
第 16 図　6 号窯 遺物実測図 7



第 17 図　6 号窯 遺物実測図 8

灰原から 33 点が出土している（未図化）。その中で、計測可能な 32 点を対象として第 18 図に法量・重量分布を示した。

図左の全長と重量の関係では、重量 30 ～ 50g と 50g 以上の２つのグループに分けられ、前者は全長４～ 6cm、最大幅 2.5 ～ 3cm 程で推移し、全長に比例して重くなる傾向にある。後者は２点のうち全長が 5cm を下回るものは最大幅が 3.4cm 程と計測点数中で最も大きく、より膨らみの強いものである。図右の全長と孔径の関係では、全長に比例することなく、孔径は全体的に 0.8 ～ 1.2cm の間にまとまる傾向にある。焼成度合いは白っぽい生焼けのものから降灰・釉付着するものまでバラつきがあり、表面には指頭圧痕が明瞭である。



第 18 図　管状土錘法量・重量分布図

第４節　５号窯関連遺物

５号窯は、窯体構造（下降傾斜燃焼部構造、焼成部口の急激な絞り込み、焼成部床面の急傾斜と段構築、釣り鐘形の焼成部平面形）から、10 世紀代に位置づけられることはほぼ間違いない（小松市教委 2015）。出土遺物は６号窯と同様に窯体内、窯埋土、本窯由来と考えられる土器集中に分けて、窯体内出土遺物を参照しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第６～８表のとおりである。第６表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の埦皿合わせて 86% 程と占有率が高く、ヘラ切り器種の坏Ａがわずかに残存する。埦は無台Ａよりも有台Ｂが優占し、有台皿Ｂが伴う。無台皿Ａは確認できていない。貯蔵具では鉢

第６表　５号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,101 ／ 36）

器種	坏Ａ	埦Ａ	埦Ｂ	皿Ｂ	食膳具計			
口縁部計測値 (/36)	119	193	304	224	840			
占有率 (%)	14.2	23.0	36.2	26.7	76.3			
器種	鉢類	瓶類 (瓶Ｄ内訳)		壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	99	35	31	62	52	248	13	13
占有率 (%)	39.9	14.1	12.5	25.0	21.0	22.5	100.0	1.2

第７表　５号窯 窯埋土器種構成表（口縁部計測値総計 664 ／ 36）

器種	坏Ａ	埦Ａ	埦Ｂ	食膳具計			
口縁部計測値 (/36)	92	145	89	326			
占有率 (%)	28.2	44.5	27.3	49.1			
器種	鉢類	瓶類 (瓶Ｄ内訳)		壺類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	135	140	140	37	312	26	26
占有率 (%)	43.3	44.9	44.9	11.9	47.0	100.0	3.9

第 8 表　5 号窯 土器集中器種構成表（口縁部計測値総計 599 ／ 36）

器種	坏 A	盤 A	埦 A	埦 B	皿 B	食膳具計	
口縁部計測値 (/36)	105	7	166	39	51	368	
占有率 (%)	28.5	1.9	45.1	10.6	13.9	61.4	
器種	鉢類	瓶類 (瓶 D 内訳)		壺類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	0	144	73	2	146	85	85
占有率 (%)	0.0	98.6	65.2	1.4	24.4	100.0	14.2

類の出土が多く、壺と甕がそれに次ぐ。特に狭口なで肩（あるいはやや肩張り）の壺 G や大型厚手で甕に類する甑形深鉢は特徴的な器種である。瓶類の出土が最も少ない。なお、灰原斜面下で検出した SK07 から本窯に伴う可能性の高い貯蔵具が出土しており、残存率が高い製品を含んでいたため図化した。煮炊具は窯体内、窯埋土、土器集中の 3 箇所すべてで長胴釜が出土しており、本窯で生産されたと考えられる。各器種の焼成度合いは不良なものが多く、白色の生焼けや黄～橙色の土師質のものが目立つ。後者は無垢土師器として意図的に焼成された可能性があるが、須恵器器種として一括し、図化したものは断面白抜き表現としている。以下、各器種の概要を述べる。

1　食膳具

〈坏 A（172 ～ 180）〉　本窯が属する 10 世紀代においては衰退器種にあたる。ただし、当窯跡群 1 号窯（1 － A 号窯）灰原や戸津 37・44・47 号窯等、埦皿器種統一段階の初期に坏 A や盤 A が残存する現象が確認されており、系譜の異なる器形の導入も指摘されている（小松市教委 1993）。口径は 13 ～ 14cm 前後で、径高指数は 20 未満の偏平器形（172）、20 ～ 24 のやや偏平な器形（173 ～ 175・177・180）、25 以上の深身器形（176・178・179）と多様で、窯床出土のものに限ってみても統一感に欠ける。

〈埦 A（181 ～ 185）〉　口径 13cm 前後を測り、窯床出土のものは底径 6cm 以上、ほか前庭部・窯埋土出土のものは底径 5cm 前後である。後者はヘラケズリを行っているが、前者は底部付近のヘラケズリしない後出的なタイプである。径高指数は 28 ～ 35 前後に分布する。

〈埦 B（186 ～ 196）〉　2 法量存在し、大型 I 類は口径 15.5 ～ 17cm 前後、通常 II 類は口径 13 ～ 15cm 前後に分布する。I 類は径高指数 32 ～ 34（189・190）、37（191・196）があり、台径指数は 46 ～ 49 前後である。II 類は径高指数 33・34 程で、台径指数 44 ～ 48 前後となる。土器集中出土の 194 は台径指数 50 以上と高台径が大きく、降灰する堅緻焼成で混入の可能性が高い。逆に 188 は台径指数 44 と高台径が小さく体部が外傾する新しいタイプである。高台のつくりは全体的に雑で、ベタ高台気味となるものが散見される（192・193・195）。

〈皿 B（197 ～ 201）〉　口径は 13 ～ 14cm 前後、台径 6 ～ 7cm を測り、径高指数 21 のやや偏平なタイプ（200）と 25 前後の皿部の深いタイプ（197 ～ 199）が存在する。台径指数は 48 ～ 53 程だが、201 は台径指数 45 の小型高台で埦形の皿部をもつ新しいタイプである。197 の底面ヘラケズリは砂粒の動きから判断したが、入念ではなく、ナデ仕上げが主体である。

2　貯蔵具

〈鉢類（202 ～ 209）〉　鉢 B と鉢 F を確認している。主体は鉢 B で、口径 20 ～ 24cm 前後にまとまり、伝統的な肩が屈曲して口頸が長く外傾するタイプ（202）のほか、口頸が長く直立するタイプ（203）

や、肩が内湾して口頸が短く内傾するタイプ（204・205・207・209）や短く直立するタイプ（205・208）は 10 世紀代に特徴的な新しい器形である。未図化だが、この新器形は破片で窯床でも確認している。底面にかけて手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施す。208 は体部下位にススが付着する。鉢 F（210）は口径 17.8cm を測り、口縁端部を外反させ、体部に２条の突帯を巡らせる。器面調整は粗く、底部は糸切り後ヘラ先刺突する。

〈瓶類（213 ～ 220）〉　瓶 B と瓶 D を確認している。土器集中出土の瓶 B（211・212）は口径 10cm 程、台径 8cm 程を測るが、両方ともゆがみが激しく誤差があるかもしれない。瓶 D は耳孔に対応した法量規格がくずれて捉えづらいが、３法量は継続すると推測される。土器集中から小法量がまとまって出土しており、いずれも厚手で器面調整が雑な傾向にあり、沈線が乱れて耳が左右非対称となるものが多い（213 ～ 217）。窯埋土出土の 218 は口縁端部と角張る耳形態から本窯に含めたが、薄手で６号窯埋土出土品と接合するため、混入の可能性もある。SK07 から抽出した 219・220 は口径 22cm 程の大法量で、胴部の膨らみが小さく肩張りとなる器形や外反する口頸部は 10 世紀代の特徴である。

〈壺類（221 ～ 224）〉　壺 A' と壺 G を確認している。壺 A'（221・222）は無蓋の壺 A 器形として分類したが、口径 17cm 前後と壺 A に比べて法量に大きな差がある。221 は叩き成形を行っており、外面平行線文叩き出し（He 類）後カキメ調整、内面無文当て具（SD 類）後擦り消しを施す。狭口の壺 G（223）は窯床出土で確実に本窯に伴う。口径 8.3cm、容量 4.5 ℓ を測り、体部下位にヘラケズリを施す。224 も壺 G としたが規格が異なり、胴部のつくりが瓶 B のような肩丸となる。

〈甕類（225 ～ 227）〉　窯床・窯前庭部・窯埋土で３個体の平底甕を確認しており、全形が分かるもので口径と高さが 29cm 程の横に広がる器形（225）、口径 17.8cm、器高 35.4cm と概ね器高が口径の倍になる縦長器形（226）がある。どちらも容量 15 ～ 16 ℓ 前後となる。口頸は短く外反し、胴部成形は全て外面平行線文叩き出し（He 類）、内面無文当て具（SD 類）後擦り消しを行っている。また 225 は厚手づくり、226 はやや薄手づくりとなる。

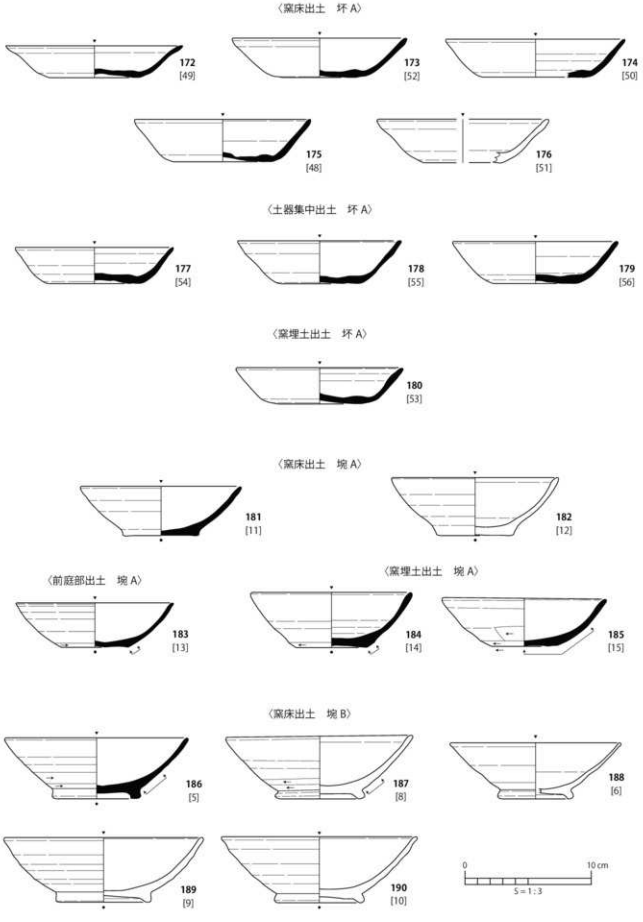
〈甑形深鉢（228）〉　168 は SK07 出土だが、本窯由来のものとして抽出した。第１節で述べたとおり、当窯跡群で初めて確認された器種である。口径 35.6cm を測り、胴部成形は外面平行線文叩き出し成形（Ha 類）、内面当て具痕擦り消しを行っており、厚手のつくりをもつ。器面に粘土紐接合痕が観察でき、焼き色は内面赤灰色系の酸化焔焼成気味だが、焼き締まりは強い。槽形の鉢 A 器形に系譜を求めることができそうだが、大型厚手でむしろ甕に類する器形であると考えられる。

3　煮炊具

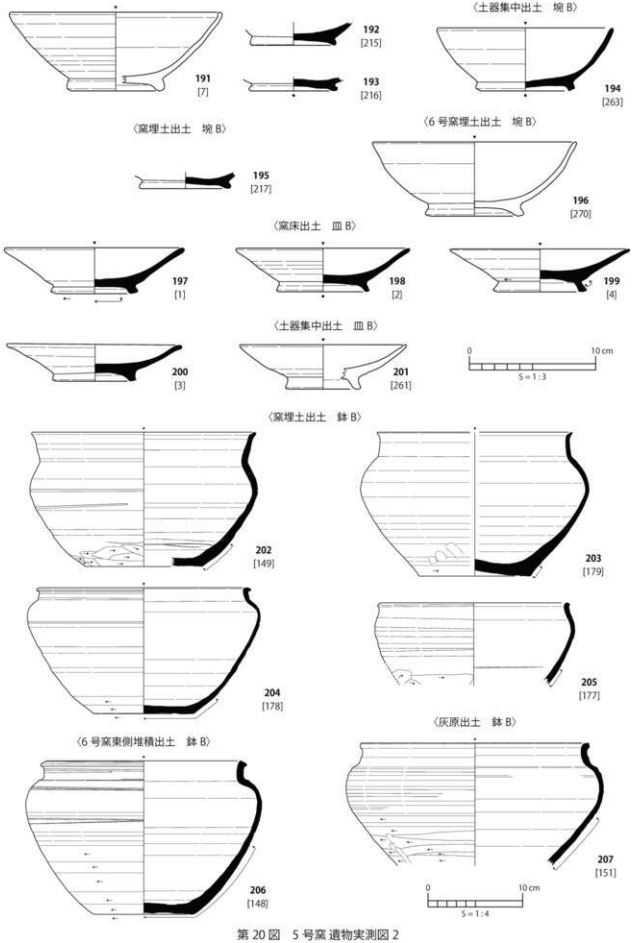
長胴釜を窯体内・窯埋土・土器集中で確認している。器形の分かる残存率の良いものは土器集中からまとまって出土しており、口径 20cm 前後（229 ～ 231）と 15cm 程（232）がある。極めて薄手のつくりをしており、口縁端部を長く摘み上げて折り返すタイプが主体で、胴部はやや下膨れ状となる。総じて成形は外面平行線文叩き出し（He 類）、内面当て具痕（確認できたものは He 類）を擦り消していて、カキメ調整は行っていない。

4　その他の製品

233 はコップ形で、口径 12cm、底径 8cm、器高 11cm 程を測る筒形平底の器形である。つくりは丁寧で、体部に５～６条の沈線を施し、底面に糸切り痕を残す。既に有蓋器種であることが蓋の出土から指摘されており（小松市教委 1993・2005）、本資料も内外面の焼き色の違いから有蓋であることが分かる。

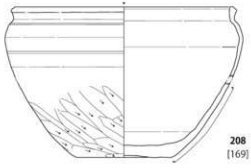


第 19 図　5 号窯 遺物実測図 1

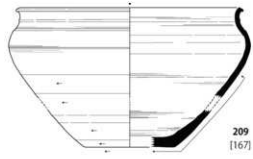


第 20 図　5 号窯 遺物実測図 2

〈SK07 出土　鉢 B〉

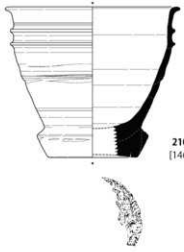


208
[169]



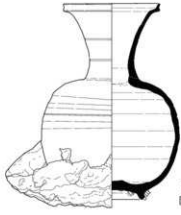
209
[167]

〈窯前庭部出土　鉢 F〉

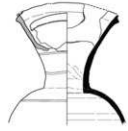


210
[146]

〈土器集中出土　瓶 B〉

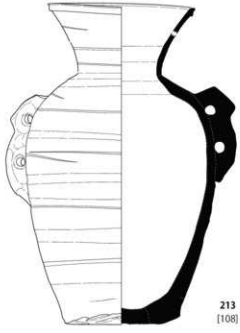


211
[107]

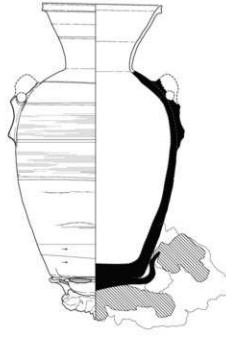


212
[118]

〈土器集中出土　瓶 D〉

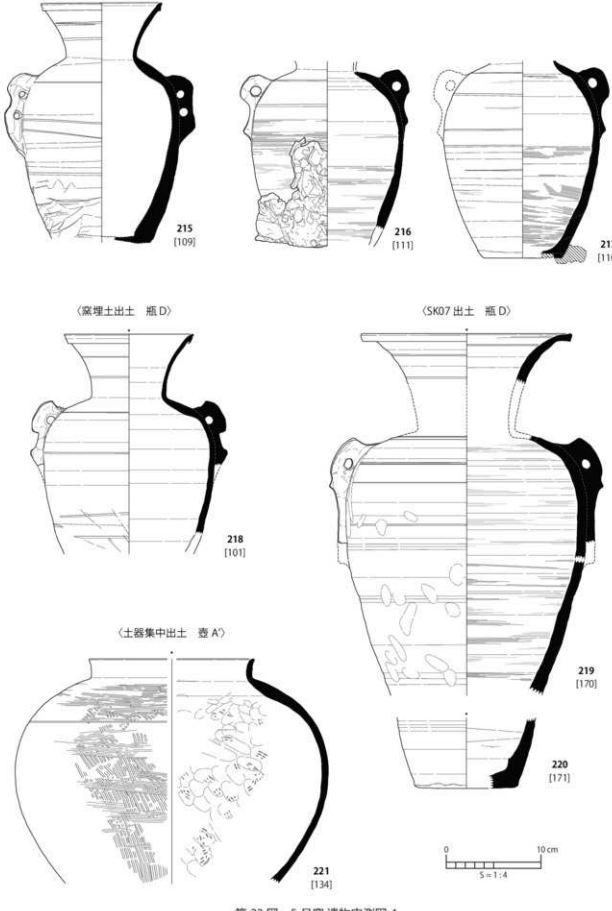


213
[108]

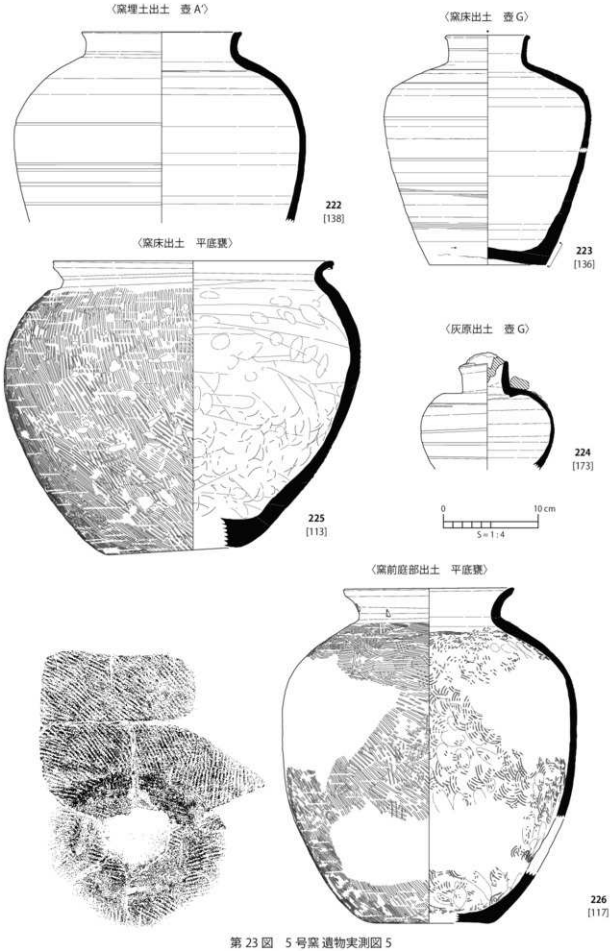


214
[112]

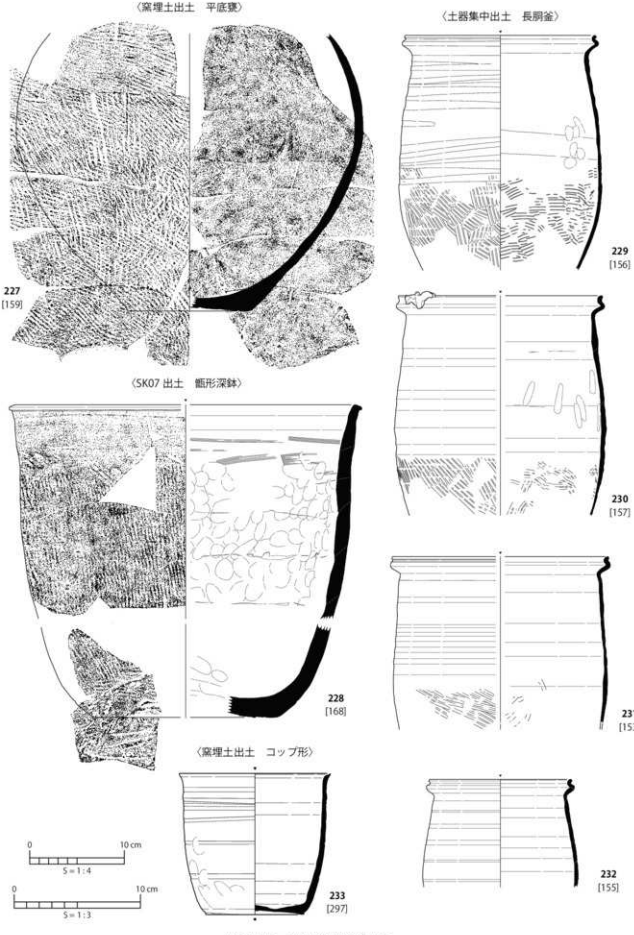
第 21 図　5 号窯 遺物実測図 3



第 22 図　5 号窯 遺物実測図 4



第 23 図　5 号窯 遺物実測図 5



第 24 図　5 号窯 遺物実測図 6

第 5 節　灰原出土遺物

本節では 13 号窯・6 号窯・5 号窯に抽出しきれなかった灰原出土遺物について、各器種の大まかな特徴と出土傾向を述べる。

第 9 表　灰原 器種構成表（口縁部計測値総計 16,194 ／ 36）

器種	坏 B（蓋・身）		坏 A	盤 A	埦 A	埦 B	皿 B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	771	503	6,547	2,024	1,232	1,875	1,787	14,236
占有率 (%)	5.4		46.0	14.2	8.7	13.2	12.6	87.9
器種	鉢類	瓶類 (瓶 D 内訳)		壺類	横瓶	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値 (/36)	265	1,069	734	220	27	103	1,684	
占有率 (%)	15.7	63.5	44.3	13.1	1.6	6.1	10.4	
器種	釜	鍋	煮炊具計					
口縁部計測値 (/36)	267	7	274					
占有率 (%)	97.4	2.6	1.7					

窯が厳密に特定できた遺物を除く器種構成は第 9 表のとおりである。食膳具が全体の 88% 程で、概ね坏盤が 6 割半、埦皿が 3 割半を占める。**坏 B** は残存率が良好で器形から 13 号窯由来と判断したもの以外の破片資料をこちらに含めたため、図化はしていない。食膳具で最も占有率が高いのは **坏 A** で、大半は体部外傾器形だが、底部の丸い埦形器形が存在する（246 ～ 249）。また体部外傾器形は、径高指数 24 ～ 27 のやや深身のもの（234 ～ 239）と径高指数 19 ～ 22 の偏平のもの（240 ～ 249）に分けられ、前者から後者へと変化する傾向にある（小松市教委 1992）。**盤 A** は 13 号窯と 6 号窯の生産器種である。口径は体部の立ち上がりがやや長いもの（250 ～ 252）、体部立ち上がりが短く外傾する器高 2cm 未満の偏平なもの（253 ～ 255）、底部がやや丸味をもって突出するもの（256 ～ 258）に分けられる。これらのタイプは明確な時期変遷を示すものではないが、坏 A 同様に偏平化の傾向にあるため、250 ～ 252 は 6 号窯に属する可能性が高い。埦皿は前述したとおり各窯の窯体内出土遺物の傾向から 6 号窯と 5 号窯の生産器種で、器形の特徴は 2 つの窯で確認した状況とほぼ同様である。**埦 A** の 259 と 260 は体部内湾し口縁部付近で外反気味にとなるもので、底部が厚手である。特に 259 は他の器形に比べてかなり異質で、施釉陶器器形を色濃く反映したものかもしれない。261 と 262 は全体的に薄手のつくりとなっている。**埦 B** は内湾器形（264・266）と外傾器形（263・265）があり、中でも 265 は厚手づくりで低く径の小さな高台がつくため、より後出的な 5 号窯に位置づけ可能かもしれない。**皿 B** は径高指数 21 ～ 23 のやや偏平となるもの(267 ～ 270)、径高指数 25 ～ 27 の皿部深身のもの（271 ～ 274）がある。268 ～ 271 は内面中央に高台痕があり、周辺が降灰して外面黒色化する焼成度合いが酷似するため、同時に正位の柱状重ね焼き（Ⅲ類）を行った可能性が高い。このほか灰原出土計測遺物中の 3 個体で同様の特徴を観察しているほか、内外の降灰と黒色化が逆転する逆位の重ね焼き痕も 1 個体確認した。皿部埦形となるもの(275) は後出的な器形で 6 号窯あるいは 5 号窯に属する可能性が高い。

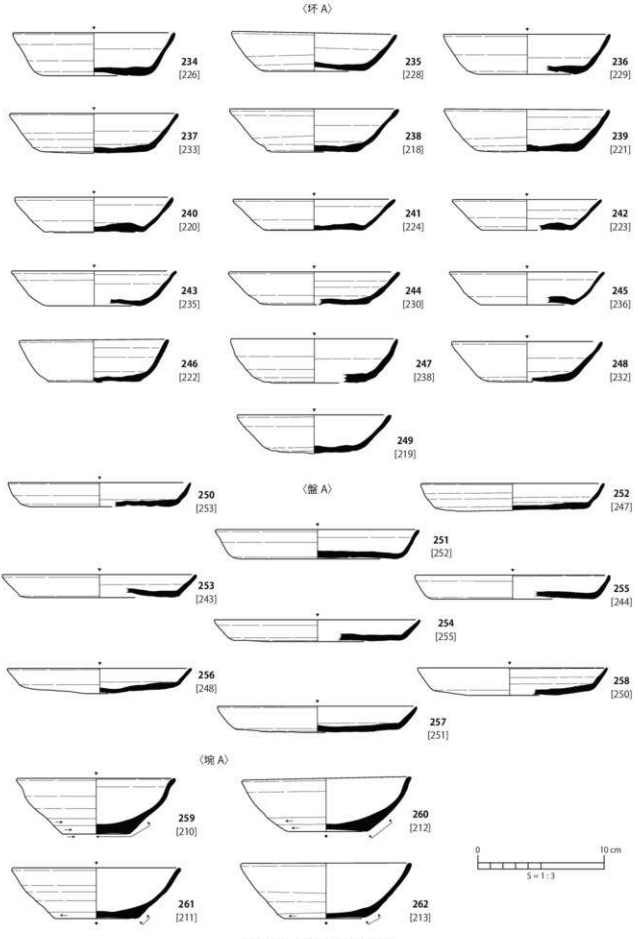
貯蔵具は全体の 10% 程度で、瓶類が約 6 割、鉢類と壺類がそれぞれ約 1 割半、横瓶と甕が残りを占める。**鉢類**は鉢 B と鉢 F を確認し、鉢 B 主体である。鉢 B（276・277）は肩がしっかりと屈曲して口頸が長く外傾する伝統的器形で、13 号窯か 6 号窯に属する。いずれも体部内外をカキメ調整し、276 は体部下位から底面をヘラケズリし、277 は糸切り痕を明瞭に残す。鉢 F（278）は 6 号窯埋土

出土の 141 に類似する。**瓶類**は瓶 B と瓶 D を確認し、瓶 D 主体である。瓶 B（279）は釉が付着し、球胴形で胴部下位にヘラケズリを施す。焼台 C 類が溶着する。瓶 D（280）は胴部を縦軸の叩き出し成形するもので、二ツ梨一貫山窯跡 F 地区５号土坑（Ⅵ$_2$期）と９号土坑（Ⅵ$_3$期）に類例がある（小松市教委 2002）。外面平行線文叩き出し（He 類）、内面平行線文当て具（He 類）後擦り消しを行っている。**壺類**は壺 A と壺 F を確認しており、壺 F 主体で、口径 20cm 前後の大型品（281・282）と口径 14cm 程の小型品（283）がある。後者は口縁端部をわずかに肥厚させており、大型品とは異なる形態をもつ。**横瓶**（284）は口頸の立ち上がりが短く、片側閉塞によって製作される。南加賀窯跡群ではⅤ期頃を境に衰退する器種で、最終段階には口頸の長い両面閉塞が主流である。よって 284 はⅣ$_2$期以前の古いタイプで、４号窯からの混入であろうか。（春日 2001）にしたがって製作の手順をみていくと、①図右側を側端部（底部側面）として粘土紐を積み上げ、全体の半分に達した段階で丸く叩き出し（外面 Ha 類・内面 Da 類擦り消し）、②再度、側端部（底部側面）を下にして図左側の閉塞側に向かって成形（閉塞は円盤痕がみとめられないため絞り切り）、③最後に閉塞側面を外側からの単独叩きとロクロナデで仕上げ、口頸部を作出する。また図の右から左に向かって釉が流れることから、図左側の閉塞側面を下にして焼成したことが分かる。両側面には円形の未釉着部分があり、焼成時に焼台を当てた痕跡と考えられる。**甕類**は口径 38cm 程の大甕（287）、口径 20cm、器高 40cm 程の砲弾形を呈する中甕（285）、口径 24cm の平底甕（286）を確認している。胴部の外面叩き出し工具は全て平行線文 He 類で、内面当て具は 285 と 286 が平行線文 He 類擦り消し、287 が無文当て具擦り消しである。法量と器形から、285 と 287 は 13 号窯か６号窯、286 は６号窯か５号窯の所産と推測される。

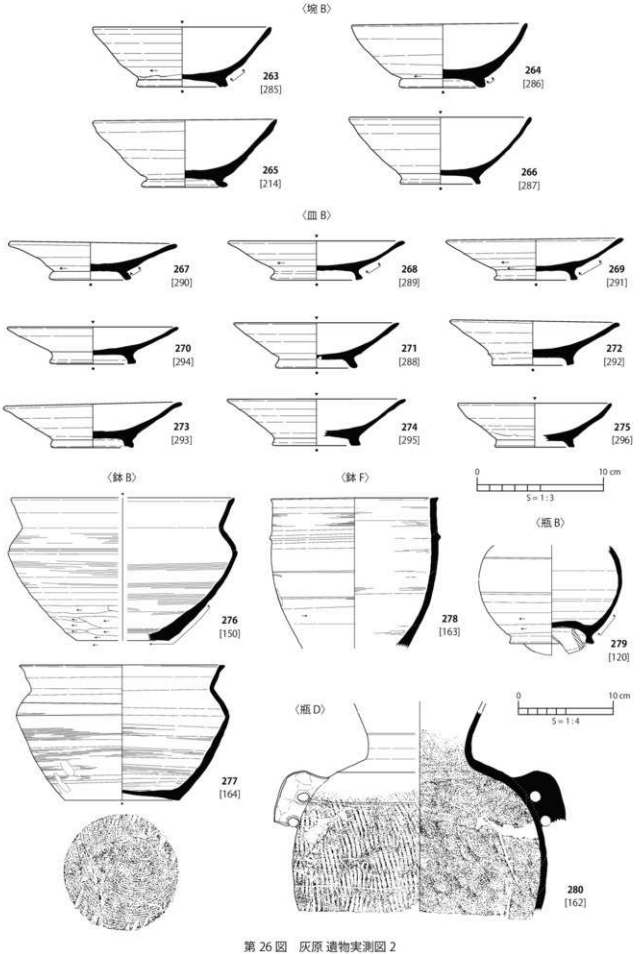
煮炊き具は釜と鍋を確認しており、**長胴釜**（288・289）が主体である。口径 20cm 前後で、器形は５号窯土器集中一括品と類似し、特に 288 は底部近くまで残存しており、下膨れ状の器形がよく分かる。いずれも胴部外面叩き出しは平行線文 He 類を用い、289 はカキメ調整が伴う。内面当て具は、288 が不明当て具擦り消し、289 が平行線文 He 類擦り消しである。

小型貯蔵具は瓶と壺を確認している。瓶は外反する口縁（290）や底部がややすぼまる形態（291 ～ 293）から、無台の瓶 B 形と考えられる。13 号窯の所産であろうか。底部には全て糸切り痕が残り、291 には「口」状のヘラ記号が施される。壺は 294 と 295 が分厚く短く立ち上がり面取りする口縁で、瓶とは異なるため、壺 G のような狭口の小型壺を想定している。296 は口径 11cm 程を測る壺 F 形の小型壺である。

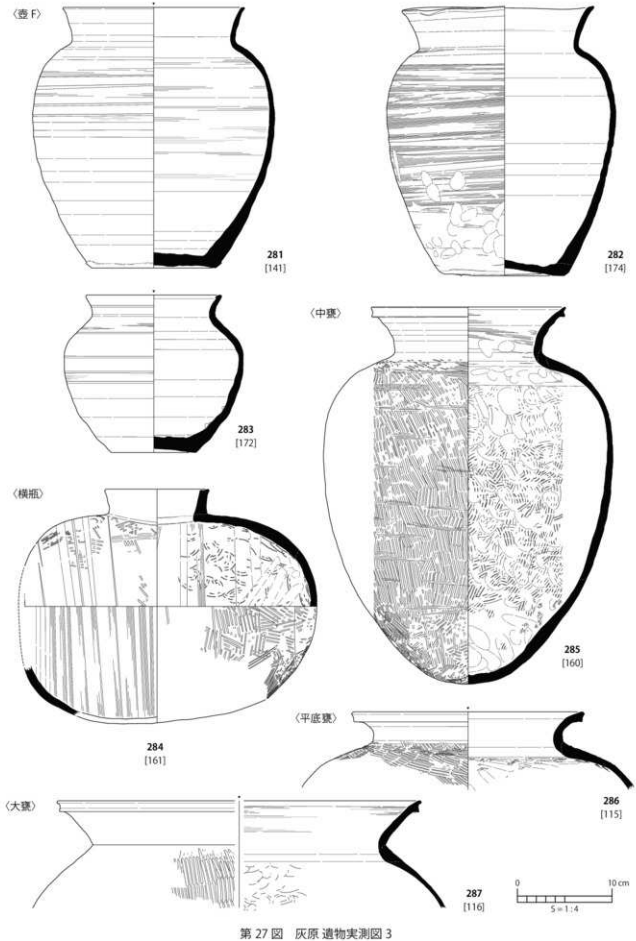
その他特殊品は、**特殊蓋**（297・298）、**円面硯**（299）、**平瓶把手**（300・301）、**獣足片**（302）を確認している。特殊蓋の 297 は宝珠形に台座がついたような高いつまみをもち、天井部ヘラケズリと内面カキメを施す丁寧なつくりで、焼成も堅緻である。298 は口径 23cm 程を測る大型法量で、つまみの有無は不明だが、天井部に輪状突帯が巡る。南加賀窯跡群で９世紀代にみられる器形である。円面硯 299 は、有堤式の硯面上部で硯面推定径 10cm 程を測る。能美・和気白石窯（Ⅴ$_2$期）にて全形の分かる優品が出土しており（辰口町教委 2005）、規模や形状から同様のタイプと推測される。300 と 301 はいずれも断面方形の平瓶把手である。同様の形状は能美・和気白石窯（Ⅴ$_2$期）に類例がある（辰口町教委 2005）。戸津８号窯（Ⅵ$_2$新期）でも出土例があるが（小松市教委 1992）、把手断面は六角形を呈し、系譜が異なると思われる。302 は獣足片としたが、爪の表現等がなく、不明確な資料である。このほか６号窯の節で述べた管状土錘が出土している。以上のうち、製品の特徴や窯の操業時期から類推すると、297・299・300・301 は 13 号窯の所産であると思われる。



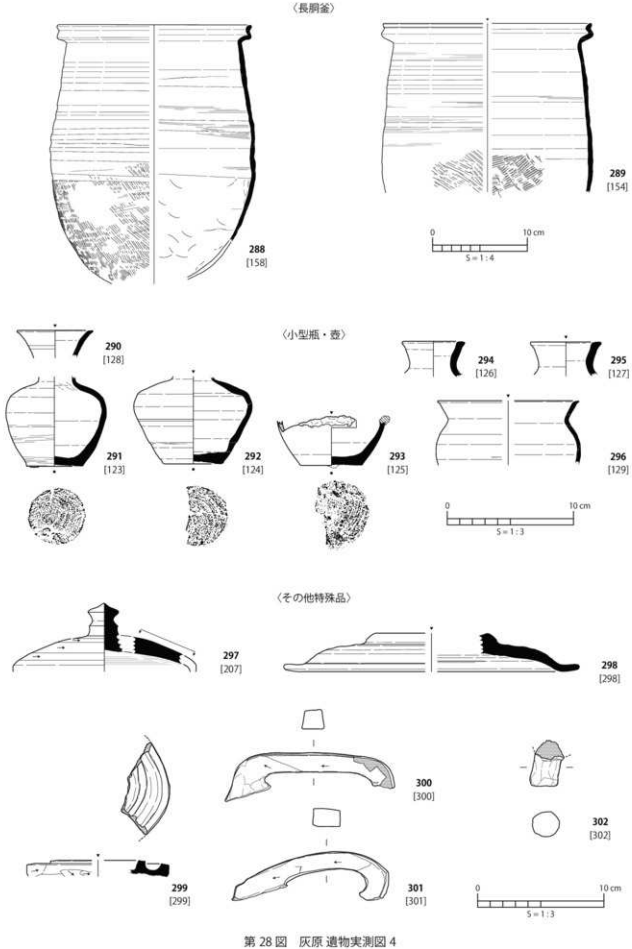
第 25 図　灰原 遺物実測図 1



第 26 図　灰原 遺物実測図 2



第 27 図　灰原 遺物実測図 3



第 28 図　灰原 遺物実測図 4

第 6 節　窯道具

本節では 13 号窯・6 号窯・5 号窯で使用された窯道具の貯蔵具専用焼台について述べる。なお、食膳具有台器種の台部片や貯蔵具胴部片等を利用した転用焼台も多数みとめられたが、詳細な分析には至らなかった。

第 10 表　焼台類型構成表（分類総数 1,009）

類型	13 号窯個体数（%）	6 号窯個体数（%）	5 号窯個体数（%）	灰原個体数（%）	全体個体数（%）
A 類	9 個（20.9）	92 個（45.3）	51 個（46.4）	239 個（36.5）	391 個（38.7）
B 類	11 個（25.6）	39 個（19.2）	42 個（38.2）	259 個（39.6）	351 個（34.8）
C 類	23 個（53.5）	46 個（22.7）	15 個（13.6）	118 個（18.0）	202 個（20.0）
D 類	0 個（0）	26 個（12.8）	2 個（1.8）	38 個（5.8）	66 個（6.5）

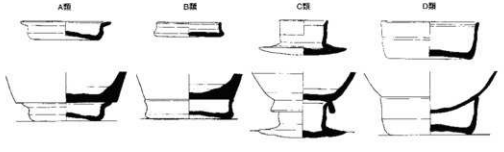
※分類不可の個体は除外

第 29 図の類型を基準に 4 分類した。A 類は底径＜口径で口縁部が外屈する平底器種用、B 類は底径≒口径で器高低めの平底器種用、C 類は底径＞口径で口縁部が内傾・内反して器高高めの有台器種用、D 類は底径≦口径で器高高めの丸底器種用が基本型・用途となる。今報告の焼台溶着例でも、平底の瓶 D に A 類使用（214）、有台の瓶 B に C 類使用（279）等、この傾向が確認できる。ただし、平底の壺 F に D 類使用（162）等、実際の使用形態は柔軟である（小松市教委 1992）。通常、南加賀窯跡群では 9 世紀以降に専用焼台を多用し、9 世紀前半代は C 類、9 世紀後半代は B 類、10 世紀代は A 類が増加傾向にある（望月 2008）。

類型構成は第 10 表のとおりである。6 号窯と 5 号窯の分類対象には窯体外出土遺物も含めたため、特に 6 号窯には他 2 窯のものが混入する可能性が高い。以下、窯体内出土遺物を中心に各窯の特徴を述べる。

13 号窯関連専用焼台

分類対象全てが窯体内出土で、50% 以上を C 類が占める。灰原出土ではあるが、口径 5cm 前後の小型品（306）や口径 8 ～ 9cm 前後で器高が高い大型品（308・309）は本窯由来と判断した。前者は瓶 B、後者は壺 A に使用される形態である。303 と 304 は口径 12cm 程、305 は口径 7cm 程となり、いずれも器高 3cm 前後で、瓶 D に使用される形態である。



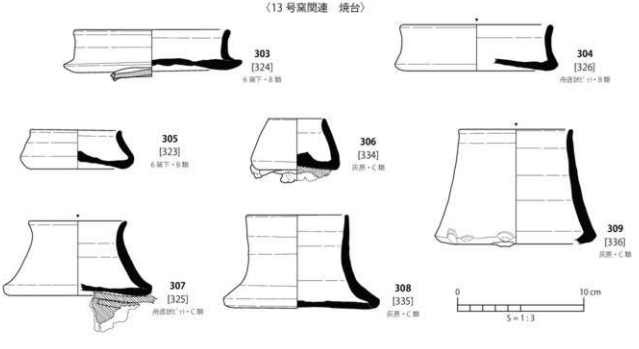
第 29 図　貯蔵具専用焼台の基本類型（小松市教委 2002 より・S=1/6）

６号窯関連専用焼台

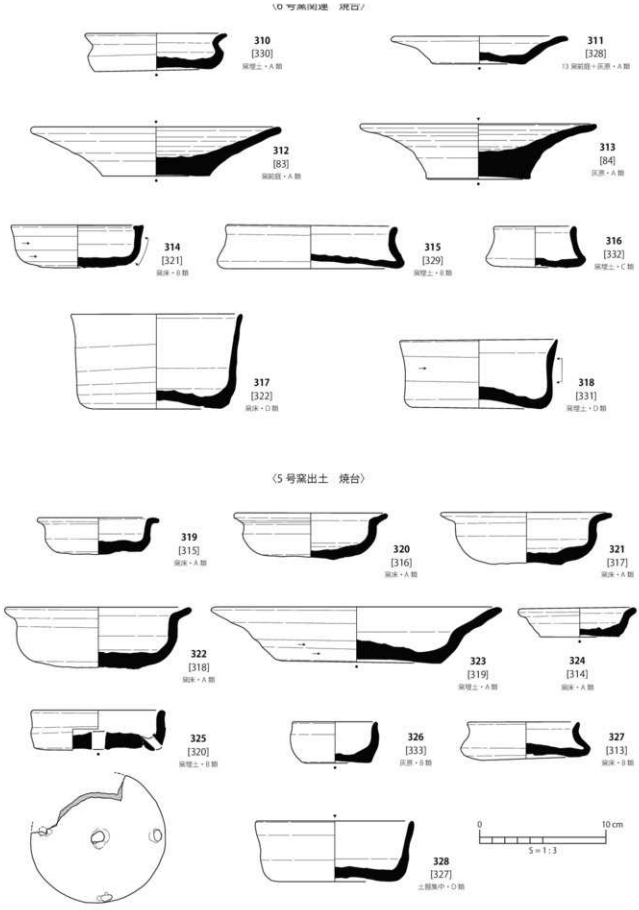
窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A 類 8 個（33.3%）、B 類 12 個（50%）、C 類 1 個（4.2%）、D 類 3 個（12.5%）となり、A・B 類が 8 割以上を占め C 類の占有率が極端に低下することがわかる。個体数が少なく、あくまで傾向としてだが、窯埋土や東側堆積に 13 号窯・5 号窯由来の焼台が混在することを窺わせる。特徴的なのは 312 と 313 の大型皿 A 器形の焼台で、当初は食膳具として分類していたが、内面にロクロヒダを残し、総じて 2 次被熱や溶着痕が観察されたため、焼台 A 類に分類した（底部 8 個体分を確認）。南加賀窯跡群の中でもこれまで類例がなく、珍しいタイプである。312 が本窯前庭部出土であるため、それを基準に他のものも本窯に含めたが、5 号窯埋土や土器集中からも出土しているため、両窯で使用されたものかもしれない。口径 18 ～ 19cm 前後と大型で厚手のつくりをもち、底部糸切り痕が残る。出土した貯蔵具器種の中では、大法量の瓶 D 等に使用されたと思われる。なお口径は小さく底径が大きいが、311 も口縁部が大きく開く皿器形となる。これらのほか、314 の B 類と 317 の D 類が窯床からの出土である。

５号窯関連専用焼台

６号窯同様に窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A 類 25 個（61%）、B 類 11 個（26.8%）、C 類 5 個（12.2%）、D 類 0 個（0%）となり、A 類が優占する。319 ～ 322・324 は口径 10 ～ 15cm 前後を測る A 類の典型的な器形である。A 類は壺瓶生産に合わせて総体的に小型化する傾向にあるが、323 は口径 22.4cm と大型で、前述の大型皿 A 器形に類するものと想定され、平底甕用と考えられる。B 類の 325 は底部に気抜き穿孔を施している。なお、遺物編１（小松市教委 2017）で 4 号窯関連として抽出した第 23 図 278 の底部に気抜き穿孔もつ A 類焼台は、本窯埋土下層で同様の器形・焼き色をもつ個体を確認したため、本窯に属するものとして訂正したい。326 は当窯跡群１－ A 号窯（Ⅵ$_3$ 古期）に類例がある器形で、本窯に含めた。327 は伝統的な口縁部内反器形の B 類、328 の D 類は本窯では衰退器種と考えられ、混入の可能性もある。



第 30 図　13 号窯 貯蔵具専用焼台実測図



第 31 図　6 号窯・5 号窯 貯蔵具専用焼台実測図

第７節　小　結

以下、窯体構造も含めて 13 号窯・６号窯・５号窯の特徴を整理し、操業時期を検討したい。

13 号窯は、食膳具の占有率が坏盤主体で、指標となる坏Ｂは大法量主体化と２法量化の兆候、重ね焼きⅡａ類主体（８割以上）、有紐蓋の残存、蓋つまみ小型化、蓋身ヘラケズリ消失、身の体部外傾器形等の特徴をもつ。また貯蔵具では、Ⅴ期以降衰退・消滅する把手付の鉢Ｂや瓶Ｂ頸部の突帯装飾、瓶Ｄ大法量の風船技法採用、鉢Ｅ生産がみとめられ、貯蔵具専用焼台はＣ類主体となる。白色系堅緻焼成の優品生産も行われている。これらの特徴と、二ツ梨一貫山窯跡３号灰原古相や能美・和気白石窯との対比から、古代$Ⅴ_2$期（９世紀前葉～中葉）に位置づけられる。なお当期の埦皿生産は通常 1% に満たない占有率となるが、本窯ではやや高い占有率をもつ。６号窯による改造で大半の窯床が消失しており、限定された資料の中での例外的な構成比率として捉えておきたい。ほかに灰原出土であるが、円面硯や平瓶等の特殊品は本窯で生産された可能性が高いと考えられる。

６号窯と**５号窯**は、遺物の混在が多いため窯体内器種構成を基準にすると、食膳具の占有率が６号窯で坏Ａ盤 A2 割：埦皿８割、５号窯で坏 A1.5 割：埦皿 8.5 割となり、既に埦皿生産が主流となる。坏盤生産の衰退消滅と埦皿生産の主体化は$Ⅵ_3$期が画期となるが､坏Ａ及び盤Ａの残存は$Ⅵ_3$古期(10 世紀前葉）の二ツ梨豆岡向山１－Ａ号窯、戸津 37・44・47 号窯で確認されており、両窯も同時期に位置づけられそうである。ただし全く同時期というわけではなく、６号窯に比べ５号窯の製品は全体的に焼きが甘く、ヘラケズリのない埦Ａやベタ高台気味となる埦Ｂの存在等、より新しい要素が加わっている。また貯蔵具でも、５号窯床で口頸直立気味となる鉢Ｂや新器種の壺Ｇ等の 10 世紀を特徴づける器種器形や粗雑で厚手づくりの瓶Ｄが確認できる。それに比べて、６号窯はやや薄手で規格性の強い瓶Ｄや伝統的な壺Ｆ等、古手の要素が残る。

窯体構造からも検討を加えると､５号窯は第４節冒頭で述べたように平面釣鐘形で急激な絞り込み・焼成部急傾斜・しっかりとした段構築をもつ構造から、10 世紀代の窯であることは明らかである。一方、６号窯は急傾斜・段構築といった変化の兆しがみとめられるが、未だ絞り込みが甘くやや長大な平面形であり、９世紀的なつくりである。また両窯は少なくとも３回の床修復を行っており、複数回にわたって使用されたことが窺われる。

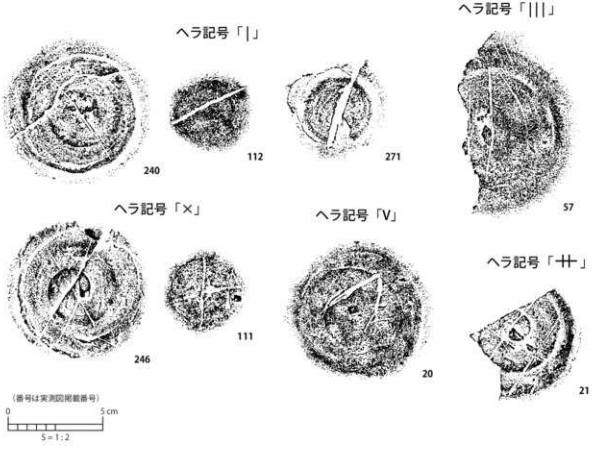
以上より、６号窯と５号窯を$Ⅵ_3$古期（10 世紀前葉）に位置づけたいが、両窯には器種器形や焼成度合い、窯体構造に差があることを考慮する必要がある。６号窯を１段階遡らせた方が妥当のように思えたが、$Ⅵ_2$新期にみられる末期的な坏Ｂが確認されておらず、$Ⅵ_3$期の範疇で捉えた。また詳細な比較はできていないが、５号窯に関しても食膳具の構成では１－Ａ号窯より古い様相を呈すると思われ、$Ⅵ_3$古期を下らないと考えられる。よって、現時点では両窯の差を$Ⅵ_3$古期の中での変化として捉えた。６号窯は坏盤が定量残存する最初期段階になると予測される。

ほかに、９世紀以降の南加賀窯跡群で製品焼成に欠かせない貯蔵具専用焼台をみてみると、両窯とも窯体内でＡ類・Ｂ類が高い占有率をもち、平底器種が主体となる当期の傾向に整合する。また専用焼台が貯蔵具の壺瓶主体生産に対応して小型化する中で、瓶Ｄや平底甕等の中大型器種に合わせて皿Ａ形の大型焼台も使用されたと推測される。

第 11 表　ヘラ記号構成表

	坏A	坏B蓋	坏B身	盤A	椀A	椀B	皿A	皿B	坏盤分類不可	椀皿分類不可	食膳具分類不可	鉢B	壺F	瓶D	小型壺小型瓶	計
|	45	2	1	10	9	5		4		3	4	1	1		1	86
||	8			8	2	5				3						26
|||	1					1										2
×	21			1	11	11	1			3	1			1		50
卄					1	1										2
卅						2										2
V	2					1										3
廾	1															1
□															1	1
不明	35	1	1	10	11			2	1	5	10			1		77
計	113	3	2	29	34	26	1	6	1	14	15		1	2	2	249

＊ 13・6・5 号窯及び灰原出土遺物を一括集計



第 32 図　ヘラ記号拓本

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
1	192	坏B蓋大	13窯舟底ﾋｯﾄ	13窯床下ｃ区ｃ層	口[15.2]、つ径[2.7]、高3.8、つ高1.4	製	良好	内外灰	通常	5	-	重Ⅱａ類
2	193	坏B蓋大	13窯舟底ﾋｯﾄ＋灰原	13窯床下ｆ区ｃ層＋こ7Bgr	口[15.6]、つ径[2.4]、高2.9、つ高1.5	製	不良(酸)	内灰、外赤灰～灰	通常	2	-	
3	206	坏B蓋特大	灰原(13窯)	さ5Dgr2層・2-3層・最上層	口[19.2]、高(2.6)	製	良好	内外灰	通常	19	-	重Ⅱａ類?、天外３条沈線
4	200	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ5Bgr2-3層＋こ6Bgr ｱﾋﾞ3層＋さ5Agr6層	口15.2、つ径2.4、高4、つ高1.2	製	良好	内外灰	砂少	27	-	重Ⅱａ類?、天内ハラ記号「|」
5	201	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ5Cgr3層＋こ5Bgr6層・19層・ｶｸﾗ?	口15.4、つ径2.3、高4、つ高1.5	製	堅緻	内外灰白	通常	25	-	重Ⅱａ類
6	198	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ6Bgr ｱﾋﾞ3層・2'層・24層＋さ6Dgr13層＋さ6杭	口[15]、つ径[2]、高3.1、つ高1.3	製	良好	内外灰	通常	13	-	重Ⅱｂ類
7	199	坏B蓋中	灰原(13窯)	さ5Dgr2-3層＋こ6Bgr	口13.2、つ径1.8、高2.8、つ高1	製	堅緻	内外灰白	砂少	5	-	重Ⅰ類
8	197	坏B蓋小	灰原(13窯)	し6Agr1層＋さ7gr＋こ7gr表上盛土	口10.3、つ径1.5、高2.4、つ高0.7	製	堅緻	内外灰白	通常	21	-	重Ⅱａ類
9	181	坏B身大	13窯床下＋舟底ﾋｯﾄ＋灰原	13窯b区床下＋d区床下ｃ層＋f区床下ｅ層＋さ6Agr3層他	口[15.5]、台[8.8]、高6.4、台高0.4	転	(2次被熱)	内灰、外灰～明青灰	通常	10	-	焼台転用痕
10	180	坏B身大	13窯前庭部(前面土坑)＋灰原	し5Agr前面土坑５層＋さ5Agr5層・6層・6'層＋さ5Dgr3層	口[14.3]、台[8.9]、高5.9、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	14	右	
11	182	坏B身大	13窯床下＋舟底ﾋｯﾄ＋前庭部＋灰原	13窯e区床下ｂ層＋g区床下ｃ・ｅ層＋し5Agr前面土坑全２層＋さ5Agr2層他	口[14.2]、台[8.8]、高5.7、台高0.5	製?	良好	内外灰	通常	19	-	
12	184	坏B身大	灰原(13窯)	さ5Dgr3層＋さ6Agr3層・19層＋さ6Ggr3層他	口[15.4]、台[9.2]、高6.5、台高0.5	製	堅緻	内外灰白	砂少	13	右	釉化
13	183	坏B身大	灰原(13窯)	さ5Dgr2-3層・3層・4-5層・最上層	口[15.5]、台[9.7]、高6.1、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	18	右	釉化
14	185	坏B身中	灰原(13窯)	さ6Agr3層・19層他	口[13.8]、台[8]、高5.4、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	6	-	
15	187	坏B身小	灰原(13窯)	し6Agr1層・2層(4層)他	口[11.1]、台[7.6]、高3.9、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	15	-	
16	186	坏B身小	灰原(13窯)	さ6Agr2層	口9.9、台6.5、高3.7、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	22	右	釉化
17	231	坏E	灰原	し5Cgr1層	口[12.4]、底[9.8]、高3.5	製	良	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類
18	70	坏A	13窯舟底ﾋｯﾄ	13窯d区床下ｃ層	口[12.5]、底[8.7]、高3.2	転	(2次被熱)	内外灰	通常	4	-	
19	71	坏A	13窯舟底ﾋｯﾄ	13窯f区床下ｃ層	口[12.5]、底[8.9]、高3	転	(2次被熱)	内暗灰、外灰	砂多	5	-	底外ハラ記号「|」
20	227	坏A	灰原	こ5Agr8層他	口[13.2]、底[7.7]、高3.4	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	底外ハラ記号「V」、釉化
21	225	坏A	灰原	こ6Bgr19層	口[12.8]、底[6.9]、高3	製	堅緻	内外灰白	通常	11	右	重Ⅲ類、底外ハラ記号「ナ」
22	234	坏A	灰原	さ6Agr3層	口[11.9]、底[6.5]、高2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	8	右	
23	237	坏A	灰原	し5Dgr最上層	口[13]、底[6.9]、高3.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	重Ⅲ類、体外３条沈線
24	72	盤A	13窯舟底ﾋｯﾄ	13窯e区床下ｃ層	口[15.8]、底[13.4]、高1.9	製	不良(生・橙)	内外白	通常	7	-	
25	73	盤A	13窯床下	13窯f区床下ｂ層	口[16.5]、底[13.9]、高1.8	製	やや不良	内外白～灰白	通常	6	-	
26	74	盤A	13窯舟底ﾋｯﾄ	13窯c区床下ｃ層＋d区床下ｃ層＋し6gr表上盛土	口[15.9]、底[13.7]、高2.1	製	やや不良	内外灰	通常	7	-	
27	75	盤A	13窯舟底ﾋｯﾄ＋床下＋６窯床下＋灰原	13窯c区床下ｃ層＋d区床下ｃ層＋f区床下ｆ層＋e区床下ｂ層＋６窯g区床下＋さ5Dgr3層	口[15.5]、底[13.6]、高2.2	転	(2次被熱)	内外暗灰～暗青灰	通常	26	右?	
28	239	盤A	灰原	さ6Agr	口[16.5]、底[13.4]、高2.4	製	不良(生・橙)	内外灰＋橙(2.5Y7/6)	通常	10	-	
29	240	盤A	灰原	さ6Agr南１層	口[16.2]、底[13.9]、高2	製	良	内外灰	微多	13	-	底外ハラ記号「|」?
30	241	盤A	灰原	し6Agr表上盛土	口[16.6]、底[14.2]、高2.3	製	堅緻	内外灰	砂多	5	-	重Ⅲ類
31	249	盤A	灰原	さ6Agr19層	口[16.2]、底[14.1]、高2.3	製	やや不良	内外灰	砂少	8	-	重Ⅲ類
32	254	盤A	灰原	さ6Agr6層	口[15]、底[11.9]、高2.3	製	やや不良	内外灰	通常	5	左	重Ⅲ類
33	246	盤A	灰原	さ5D2-3層・13層	口[15]、底[12.6]、高2.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	
34	204	盤B	灰原(13窯)	し6Agr1層・表上	口[18.6]、台[13.5]、高3.1、台高0.4	製	堅緻	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
35	205	盤B	灰原(13窯)	さ6Agr19層+し5Dgr13層	口[18.8]、台[13]、高2.7、台高0.4	製	堅緻	内外青灰	通常	26	-	ゆがみ大
36	202	盤B	灰原(13窯)	さ5Dgr2-3層	口[18.8]、台[11.8]、高2.7、台高0.9	転	(2次被熱)	内外灰	通常	20	-	ゆがみ大
37	203	盤B	灰原(13窯)	さ5Dgr2層+こ6Bgr3層	口[21.4]、台[14.4]、高2.8、台高0.6	転	(2次被熱)	内灰、外暗灰	通常	10	-	
38	188	皿B	13窯角底ピット	13窯f区床下f層	口[14.2]、高(2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	
39	191	小型瓶	13窯角底ピット	13窯d区c層	口[6]、高(2.5)	製	堅緻	内外灰	通常	4	-	外2条沈線、ｶｷﾂﾊﾞ付着、釉化
40	130	鉢B	13窯前庭部	し5Agr前庭部5層+5窯土器集中97他	口[12.6]、頸[11.1]、体[12.2]、高(6.3)、頸高1.4	製	良	内外明青灰	砂多	19	-	釉化
41	176	鉢B	13窯前面上坑	し5Agr前面上坑全2層	口[22]、頸[19.7]、体[22]、高(7.9)、頸高2.5	製	良好	内外灰	通常	4	-	体外1条沈線、内外特ﾅﾃﾞ、ゆがみ大
42	165	鉢B(把手付)	灰原	さ5Dgr2-3層+さ6Agr3層・19層+さ6Bgr ﾀﾃﾊﾟﾃﾞ6層他	口23.1、底11.2、頸20.8、体25、高18.3、頸高2.9	製	良好	内外灰白～明青灰	通常	34	-	体外3条沈線、焼台・ｶｷﾂﾊﾞ付着、釉化
43	175	鉢E	13窯前庭部(前面上坑)+灰原	さ5Bgr前庭部全13層・1層+し5Agr前面上坑3層・2層+さ5Bgr1層・最上層+こ5Bgr	口[16.2]、高(7.5)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	20	右	体外手持ちｶｽﾞﾘ+回転ｽﾞﾘ、逆位焼成、釉化
44	119	瓶B	13窯前面上坑+灰原	し5Agr前面上坑全13層+さ6Agr7ﾋﾞ他	口[11]、頸[5.2]、高(12.1)、頸高8.2	製	良好	内灰、外灰白	通常	6	-	頸外2～3条沈線、胴外2条沈線、頸接合A2類、ｶｷﾂﾊﾞ付着、釉化
45	93	瓶B	6窯床下(13窯)+埋土+5窯前庭部	6窯b・e・f区床下j層(13窯)+B区3層+さ4Cgr前庭部	口[11.9]、台[8.8]、頸[6.1]、胴[14.8]、高22.8、台高1.2、頸高9.6	製	ややﾛｸ	内褐灰、外釉=灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	4	右	回転糸切り、胴外下回転ｶｽﾞﾘ、頸外4条沈線、胴外3条沈線、頸胴外1条隆帯、頸接合A3類、ｶｷﾂﾊﾞ付着、焼台痕、釉化、容量1.2L
46	94	瓶B	灰原	さ5Agr5層	口10.1、頸5.5、高(11.2)、頸高10.4	製	堅緻	内外釉=灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	23	-	外3条沈線、頸接合A3類、上部片付着、ｶｷﾂﾊﾞ付着、釉化、実95と同一?
47	95	瓶B	6窯床下(13窯)+前庭部+灰原	6窯b区床下j層(13窯)+B区前庭部はりつき+さ5Agr1層+こ6Bgr2層+こ5Agr・こ5Bgr13層	台[9]、胴[16.5]、高(12.9)、台高1	製	堅緻	内褐灰、外釉=灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	台11	右	外下回転ｶｽﾞﾘ、外3条沈線、ｶｷﾂﾊﾞ付着、焼台痕、ゆがみ大、釉化、実94と同一?
48	102	瓶D	6窯埋土(13窯)+東側壁積+灰原	6窯H区15-19層・15'層+東e区13層+東f区7層+さ6Bgr2層+し5Cgr3層+し6Agr14層・15層+こ5Bgr3層・6層・13層+こ5Cgr6層+さ5Agr6'層+さ5Dgr4-5層・6層	口[19.1]、底[14.7]、頸[13.2]、胴[26.3]、高44、頸高11.7	製	堅緻	内灰白、外灰白～灰	通常	23	左	胴外下回転ｶｽﾞﾘ、頸外3条沈線、胴外4条沈線、胴内外特ﾅ、頸接合A3類、釉化、容量7.2L
49	194	壺蓋	13窯前庭部	し5Agr前庭部5層	口12.7、つ径3、高5.2、つ高2.1	製	堅緻	内外灰白	通常	12	右	天外重ね焼き痕、天外回転ｶｽﾞﾘ、ゆがみ大、釉化
50	195	壺蓋	13窯前庭部	し5Agr前庭部5層	口[12.8]、つ径[3.2]、高4.9、つ高2.2	製	堅緻	内外灰白	通常	18	-	ｶｷﾂﾊﾞ付着、釉化
51	208	壺蓋	灰原(13窯)	さ5Dgr2層・2-3層+さ6Agr19層+さ7gr盛土	口13.1、つ径2.9、高4.9、つ高1.7	製	堅緻	内外灰白～灰	砂少	9	-	釉化
52	209	壺蓋	灰原(13窯)	さ5Dgr2-3層+さ6Agr19層+し6Agr2層・5層・14層	口12.6、つ径2.6、高4.2、つ高1.3	製	堅緻	内外灰白～灰	砂少	8	-	釉化
53	140	壺A	灰原	こ5Bgr3層・13層+さ5Agr6層+さ5Dgr1層・4-5層+し6Agr1層・14層	口[9.8]、頸[9.9]、胴[22.1]、高(17)、頸高1.7	製	堅緻	内灰白、外釉=灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	24	-	胴外5条沈線、胴外特ﾅ、胴内特ﾅ?、釉化
54	58	坏A	6窯床面	6窯115	口[13.2]、底[6.9]、高3.1	製	堅緻	内外灰	通常	14	右	
55	59	坏A	6窯床面	6窯85・87	口[13.4]、底[8.7]、高2.9	製	堅緻	内灰、外明青灰	通常	23	-	ゆがみ大
56	69	坏A	6窯埋土	6窯N区37層	口13.4、底8.1、高2.6	転?	(2次被熱)	内灰、外暗青灰	通常	19	-	ゆがみ大
57	62	坏A	6窯埋土+5窯埋土	6窯I区5窯埋上J区33層+6窯埋上G区33層	口[13.6]、底[8]、高2.7	転?	(2次被熱)	内外灰	通常	18	-	底外ﾍﾗ記号「[|」
58	67	坏A	6窯埋上	6窯G区8層	口[13]、底[7.4]、高2.6	転?	(2次被熱)	内灰、外暗灰	通常	9	-	
59	60	坏A	6窯埋上	6窯I区25'層	口[13.4]、底[7.8]、高3.2	製	堅緻	内外灰	通常	23	右	ゆがみ大
60	64	坏A	6窯埋上	6窯G区33層	口13、底7.5、高3	製	不良(生)	内外白～灰白	通常	24	右?	
61	61	坏A	6窯埋上+灰原	6窯D区19層・F区3層+こ6Bgr6層+こ6Bgr1層2+こ6Cgr7ﾋﾞ+内流上層	口[13.1]、底[8.5]、高2.9	製	良好	内灰、外灰～暗灰	砂少	26	-	底外ﾍﾗ記号「|」

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
62	66	坏A	6 窯埋土＋東側堆積	6 窯N区＋6 窯東g区15層	口 [13]、底 [7.8]、高 3.2	製	良	内外灰	通常	9	右?	重Ⅲ類
63	68	坏A	6 窯埋土	6 窯F区 3 層	口 [12.5]、底 [7.6]、高 3.2	製	堅緻	内外灰	通常	8	-	重Ⅲ類
64	63	坏A	6 窯東側堆積	6 窯東h区 22 層＋東h区 7 22 層	口 13.2、底 7.8、高 3	製	やや不良	内灰白、外灰白～青灰	通常	22	-	
65	65	坏A	6 窯東側堆積	6 窯東b区	口 [12.6]、底 [9.4]、高 3	製	やや不良	内外灰	通常	9	-	
66	57	坏E	5 窯埋土＋灰原	5 窯C区 3 層・13 層＋E区 2 層・10 層＋こ6Bgr1 層 2	口 [13.2]、底 [9.2]、高 4.5	製	良好	内灰、外暗灰	通常	9	-	重Ⅲ類?、ヘラ記号「凵」?
67	76	盤A	6 窯母滅ﾋﾞｯﾄ	6 窯i区床下m 層	口 [14.2]、底 [11.6]、高 2.2	製	良好	内灰、外青灰	砂多	6	-	
68	79	盤A	6 窯床面＋埋上	6 窯 128・129＋H区 8 層＋N区 37 層	口 [14.4]、底 [11.2]、高 2	製	良好	内外灰～明青灰	砂多	25	-	
69	78	盤A	6 窯母滅ﾋﾞｯﾄ＋埋上	6 窯g区床下h 層＋H区 8 層	口 15、底 11.3、高 2.2	製	良好	内外灰	通常	14	右	重Ⅲ類
70	77	盤A	6 窯母滅ﾋﾞｯﾄ＋床面	6 窯i区床下m 層＋118	口 15、底 11.6、高 2.4	製	良	内外灰～青灰	砂多	20	右	
71	80	盤A	6 窯埋土	6 窯E区 15 層＋G区 7 15 層	口 [15]、底 [11.5]、高 2	製	良好	内外灰	通常	8	右	
72	81	盤A	6 窯埋土	6 窯J区 38 層	口 14.6、底 11.4、高 2.4	製	やや不良	内外白～明青灰	通常	20	右	
73	82	盤A	6 窯埋土＋東側堆積	6 窯H区 15 下層＋F区中③層＋東f区中層・13 層	口 14.6、底 11.7、高 2.7	転?	(2 次被熱)	半暗灰、半灰	通常	34	右	
74	245	盤A	灰原	さ 5Dgr2 層・最上層	口 [14.2]、底 [11.2]、高 2.1	製	良好	内外灰	通常	12	-	ゆがみ大
75	242	盤A	灰原	さ 5Dgr4 5 層	口 [15.8]、底 [13.6]、高 1.6	製	堅緻	内外青灰	通常	8	-	
76	28	埦A	6 窯床下＋床面	6 窯i区床下 1 層＋83・101	口 [13.6]、底 [6]、高 3.7	製	良好	内外灰	通常	15	右	体外回転ｽﾞﾘ
77	29	埦A	6 窯床面	6 窯 39	口 [13.2]、底 [5.6]、高 3.6	転	(2 次被熱)	内灰、外明青灰	砂多	5	右	体外回転ｽﾞﾘ
78	31	埦A	6 窯床面	6 窯 44	口 [13.5]、底 [6.4]、高 3.9	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	26	右	体外回転ｽﾞﾘ
79	30	埦A	6 窯床面＋埋上	6 窯 56 ＋ L区 34 層・36 層	口 [12.8]、底 [5.2]、高 3.5	製	良	内外灰	砂多	14	右	体外回転ｽﾞﾘ
80	32	埦A	6 窯床面	6 窯 122	口 [13.4]、底 [5.6]、高 3.8	製	不良（生）	内外白～灰白	通常	10	右	体外回転ｽﾞﾘ
81	33	埦A	6 窯床面	6 窯 73	口 [13.8]、底 [5.7]、高 3.8	製	良好	内外灰	通常	24	右	体外回転ｽﾞﾘ
82	273	埦A	6 窯埋土＋東側堆積	6 窯G区 9' 層＋6 窯H区東g区 7 層・15' 層	口 [13.6]、底 [5.7]、高 4.6	製	良好	内外灰	通常	11	右	重Ⅲ類、体外～底外回転ｽﾞﾘ
83	274	埦A	6 窯埋土＋東側堆積	6 窯G区 9 層＋6 窯H区東g区	口 13.1、底 5.7、高 3.9	製	やや不良	内外灰＋灰赤 10R5/2	通常	19	右	重Ⅲ類、体外回転ｽﾞﾘ
84	277	埦A	6 窯埋土	6 窯F区中②層	口 13.1、底 5.3、高 4.3	製	やや良	内外灰白	通常	10	右	体外回転ｽﾞﾘ
85	278	埦A	6 窯埋土	6 窯M区 38 層	口 13.8、底 6.1、高 4.5	製	不良（生）	内白＋灰赤 10R5/2、外白	砂多	6	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ
86	279	埦A	6 窯埋土＋灰原	6 窯K区 36・37 層＋こ 5Bgr 最上層	口 [12.8]、底 [5.6]、高 4	転	(2 次被熱)	内外灰	砂多	16	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ、底外転用痕
87	280	埦A	6 窯埋土	6 窯H区 15 下層	口 [13]、底 [6]、高 4.1	製	不良（生）	内外白	通常	2	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ
88	281	埦A	6 窯埋土	6 窯E区 15 層＋6 窯H区 8 層下	口 [13.3]、底 [6]、高 4	製	やや不良	内外灰～白	通常	15	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ
89	282	埦A	6 窯埋土	6 窯H区東g区 15' 層	口 [13.8]、底 [6.1]、高 3.8	転	(2 次被熱)	内外暗青灰	砂多	14	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ、底外転用痕?、ゆがみ大
90	284	埦A	6 窯埋土＋東側堆積＋灰原	6 窯F区＋東E区 13 層＋こ 6Bgr3 層	口 [14]、底 [5.9]、高 3.9	製	良	内外灰	通常	8	右	重Ⅲ類、体外回転ｽﾞﾘ
91	275	埦A	6 窯埋土	6 窯F区 15 層	口 13.3、底 5.4、高 3.7	製	不良（生）	内外白	通常	19	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ
92	276	埦A	6 窯埋土	6 窯M区 38 層	口 13.2、底 6.2、高 3.5	製	良	内外明青灰	砂多	25	右	体外回転ｽﾞﾘ
93	283	埦A	6 窯東側堆積	6 窯東i区 15 層＋東F区上③層	口 [12.5]、底 [6]、高 4	製	良好	内青灰～灰、外灰	通常	6	右	重Ⅲ類、体外～底外回転ｽﾞﾘ
94	18	埦B	6 窯床下＋床面	6 窯 k 区床下 m' 層＋38	口 [14.8]、台 [7.2]、高 4.7、台高 0.7	製	やや不良	内灰、外青灰	砂多	12	右	合わせ口法、体外回転ｽﾞﾘ
95	20	埦B	6 窯床面＋13 窯前庇部	6 窯 120 ＋さ 5Bgr 前庇部 1 層	口 [14.8]、台 [7.5]、高 5.4、台高 1	転	(2 次被熱)	内外暗灰	砂多	6	右	体外回転ｽﾞﾘ
96	22	埦B	6 窯床面	6 窯 59	口 [15.5]、台 [7.6]、高 4.9、台高 0.5	製	良好	内外灰	通常	13	右	重Ⅲ類、体外回転ｽﾞﾘ
97	16	埦B	6 窯床下＋床面	6 窯 m 区床下 m' 層＋91	口 [15.2]、台 [7]、高 4.1、台高 0.6	製	良好	内外明青灰～青灰	砂多	2	右	体外回転ｽﾞﾘ
98	17	埦B	6 窯床面	6 窯 26・88・114・117	口 14.8、台 [7]、高 4.4、台高 0.7	製	良好	内外灰	通常	30	右	重Ⅲ類、体外回転ｽﾞﾘ
99	23	埦B	6 窯床面	6 窯 116	口 15.6、台 7.5、高 4.5、台高 0.5	製	良好	内外灰	通常	26	右	重Ⅲ類、体外回転ｽﾞﾘ
100	19	埦B	6 窯床面	6 窯 115・119	口 [14.4]、台 [7.3]、高 4.9、台高 0.6	製	やや良	内外灰	通常	14	-	
101	24	埦B	6 窯床面	6 窯 82	口 [15.6]、台 [8.1]、高 6.3、台高 1.1	転	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	13	右	体外～底外回転ｽﾞﾘ

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
102	25	埴B	6 窯床面	6 窯52	口[16.5]、台[8.4]、高6.3、台高0.8	製	不良（生）	内外白	砂少	22	-	重Ⅲ類
103	26	埴B	6 窯舟底ピット+床面	6 窯k区床下m'層+50+46+102	口[17.6]、台[8.6]、高5.7、台高0.8	製	不良（生）	内外白～灰白	通常	31	右	重Ⅲ類、体外回転ケズリ
104	27	埴B	6 窯床面+埋土	6 窯51+54+L区埋土	口17.2、台9、高5.8、台高0.7	製	不良（生）	内外白～灰白	通常	25	-	重Ⅲ類
105	21	埴B	6 窯舟底ピット+灰原	6 窯g区床下h層+さ5Cgr3層+さ5Agr4層・4層+さ5Dgr最上層+こ5Cgr13層	口[16.2]、台[8.4]、高6.6、台高1	製	良好	内外灰	通常	8	右	体外～底外回転ケズリ
106	264	埴B	6 窯埋土	6 窯K区36層・37層+N区37層	口[14.8]、台[6.8]、高4.8、台高0.5	製	良好	内外青灰～灰	砂少	17	-	ゆがみ大
107	265	埴B	6 窯埋土	6 窯K区36層・37層	口15.2、台7.1、高5、台高0.6	製	良好	内外青灰～灰	通常	25	右	体外回転ケズリ
108	266	埴B	6 窯埋土	6 窯J区36層・37層	口15.6、台7、高5.1、台高0.7	製	良好	内青灰～灰、外灰	通常	21	右	体外回転ケズリ
109	267	埴B	6 窯埋土	6 窯H区8層・15下層・22層	口15.1、台7.3、高4.5、台高0.5	製	良好	内灰白、外灰	砂多	33	-	ゆがみ大
110	268	埴B	6 窯埋土+東側堆積+灰原	6 窯J区38層+F区・東E区13層+こ5Bgr13層	口14.2、台7、高4.8、台高0.8	製	良好	内外青灰～灰	砂多	20	右	重Ⅲ類、体外回転ケズリ
111	271	埴B	6 窯埋土+東側堆積	6 窯G区15層+I区9'層+H区東g区15層+東h区7層	口[14.6]、台[7]、高4.8、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	22	右	重Ⅲ類、体外回転ケズリ、底外ヘラ記号「×」、ゆがみ大
112	272	埴B	6 窯埋土	6 窯G区25層	口[13.8]、台[6.2]、高4.2、台高0.7	製	不良（生）	内外白	通常	11	右	体外回転ケズリ、底外ヘラ記号「↓」
113	269	埴B	6 窯東側堆積	6 窯d区1層+東i・j区15-19層+H区東g区15層+東e区上3層	口[14.6]、台[7.5]、高4.9、台高0.6	製	良好	内外灰	通常	17	右	重Ⅲ類、体外～底外回転ケズリ、ゆがみ大
114	260	Ⅲ A	6 窯埋土+5窯埋土	6 窯G区15層+6窯I区5窯J区33層	口13、底6.6、高2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	28	右	釉化
115	38	Ⅲ B	6 窯床面+埋土	6 窯9+F区中②層	口13.6、台6.7、高2.8、台高0.9	製	良好	内外灰	砂多	22	右	体外回転ケズリ
116	40	Ⅲ B	6 窯床面+埋土	6 窯21・23・25・29+K区37層+左壁崩壊土中	口[13.2]、台[6.6]、高2.6、台高0.7	製	やや不良	内外白～灰	砂多	29	左	重Ⅲ類、体外～底外回転ケズリ
117	45	Ⅲ B	6 窯床面+埋土	6 窯11・24+J区36層以下・M区37層	口13.6、台6.8、高2.8、台高0.8	製	良	内外灰白	通常	25	左	重Ⅲ類、体外回転ケズリ
118	46	Ⅲ B	6 窯床下+床面	6 窯h区床下s層・e区床下+53・57+G・H区床はつつき	口13.5、台7、高2.9、台高0.7	製	やや不良	内外白～灰白	通常	28	右	体外～底外回転ケズリ
119	34	Ⅲ B	6 窯舟底ピット+灰原	6 窯j区床下m層+こ58gr1層	口13.2、台7.1、高2.8、台高0.9	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	35	右	合わせ口法、回転ハラ切り
120	35	Ⅲ B	6 窯舟底ピット+埋土	6 窯g区床下h層+i区床下m層+k区床下m層+H区25層以下	口13.4、台6.9、高2.6、台高0.7	製	良好	内外明青灰	砂多	30	-	重Ⅲ類
121	37	Ⅲ B	6 窯舟底ピット+床面	6 窯I区床下m層+135	口13.8、台7、高2.8、台高0.9	製	堅緻	内外灰	砂少	32	-	合わせ口法
122	43	Ⅲ B	6 窯床面	6 窯89	口13.5、台6.8、高2.7、台高0.7	製	良	内外灰白	通常	30	-	
123	41	Ⅲ B	6 窯床面+埋土	6 窯77+K区1層	口13.6、台7.1、高3、台高0.5	製	やや不良	内外白～灰白	通常	27	右	重Ⅲ類、体外回転ケズリ
124	44	Ⅲ B	6 窯床面	6 窯126	口[12.8]、台[6.6]、高3.3、台高0.7	転	(2次被熱)	内外暗青灰	砂多	8	左	重Ⅲ類、体外回転ケズリ
125	85	Ⅲ B	6 窯床面	6 窯13+3トンチ	口[13.6]、台[7.4]、高3.3、台高0.7	製	良	内灰白、外明青灰	砂多	15	-	
126	39	Ⅲ B	6 窯床面	6 窯86	口[12.5]、台[6.9]、高2.5、台高0.9	製	良好	内外灰～明青灰	砂多	32	右	重Ⅲ類、底外回転ケズリ
127	36	Ⅲ B	6 窯舟底ピット+床面+灰原	6 窯g区床下h層+115+さ5Bgr1層	口12.9、台6.7、高2.4、台高0.8	製	良好	内外灰	砂多	36	-	
128	42	Ⅲ B	6 窯床面	6 窯79+4トンチ(2区)	口13.6、台7.2、高2.4、台高0.8	製	やや良	内外白～灰白	通常	31	左	体外～底外回転ケズリ
129	47	Ⅲ B	6 窯床下+床面	6 窯h区床下s層・j区床下k層+1・17	口13.2、台5.6、高2.8、台高0.7	製	やや不良	内明青灰、外灰白～暗青灰	砂多	34	左	合わせ口法、体外回転ケズリ、ゆがみ大
130	257	Ⅲ B	6 窯埋土	6 窯B区中②層+H区15層	口[13.5]、台[6.9]、高2.7、台高0.8	転？	(2次被熱)	内外明青灰	砂多	14	左？	体外回転ケズリ？
131	258	Ⅲ B	6 窯埋土+灰原	6 窯G区9層+さ6Agr3層	口[13.5]、台[6.5]、高2.9、台高0.7	製？	(2次被熱？)	内外暗灰	通常	9	右	体外～底外回転ケズリ
132	256	Ⅲ B	6 窯埋土	6 窯G・H区25層	口[14.5]、台[7.5]、高2.5、台高1	転？	(2次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	
133	86	Ⅲ B	6 窯埋土	6 窯I区15下層	台9.1、高(2.2)、台高1.4	転	(2次被熱)	内灰、外灰白	通常	台34	-	焼台転用痕（台部端ハケリ）
134	87	Ⅲ B	6 窯埋土	6 窯H区15層+J区15上層	台8.2、高(2.5)、台高1.4	転	(2次被熱)	内灰、外灰白	砂多	台29	-	焼台転用痕（台部端ハケリ）

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
135	259	皿 B	6 窯東 f 区中層	6 窯東 f 区中層	口 [13.8]、台 [7.8]、高 2.9、台高 0.7	製	良	内外灰	通常	5	右	体外回転ｹｽﾞﾘ
136	262	皿 B	13 窯前面上坑	し 5Agr 前面上坑 3 層	口 [13.5]、台 [6.4]、高 2.5、台高 0.8	転	(2 次被熱)	内外暗灰	砂多	5	-	
137	144	鉢 B	6 窯埋土＋灰原	6 窯 J 区 15 上層＋さ 5Agr 上層	口 [23.8]、頸 [22.2]、体 [24.2]、高 (7.8)、頸高 2.4	製	良好	内外灰	通常	13	-	体外 1 条沈線、頸外・体内外ﾅﾃﾞ
138	142	鉢 B	6 窯埋土＋灰原	6 窯 E・G 区 15 層他	口 [22.9]、底 [11.1]、頸 [21.4]、体 [24.4]、高 12.9、頸高 2.7	製	やや良	内外灰～青灰	通常	16	右	体外下手持ちｹｽﾞﾘ、体外下～底部回転ｹｽﾞﾘ、体外 1 条沈線、ゆがみ大
139	143	鉢 B	6 窯埋土＋灰原	6 窯 F 区中①・②層＋H 区 8 層・15 層＋ J 区 15 下層＋し 5Cgr1 層他	口 [25.6]、底 [12.4]、頸 [23.6]、体 [25.6]、高 14.5、頸高 2.8	製	良	内外灰	通常	5	右	体外手持ちｹｽﾞﾘ、底外回転ｹｽﾞﾘ、体外 1 条沈線
140	145	鉢 C	6 窯埋土＋灰原	6 窯 H 区 15' 層＋ J 区 7(9) 層＋ I 区 15' 層＋こ 5Bgr1 層＋こ 5Cgr13 層＋さ 5Agr 最上層・上層他	口 [26.2]、底 [10.5]、高 8.6	製	良	内外灰白	通常	5	右	体外下～底外回転ケズリ
141	147	鉢 F	6 窯埋土＋東側堆積＋灰原	6 窯 J 区 15 下層＋東 f 区中層＋東 h 区 15 層＋こ 5Cgr3 層	口 [17]、高 (16.5)	製	良好	内外灰	通常	6	-	体外 1 条突帯・2 条沈線
142	98	瓶 D	6 窯床下＋埋土＋東側堆積	6 窯 I 区床下 k 層＋ J 区 15 下層＋ F 区中②・中③層＋東 g 区 19 層＋ i・j 区 15-19 層	底 [10.8]、頸 [7.7]、胴 [17.2]、高 (20)	製	良好	内外青灰	砂多	台 36	右	胴外下回転ｹｽﾞﾘ、胴外 4 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、ゆがみ大
143	97	瓶 D	6 窯床面＋埋土	6 窯 71・74 ＋ G 区 8 層＋ H 区 15 下層	口 [12.4]、底 [10.6]、頸 [7.3]、胴 [17.7]、高 28、頸高 6.9	転？	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	28	-	頸外 1 条沈線、胴外 2 ～ 3 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ?、頸接合 B 類、ゆがみ大、釉化、容量 2.8L
144	99	瓶 D	6 窯床下＋埋土＋東側堆積	6 窯 J 区床下トレンチ＋ H 区 8 層＋東 h 区 15' 層＋東 f 区中層	口 13.1、頸 7.5、胴 19.5、高 (26.4)、頸高 6.9	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外 1 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、ゆがみ大
145	92	瓶 D	6 窯床面	6 窯 49・54・58・76・80	口 14.2、頸 8.6、胴 19.2、高 (16.4)、頸高 7.9	転？	(2 次被熱)	内明青灰、外青灰	砂多	28	-	頸外 2 条沈線、胴外 2 条沈線、頸接合 B 類
146	104	瓶 D	6 窯前庭部＋東側堆積	し 4Dgr 前庭部全 14 層＋ 6 窯東 f 区 15' 層＋東 h 区 7 層・15-19 層・15' 層	口 13.6、底 12.4、頸 8.8、胴 17.6、高 27.5、頸高 6.5	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外 1 条沈線、胴外 5 ～ 6 条沈線、頸接合 B 類、容量 3.2L
147	89	瓶 D	6 窯床下＋床面＋埋土＋東側堆積	6 窯 J 区床下トレンチ＋ 30・79・139 ＋ h 区 15 層＋ F 区中②層＋東 f 区 15' 層＋東 h 区 15-19 層	口 19.4、底 14.3、頸 9.9、胴 23.6、高 40.4、頸高 11.1	製	良好	内外灰白～明青灰	砂多	33	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、容量 8.5L
148	88	瓶 D	6 窯床面＋前庭部＋埋土＋東側堆積	6 窯 J ＋ L 4Dgr 前庭部 2 層＋ 6 窯 F 区中②層＋東 f 区 15 層	口 18.8、底 14.2、頸 11.2、胴 24.8、高 41、頸高 10.2	製	良好	内外明青灰	砂多	32	-	頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、容量 9.6L
149	90	瓶 D	6 窯床面＋埋土＋東側堆積	6 窯 12・111 ＋ E 区 15 層＋東 i・j 区 15'-19 層、東 f 区中層	口 19.9、底 14.7、頸 10.6、胴 23.8、高 39.6、頸高 9.8	製	良好	内灰白、外灰白～明青灰	砂多	35	-	頸外 2 ～ 3 条沈線、胴外 5 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、容量 8.3L
150	91	瓶 D	6 窯床面＋前庭部＋埋土＋東側堆積	6 窯 34・35・37 ＋し 4Dgr 前庭部 2 層＋ E 区 15 層＋ F 区中②・③層＋ G・H 区 8 層＋ I 区 25' 層＋ J 区 7-9 層＋東 g 区 19 層＋東 h 区 15 層・15-19 層＋ i・j 区 15'-19 層	口 19.8、底 14.4、頸 10.6、胴 23.9、高 40.5、頸高 11	製	良好	内灰白～青灰、外青灰	砂多	30	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、容量 7.5L
151	96	瓶 D	6 窯床面＋東側堆積＋ 13 窯前庭部＋灰原	6 窯 62・67・70 ＋左壁崩崩落土＋東 c 区 1 層＋し 5Agr 前庭部 2 層＋こ 5Bgr2 層・13 層・1-3 層東 f ＋こ 5Cgr6 層・10 層＋さ 6Agr14 層・19 層＋さ 6Dgr1 層＋さ 7Agr13 層他	口 [20.4]、底 [14.7]、頸 [10.8]、胴 [23.4]、高 39.7、頸高 9.9	製	良好	内外明青灰	砂多	12	-	頸外 2 ～ 3 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、容量 7.6L
152	100	瓶 D	6 窯埋土＋ 5 窯埋土＋灰原	6 窯 F 区中③層＋ 5 窯 I 区 9 層＋こ 6Bgr1 層 2・7 層＋ 24 層＋さ 5Agr4 層・13 層＋さ 6Agr19 層＋さ 6Bgr1 層＋さ 6Dgr1 層・19 層他	口 [19.8]、底 [15]、頸 [11.3]、胴 [25.1]、高 39.7、頸高 10	製	良好 (口頸 2 次被熱)	内外灰白～明青灰	通常	33	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外 2 ～ 3 条沈線、胴外ﾅﾃﾞ、頸接合 B 類、ｶｴﾂﾘ付着、容量 8.3L
153	103	瓶 D	6 窯東側堆積	6 窯東 g 区 19 層＋東 j 区 30 層＋東 i・j 区 15' 19 層	口 12.5、底 10、頸 7.1、胴 15.9、高 26.7、頸高 6.9	製	良好	内灰、外青灰	砂多	34	右	胴外下回転ｹｽﾞﾘ、頸外 1 条沈線、胴外 3 条沈線、頸接合 B 類、釉化、容量 2.2L
154	105	瓶 D	6 窯東側堆積＋灰原	6 窯東 g 区 19 層＋し 6Bgr2 層・14 層	口 12.1、底 9.2、頸 6.7、胴 17.3、高 26.9、頸高 6.9	製	良好	内灰白、外明青灰	通常	34	-	頸外 1 条沈線、胴外 4 条沈線、頸接合 B 類、焼台付着、釉化、容量 2.4L

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
155	106	瓶D	6 室東側堆積＋灰原	6 室東 h 区 15-19 層＋こ 5Bgr13 層他	口 14.3、頸 8.2、胴 18.3、高 (20.2)、頸高 7.6	製	良	内明青灰～灰、外明青灰	通常	23	-	頸外 2 条沈線、胴外 2 条沈線、頸接合 B 類
156	131	壺 A	6 室床面	6 室 63	台 18.1、高 (4.4)、台高 4.1	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	台 36	-	方形穿孔 2
157	132	壺 A	6 室床下＋埋土	6 室 J 区床下ﾄﾝﾁ＋H 区 15 下層	台 17.8、高 (3.4)、台高 2.8	転	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	台 30	-	ｶｸﾜﾘ付着
158	196	壺蓋	6 室埋土	6 室 N 区 40 層	口 14.4、つ径 3.7、高 4.2、つ高 1.8	製	良	内外灰白～明青灰	砂多	15	右	天外回転ｹｽﾞﾘ、ゆがみ大、釉化
159	137	壺 F	6 室床下＋床面＋埋土	6 室 I 区床下＋6 室 5・28・53・66・72・75・84・113＋H 区 8 層	口 18.2、底 11.6、頸 16.6、胴 24.8、高 29.2、頸高 3.3	転	(2 次被熱)	内灰白、外明青灰	砂多	20	-	胴外～底外ﾖｺﾅﾃ He 類、胴内～底内当て具無文?～ｽｽﾀｼ、胴外ﾖｺﾅﾃ?、焼台痕、容量 8.4L
160	133	小型壺 F	6 室埋土	6 室 E 区 15 層＋G 区 9 層・15 層	口 [12.8]、頸 [11.7]、胴 [15.8]、高 (12.4)、頸高 1.8	製	良好	内灰、外灰白	砂多	11	-	胴外 1 条沈線？、胴外ﾖｺﾅﾃ、釉化
161	135	壺 F	6 室埋土＋灰原	6 室 J 区 1 層＋さ 5Bgr1 層＋さ 5Dgr2 層・3 層＋さ 6Agr3 層＋さ 6Cgr3 層他	口 [22.7]、頸 [21.6]、胴 [28.9]、高 (23.6)、頸高 3	製	やや不良	内釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ、外灰白～灰	砂多	4	-	胴外 4 ～ 5 条沈線、土器片付着、ゆがみ大、釉化
162	139	壺 F	6 室東側堆積（灰層）＋灰原	6 室東 h 区 18 層（灰層）＋さ 6Agr3 層・19 層＋さ 5Dgr13 層他	口 20.6、底 13.9、頸 19.1、胴 25.8、高 25.7、頸高 3.6	製	良好	内釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ、外灰白～明青灰	砂多	28	-	胴外 1 条沈線、胴外ﾖｺﾅﾃ、焼台 (D 類)・ｶｸﾜﾘ付着、釉化、容量 8.3L
163	114	中甕	6 室東側堆積＋灰原	6 室東 f 区上層＋こ 5Bgr2 層・3 層・13 層＋こ 5Cgr1 層・3 層＋こ 6Bgr3 層＋し 5Cgr2 層	口 [20.2]、頸 [16.6]、胴 [31.6]、高 (32.5)、頸高 6.5	製	堅緻	内釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ、外灰白	通常	12	-	外ﾖｺﾅﾃ Ha 類、内当て具 SD 類→ｽｽﾀｼ、ゆがみ大、釉化
164	152	長胴釜	6 室東側堆積	6 室 J 区 15 上層＋H 区（東 g 区）15 層＋東 f 区 13 層	口 [23.1]、頸 [21.5]、胴 [24.4]、高 (18.7)、頸高 1.6	製	やや良	内外青灰	礫極多	14	-	外ﾖｺﾅﾃ He 類、内当て具ｽｽﾀｼ、ゆがみ大
165	122	小型甕	6 室埋土＋灰原	6 室 D・F 区 3 層＋ D 区 20 層＋さ 5Bgr1 層＋さ 5Dgr ｱﾋﾞ 20 層＋こ 5gr	口 [5.3]、底 [4.9]、頸 [3.6]、胴 [9]、高 10.1、頸高 3.4	製	良	内灰、外釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	7	右	回転糸切り、頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外ﾖｺﾅﾃ、頸接合 B 類、土器片付着、釉化、容量 0.2L
166	121	小型甕	6 室埋土＋東側堆積＋灰原	6 室 E・G 区 15 層＋I 区 9 層＋東 i 区 15' 層・23 層＋こ 5Bgr3 層＋し 4Dgr ｶｸﾗﾝ	底 [6.4]、胴 [10.6]、高 (9.2)	製	堅緻	内灰、外釉＝ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1	通常	底 13	-	回転糸切り、胴外 2 条沈線、釉化
167	304	管状土錘	6 室埋土	6 室 E 区 15 層	長 5.18、幅 2.85、孔 1.14、重 38.4g	製	やや良	明青灰	通常	-	-	ｶｸﾜﾘ付着
168	305	管状土錘	6 室埋土	6 室 I 区 25' 層	長 5.23、幅 3.09、孔 0.97、重 43.1g	製	不良 (生)	白	通常	-	-	
169	306	管状土錘	6 室埋土	6 室 J 区 15 下層	長 5.17、幅 2.98、孔 1.06、重 39.7g	製	やや不良	灰	砂少	-	-	
170	307	管状土錘	6 室埋土	6 室 J 区 15 層	長 5.17、幅 2.75、孔 0.89、重 35.9g	製	良	灰	砂少	-	-	
171	303	管状土錘	6 室東側堆積	6 室東 1 区ｶｸﾗﾝ	長 5.58、幅 3.00、孔 0.99、重 46.6g	製	やや不良	灰白～白	砂少	-	-	
172	49	坏 A	5 室床下	5 室 I 区床下	口 [14]、底 [7.3]、高 2.5	転	(2 次被熱)	内外暗灰	通常	6	-	
173	52	坏 A	5 室床下	5 室 e 区床下 g 層	口 [13.8]、底 [7.2]、高 3.2	製	不良 (生)	内外白	通常	8	右	
174	50	坏 A	5 室床下	5 室 c 区床下 f 層	口 [14.2]、底 [8.4]、高 3	製	良	内灰白、外灰	通常	5	-	
175	48	坏 A	5 室床下	5 室 e 区床下 f 層	口 [13.9]、底 [7.8]、高 3.4	製	不良 (酸)	内灰褐 5YR4/2、外灰	通常	7	-	
176	51	坏 A	5 室床下	5 室 d 区床下 f 層・c 区床下 f 層	口 [13.6]、底 [5.4]、高 3.4	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 10YR8/4 ～ 8/6	通常	6	-	
177	54	坏 A	5 室上器集中	上器集中 132	口 [12.5]、底 [8.1]、高 2.9	転	(2 次被熱)	内外暗灰	通常	6	右？	底外ﾍﾗ記号「/」
178	55	坏 A	5 室上器集中	上器集中 76	口 [13]、底 [6.8]、高 3.4	製	やや不良	内外灰白	通常	5	右	重田類、底外ﾍﾗ記号「×」?
179	56	坏 A	5 室上器集中	上器集中 86	口 [13.1]、底 [6.6]、高 3.3	転？	(2 次被熱)	内外灰	通常	30	右	重田類？、ｶｸﾜﾘ付着
180	53	坏 A	5 室埋土	5 室 E 区 13 層	口 [13.2]、底 [8]、高 2.9	転	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	
181	11	埦 A	5 室床下	5 室 c 区床下 f 層	口 [12.8]、底 [6]、高 3.9	製	やや不良	内外白～灰白	砂多	6	右	
182	12	埦 A	5 室床下	5 室 c 区床下 f 層	口 [13.2]、底 [6.1]、高 4.6	製	不良 (生)	内外白	砂多	12	-	
183	13	埦 A	5 室前庭部はつつき＋SK03A 区＋2 区表土	5 室前庭部はつつき＋SK03A 区＋2 区表土	口 [12.5]、底 [5.4]、高 3.5	転？	(2 次被熱)	内灰白、外白	通常	7	右	体外回転ｹｽﾞﾘ、底外ﾍﾗ記号「|」
184	14	埦 A	5 室埋土	5 室 E 区 19 層・20 層＋こ 6Cgr ｱﾋﾞ内流土層	口 [12.8]、底 [5.5]、高 4.4	転？	(2 次被熱)	内灰白、外青灰	砂多	6	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ
185	15	埦 A	5 室埋土	5 室 C 区 13 層	口 [13]、底 [5.2]、高 3.8	製	良好	内外灰	通常	32	右	体外～底外回転ｹｽﾞﾘ
186	5	埦 B	5 室床下	5 室 f 区床下 f 層・g 層	口 [14.5]、台 [7]、高 4.8、台高 0.8	製	やや不良	内外灰白	通常	2	左	体外回転ｹｽﾞﾘ
187	8	埦 B	5 室床下＋埋土	5 室床下 a' ・d 区床下 f 層＋ C 区 3 層・4-5 層＋ 5・6 室床下埋土	口 14.6、台 [7]、高 5、台高 0.7	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/4	砂多	19	右	体外回転ｹｽﾞﾘ
188	6	埦 B	5 室床下	5 室床下 c 層＋ 5・6 室床下廃土	口 [13.4]、台 [5.9]、高 4.4、台高 0.7	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6	通常	17	-	

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
189	9	埴B	5窯床面	5窯58・61・68・90＋5・6窯埋上	口[15.8],台7.5,高5.7,台高0.8	製	不良（生・酸）	内外白～灰	通常	9	-	
190	10	埴B	5窯床面＋6窯埋上	5窯55・63・64＋6窯L区23層	口[15.5]、台[7.1]、高5.2、台高0.7	製	不良（生・酸）	内外白～灰白	通常	3	-	
191	7	埴B	5窯床下＋6窯埋上	5窯床下c層＋6窯F区	口[16.8]、台[7.7]、高6.2、台高1	製	不良（酸）	内外浅黄橙7.5YR8/6	砂多	13	-	
192	215	埴B	5窯床下	5窯d区床下f層	台6.8,高(1.8),台高0.7	製	不良（生）	内外白	通常	台36	-	
193	216	埴B	5窯床面	5窯14	台7、高(1.1)、台高0.6	製	不良（生）	内外白～灰	通常	台33	-	
194	263	埴B	5窯上器集中	5窯上器集中85	口[13.8],台[7.8],高5,台高0.7	製	堅緻	内灰白、外灰	砂多	14	右?	ゆがみ大、釉化
195	217	埴B	5窯埋上	5窯I・J区22層底	台7.2,高(1.3),台高0.6	製	不良（生）	内外白	通常	台36	-	
196	270	埴B	6窯埋上	6窯G区7層・15層・24層＋J区1層	口[16],台[7.8],高5.9,台高1	製	不良（酸）	内外浅黄橙10YR8/4～8/6	通常	23	-	
197	1	皿B	5窯床下	5窯e区床下g層	口[14.2]、台[6.9]、高3.7、台高0.5	製	不良（生）	内外白	通常	18	右	重皿類、底外回転ｶｽﾞﾘ
198	2	皿B	5窯床下	5窯e・d区床下f層	口[13.8],台7.3,高3.4,台高0.8	製	不良（生）	内外白	通常	22	右	
199	4	皿B	5窯床下	5窯a・c区床下f層	口[14.2]、台[7.4]、高3.4、台高0.8	製	不良（生）	内外白	砂多	3	右	底外回転ｶｽﾞﾘ
200	3	皿B	5窯床下	5窯a・c・d区床下f層	口13.8、台6.6、高2.9、台高0.8	製	不良（生）	内外白	通常	35	右	重皿類
201	261	皿B	5窯上器集中	5窯上器集中136	口[13.2]、台[5.9]、高3.5、台高0.9	製	不良（酸）	内外浅黄橙10YR8/4	通常	9	-	
202	149	鉢B	5窯埋上＋6窯埋上＋6窯東	5窯C区I層＋D区中層＋E区I層＋H区2'層・19層＋6窯G区15層・33層＋H区5層＋I区9層＋東g区15層＋東f区中層・7層他	口[23.5]、底[12.4]、頸[22]、体[24.1]、高14.2、頸高3.1	製	やや不良	内外灰	通常	36	-	体外下手持ちﾅﾃﾞﾘ、体外1～2条沈線、ゆがみ大
203	179	鉢B	5窯埋上	5窯F区2'層他	口[20.6]、底[12]、頸[20.6]、体[24.2]、高15.2、頸高2.6	製	良好	内灰白、外灰	通常	3	右?	体外下回転ｶｽﾞﾘ?、ゆがみ大
204	178	鉢B	5窯埋上＋灰原	5窯F区2'層・17層・20層＋F区2'層・17層＋こ6Bgr2'層・24層＋さ6Agr1層・14層・19層	口[22.9]、底[10.6]、頸[22.4]、体[24.4]、高13.4、頸高1.3	製	やや不良	内外赤灰＋灰	砂礫多	29	右	体外下回転ｶｽﾞﾘ、体外1条沈線、ゆがみ大
205	177	鉢B	5窯埋上＋灰原	5窯E区2層・10層・17層・20層＋こ5Agr13層他	口20.3、体21、高(8.7)	製	良	内暗灰、外灰～明青灰	砂礫多	36	-	体外下ﾅｽﾞﾘ、正位重ね焼き
206	148	鉢B	6窯東側堆積＋灰原	6窯東f区7層・13層＋東h区15層・25層他	口[20.6]、底[10.5]、頸[21.1]、体[25]、高16.2、頸高1.9	製	不良（生）	内外白＋浅黄橙10YR8/4	砂多	26	右	口頸外2条沈線、体外3条沈線、体外～底外回転ｶｽﾞﾘ
207	151	鉢B	灰原(5窯)	こ6Bgr2'層・3層・タテﾀﾞ内6層・24層＋さ4Bgr1層＋さ6Agr19層他	口[24]、頸[24.6]、体[27.2]、高(12.9)、頸高2.3	製	不良（酸）	内灰褐7.5YR6/2～5/2、外橙5YR6/6	礫極多	20	右	体外回転ｶｽﾞﾘ
208	169	鉢B	SK07	SK07A区下層・下層＋B区13層・下層・ﾀﾃﾞ＋D・B'区中層＋さ8gr	口[22.8]、底[9.9]、頸[23.2]、体[25.1]、高15.9、頸高1.3	製	不良（酸）	内外浅黄橙7.5YR8/6～10YR8/4	通常	9	-	体外下手持ちﾅｽﾞﾘ、体外2条沈線、外ｽﾀｶｷ
209	167	鉢B	SK07	SK07C区1層・13層＋D区1層＋調D区表土	口[23.3]、底[9.6]、体[25.6]、高13.7	製	不良（酸）	内に赤い橙5YR6/4～7/4、外灰	砂礫多	4	右	体外～底外回転ｶｽﾞﾘ、体外2条沈線、内外ｶｷﾒ?
210	146	鉢F	5窯前庭部＋6窯東側堆積＋灰原	さ4Cgr前庭部5層＋6窯東b区7層・7・22層＋こ5Cgr3層他	口[17.8]、底[9.3]、高15.9	転?	(2次被熱)	内外灰	通常	16	-	回転糸切り、体外2条突帯・2～3条沈線、体内ｶｷﾒ?、底外ﾍﾗ先刺突
211	107	瓶B	5窯上器集中	5窯上器集中22＋B区	口10.1、台8、頸5.7、胴14.6、高20.8、台高0.6、頸高8	製	堅緻	内外灰白	通常	1	-	頸外2条沈線、胴外1条沈線、頸接合A3類、ｶﾂｶﾞﾘ・焼台・切り屑付着、釉化、容量1.1L
212	118	瓶B	5窯上器集中＋6窯東側堆積	5窯上器集中B区下底、6窯H区(東g区)15層＋東f区上③層＋東h区7層＋東i区15'層	口[10.5]、頸5、高(13.1)、頸高9.1	製	堅緻	内灰白～明青灰、外灰	通常	30	-	頸外3条沈線、胴外1条沈線、頸接合A3類、釉化
213	108	瓶D	5窯上器集中＋6窯東側堆積＋灰原	5窯上器集中1・32＋6窯東h区7層・22層＋こ5Bgr2層	口15.5,底12.4,頸8.9,胴20.1、高33.9、頸高7.4	製	良好	内灰白、外明青灰～灰白	砂多	21	-	頸外3条沈線、胴外4～5条沈線、頸接合B類、釉化、容量4.3L
214	112	瓶D	5窯上器集中	5窯上器集中3	口12.6、底9.1、頸7.1、胴17、高28.9、頸高6.9	製	良好	内灰、外明青灰	通常	5	右	胴外下回転ｶｽﾞﾘ、頸内1条沈線、胴外4条沈線、胴外ｶｷﾒ、頸接合B類、ｶﾂｶﾞﾘ・焼台A付着、釉化、容量2.8L

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
215	109	瓶 D	5 区上器集中＋6 区埋土＋東側堆積＋灰原	5 区上器集中２＋６区 H 区 15 層・中③層＋H 区＋東 g 区 15 層＋さ 4Bgr1 層	口 12.6、頸 7.6、胴 16.6、高 (25.5)、頸高 5.9	製	堅緻	内灰白、外灰～暗灰	通常	28	-	頸外２条沈線、胴外３条沈線、胴外下ﾍｽﾗﾃﾞ？、頸接合 B 類、釉化、容量 2.2L
216	111	瓶 D	5 区上器集中	5 区上器集中 34	頸 6.4、胴 16、高 (19.7)	製	堅緻	内灰、外灰白～明青灰	通常	-	-	胴外３条沈線、胴内外ｶｷﾒ、頸接合 B 類、ﾊｹﾂｲ付着、釉化
217	110	瓶 D	5 区上器集中＋灰原	5 区上器集中 37＋こ 6Bgr3 層	底 8.2、頸 7.2、胴 16.5、高 (21)	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	底 8	-	胴外４条沈線、胴内外ｶｷﾒ、頸接合 B 類、ﾊｹﾂｲ付着、釉化
218	101	瓶 D	5 窯埋土＋６窯埋土＋灰原	5 窯 D 区 13 層・E 区 15 層＋G 区 7 層・9 層＋15 層＋さ 7Dgr 他	口 [13.6]、頸 8、胴 18.2、高 (23.3)、頸高 6.8	転？	(2 次被熱)	内外青灰～明青灰	砂多	24	-	頸外２条沈線、胴外４条沈線、頸接合 B 類
219	170	瓶 D	SK07	SK07A 区 6 層・13 層・下層＋ B 区 13 層・下層＋ C 区 1 層	口 [22]、胴 [25.5]、高 (38.2)	製	不良 (酸)	内灰、外橙 5YR6/6 ～ 7/6 ＋灰	通常	8	-	頸外２条沈線、胴外４～５条沈線、内ﾅｲﾄ、実 171 と同一か
220	171	瓶 D	SK07	SK07B 区拡張道路	底 [10.1]、高 (7.5)	製	不良 (酸)	内に ぶい黄橙 10YR6/3、外橙 5YR7/6	通常	底 9	-	実 170 と同一か
221	134	壺 A'	5 窯上器集中＋埋土＋６窯埋土	5 窯上器集中 68・C 区 1 層＋6 窯 G 区 7-15 層・15' 層他	口 [17.4]、頸 [17.1]、胴 [33]、高 (23.7)、頸高 2	製	やや良	内暗灰～暗青灰、外灰	通常	2	-	外ﾀﾅｷﾞ He 類→ﾀﾅｷﾞ、内当て具 (SD 類 ?) →ｽﾘｹﾝ
222	138	壺 A'	5 窯埋土＋６窯埋土	5 窯 F 区 2 層＋6 窯 G 区 7 層・15 層・15' 層＋H 区 15' 層＋J 区 24 層	口 16.7、頸 16.2、胴 30.8、高 (20.2)、頸高 2.4	製	やや良	内灰～明青灰	砂多	31	-	胴外４～５条沈線、胴内ﾅｲﾄﾒ？
223	136	壺 G	5 窯床下＋埋土＋灰原	5 窯床下 c 層＋C 区 4・5 層＋さ 6Agr1 層・14 層・19 層＋さ 6Dgr1 層＋L 5Agr 前面土坑全 2 層他	口 [8.3]、底 [12.2]、頸 [8.5]、胴 [20.2]、高 24.4、頸高 2.9	製	やや不良	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	25	右	胴外下ﾀｷﾒ？→回転ｹｽﾞﾘ、頸外１条沈線、胴外５～６条沈線、容量 4.5L
224	173	小型壺 G	灰原 (5 窯)	こ 5Bgr2-3 層＋こ 5Cgr3 層・6 層＋こ 6Bgr2 層＋さ 5Agr2 層	口 4.9、頸 5.2、胴 14.1、高 (11.5)、頸高 2.8	製	良	内灰、外明青灰～青灰	通常	36	-	胴外４条沈線、ｶｷﾒ付着、ゆがみ大、釉化
225	113	平底甕	5 窯床面＋埋土	5 窯 6・22・23・25・32・33・38・39・59・70・82・83 +床はりつき＋ D 区 13 層＋F 区 2' 層＋ G 区 13 層・23 層＋ G・H 区 6 層 (20 層下) →H 区 23 層	口 29.3、底 13.9、頸 27.4、胴 37.7、高 28.9、頸高 6.9	製	良	内明青灰～灰、外明青灰	砂礫多	23	-	外ﾀﾅｷﾞ He 累、内当て具 (SD 類 ?) →ｽﾘｹﾝ、、釉化、容量 16.5L
226	117	平底甕	5 窯前庭部	さ 4Cgr1 層・前庭部全 2 層＋さ 5Bgr 最上層・前庭部全 2 層他	口 17.8、底 13.5、頸 15.1、胴 31.1、高 35.4、頸高 3.2	製	不良 (生)	内外白	通常	28	-	外ﾀﾅｷﾞ Ha 類、内当て具 SD 類→ｽﾘｹﾝ、容量 15.6L
227	159	平底甕	5 窯埋土＋灰原	5 窯 C 区 1 層・2 層・13 層＋ E 区 13 層＋ F 区 17-21 層＋さ 6Agr19 層	底 13.2、胴 36.6、高 (29.4)	転？	(2 次被熱)	内暗灰～暗赤灰 (2.5YR3/1)、外灰	礫極多	底 30	-	外ﾀﾅｷﾞ He 類、内当て具無文→ｽﾘｹﾝ、ゆがみ大
228	168	擂形深鉢	SK07	SK07A 区 13 層・中層・下層＋ C 区 1 層＋ D 区下層・下層③層＋ D・D' 区中層他	口 [35.6]、底 [19]、高 [33.1]	製	堅緻	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	16	-	外ﾀﾅｷﾞ Ha 類、内当て具ｽﾘｹﾝ＋ﾅｲﾄﾒ、内擂化
229	156	長胴釜	5 窯上器集中＋灰原	5 窯上器集中 13・68・83・98・101・110・115・128・B 区下底＋こ 5Dgr6' 層	口 [20]、頸 [18.6]、胴 [21.4]、高 (24.9)、頸高 2.1	製	良好	内灰白～灰、外灰白	礫極多	34	-	外ﾀﾅｷﾞ He 類、内当て具 He 類
230	157	長胴釜	5 窯上器集中	5 窯上器集中 4・9・10・14・15・18・45・88・89・91・92・B 区下底	口 [21.3]、頸 [20]、胴 [22.4]、高 (23.3)、頸高 2.1	製	やや良	内灰白～白、外青灰	礫極多	12	-	外ﾀﾅｷﾞ He 類、内当て具 He 類→ｽﾘｹﾝ、ｶｷﾒ付着、ゆがみ大
231	153	長胴釜	5 窯上器集中	5 窯上器集中 41・46・48・49・50・83・B 区下底	口 [22.6]、頸 [21.1]、胴 [22.6]、高 (18.3)、頸高 1.8	製	やや不良	内明青灰～灰、外灰白～青灰	砂多	15	-	外ﾀﾅｷﾞ He 類、内当て具 He 類？→ｽﾘｹﾝ
232	155	長胴釜	5 窯埋上	5 窯 C 区 13 層	口 [14.9]、頸 [14]、胴 [16.4]、高 (11.4)、頸高 1.8	製	良好	内明青灰～灰、外明青灰～灰白	礫極多	14	-	釉化
233	297	コップ形	5 窯埋上＋灰原	5 窯 F 区 2 層＋さ 5Agr 最上層他	口 [12]、底 [7.9]、高 11.2	製	良好	内灰、外暗灰	砂少	4	右	回転糸切り、外５～６条沈線、有蓋
234	226	坏 A	灰原	さ 6Agr	口 [12.8]、底 [8.2]、高 3.4	製	良	内外灰	砂少	12	右	重田類、底外ﾍﾗ記号「×」
235	228	坏 A	灰原	さ 5Agr13 層・2 層・上層＋さ 5Dgr3 層	口 13、底 8.5、高 3.3	製	良好	内外灰	通常	18	右	底外ﾍﾗ記号「|」、ゆがみ大
236	229	坏 A	灰原	さ 5Dgr4-5 層	口 [13.2]、底 [7.6]、高 3.2	製	良	内外灰	通常	10	-	
237	233	坏 A	灰原	こ 5Agr6 層他	口 [13.2]、底 [8.6]、高 3.2	製	堅緻	内外青灰	通常	6	-	重田類
238	218	坏 A	灰原	L 5Dgr2 層他	口 13.4、底 7.5、高 3.4	製	良好	内外灰	通常	27	右	重田類
239	221	坏 A	灰原	さ 5Cgr3 層	口 13、底 8、高 3.4	製	不良 (生)	内外白	通常	24	右	
240	220	坏 A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [12.5]、底 [7.9]、高 2.8	製	堅緻	内外青灰	砂多	32	-	重田類、底外ﾍﾗ記号「|」

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
241	224	坏A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [12.7], 底 [8.1], 高 2.5	製	堅緻	内外青灰	通常	10	-	重田類、底外ヘラ記号「」
242	223	坏A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [11.8], 底 [7.1], 高 2.4	転	(2 次被熱)	内外灰	通常	9	-	底外ヘラ記号「」？
243	235	坏A	灰原	さ 5Dgr2 層・3 層	口 [13], 底 [7.9], 高 2.8	製	やや良	内赤灰、外灰	通常	12	-	
244	230	坏A	灰原	こ 5Bgr1 層	口 [13.5], 底 [8.7], 高 2.6	転	(2 次被熱)	内外灰	砂多	11	-	
245	236	坏A	灰原	さ 6Agr19 層	口 [12.2], 底 [7.4], 高 2.6	製	良好	内外灰	通常	9	-	
246	222	坏A	灰原	こ 5Bgr2 層＋さ 6Agr19 層＋さ 6Bgr2 層・3 層他	口 11.8、底 7.4、高 3.5	転	(2 次被熱)	内外灰	砂多	30	-	底外ヘラ記号「×」、焼台転用痕、ゆがみ大
247	238	坏A	灰原	さ 5Dgr2 層	口 [13.2], 底 [8.1], 高 3.5	製	良好	内外灰	通常	9	-	
248	232	坏A	灰原	こ 6Bgr1 層２	口 [11.8], 底 [6.8], 高 3.2	製	不良（生）	内外白	通常	10	-	
249	219	坏A	灰原	こ 5Cgr3 層	口 [12.2], 底 [6.8], 高 3.1	製	良好	内外灰	通常	31	右	重田類、ゆがみ大
250	253	盤A	灰原	さ 5gr2 層・4-5 層	口 [14.4]、底 [12.4]、高 1.9	製	堅緻	内外灰白	通常	6	-	ｶｴﾂﾘ付着、釉化
251	252	盤A	灰原	さ 6Bgr6 層＋さ 5Cgr14 層他	口 [16], 底 [13.6], 高 2.4	製	堅緻	内外灰白	通常	14	-	重田類、ゆがみ大
252	247	盤A	灰原	し 6Agr1 層	口 14.6、底 12.3、高 2.2	転	(2 次被熱)	内外青灰	通常	6	-	転用痕（上器片付着）
253	243	盤A	灰原	こ 5Cgr6 層＋さ 5Dgr3 層	口 [15.4]、底 [12.7]、高 1.8	製	良好	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大
254	255	盤A	灰原	さ 5Dgr2-3 層	口 [16.4]、底 [14.2]、高 1.7	製	不良（生）	内外白～灰	通常	7	-	
255	244	盤A	灰原	さ 5Dgr2 層・4-5 層	口 [15.5]、底 [13.5]、高 1.9	製	良好	内外青灰	通常	10	-	
256	248	盤A	灰原	さ 5Cgr1 層・13 層＋さ 6Agr3 層＋し 6Agr14 層	口 [14.5]、底 [12.8]、高 2	転？	(2 次被熱)	内外青灰	通常	19	右	ｶｴﾂﾘ・上器付着（転用痕？）、ゆがみ大
257	251	盤A	灰原	さ 6Agr19 層＋さ 5Dgr4-5 層	口 [15.8], 底 [13], 高 2.1	製	不良（生）	内外白	通常	4	左？	
258	250	盤A	灰原	さ 5Cgr1 層・3 層＋さ 5Dgr4-5 層	口 [15.5]、底 [13.1]、高 2.2	製	不良（生）	内外白	通常	16	-	
259	210	埦A	灰原	こ 5Cgr9 層	口 [12.6], 底 [5.4], 高 4.4	転	(2 次被熱)	内外灰	通常	12	左	体外～底外回転ｹｽﾞﾘ、ｶｴﾂﾘ付着、灰釉検微？
260	212	埦A	灰原	さ 5Agr6 層	口 13.5、底 6.2、高 4.2	製	良好	内外灰	通常	23	右	体外回転ｹｽﾞﾘ
261	211	埦A	灰原	こ 5Cgr2-3 層	口 [13.4]、底 [6.6]、高 4	製	不良（生）	内外白	通常	15	右	体外回転ｹｽﾞﾘ
262	213	埦A	灰原	こ 5Bgr1 層・2 層・13 層・最上層・盛土＋さ 5Dgr 2-3 層	口 13.6、底 6.3、高 4.4	製	やや良	内外赤灰～灰	通常	34	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ
263	285	埦B	灰原	こ 5Bgr3 層	口 [14.2]、台 [7.2]、高 4.8、台高 0.6	製	やや不良	内外灰白	通常	17	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ
264	286	埦B	灰原	こ 5Cgr2-3 層・6 層	口 14、台 6.8、高 5.1、台高 0.7	製	やや不良	内外灰	通常	22	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ
265	214	埦B	灰原	こ 6Bgr ｱﾋﾞ内 3 層	口 14.6、台 6.8、高 5.3、台高 0.7	製	良好	内外灰	通常	29	-	重田類
266	287	埦B	灰原	さ 5Dgr2-3 層・1-13 層他	口 [14.5]、台 [6.3]、高 4.3、台高 0.8	製	堅緻	内外灰	通常	19	-	重田類、ゆがみ大
267	290	皿B	灰原	こ 5Cgr3 層・13 層＋こ 6Bgr1 層	口 13.5、台 6.5、高 3、台高 0.6	製	良好	内外灰	砂多	36	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ
268	289	皿B	灰原	さ 5Agr2 層＋さ 5Dgr3 層	口 [14.1]、台 [7.5]、高 3.1、台高 0.8	製	堅緻	内外灰	通常	27	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ、ゆがみ大
269	291	皿B	灰原	さ 5Agr3 層	口 14.1、台 6.6、高 3.3、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	砂多	23	右	重田類、体外回転ｹｽﾞﾘ、ゆがみ大
270	294	皿B	灰原	さ 5Dgr3 層・最上層	口 [13.6]、台 [6.9]、高 2.9、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	通常	12	-	重田類、釉化
271	288	皿B	灰原	こ 5Bgr13 層＋こ 5Cgr2 層＋さ 6Dgr19 層他	口 [13.1]、台 [6.5]、高 3.6、台高 0.7	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	23	-	重田類、底外ヘラ記号「」
272	292	皿B	灰原	こ 5Dgr1 層＋し 5Dgr 最上層	口 13.5、台 6.5、高 3.4、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	17	-	重田類
273	293	皿B	灰原	こ 5Bgr13 層＋さ 5Agr6 層＋さ 5Bgr1 層	口 14.2、台 6.6、高 3.6、台高 0.6	製	良好	内外青灰～灰	通常	20	-	重田類
274	295	皿B	灰原	こ 5Cgr3 層＋さ 5Cgr3 層	口 [14.2]、台 [7]、高 3.7、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	12	-	重田類
275	296	皿B	灰原	こ 5Cgr13 層	口 [12.2]、台 [6.3]、高 3.5、台高 0.5	製	良好	内青灰～灰、外灰	通常	13	-	重田類
276	150	鉢B	灰原	こ 5Agr13 層・最上層＋こ 5Bgr1 層	口 [23.4]、底 [9.8]、頸 [21.2]、体 [24.2]、高 15.1、頸高 3.2	製	良好	内外灰	砂少	20	右	体外下手持ちﾍｽﾞﾘ、底外回転ｹｽﾞﾘ、体外 1 条沈線、体内外鉢ﾒ、ゆがみ大
277	164	鉢B	灰原	し 6Bgr2 層	口 21.6、底 12.2、頸 19.3、体 22.5、高 14.3、頸高 2.5	製	良好	内外灰	通常	36		回転糸切り、体外 2 条沈線、内外鉢ﾒ
278	163	鉢F	灰原	こ 5Agr13 層＋さ 5Bgr1 層＋さ 6Agr2 層他	口 17.6、高 (15.9)	製	良好	内外灰	通常	19	右	体外回転ｹｽﾞﾘ、体外 1 条突帯・2 条沈線、内外鉢ﾒ？

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
279	120	瓶B	灰原	こ 5Cgr1 層＋さ 5Agr3 層・6 層＋こ 6Bgr3 層他	台 8.7、胴 15.2、高 (10.4)	製	堅緻	内灰、外釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	台23	右	胴外下回転ｹｽﾞﾘ、胴外 2 条沈線、焼台 (C 類)・ｶｻﾀﾞ付着、釉化
280	162	瓶D	灰原	さ 6Agr1 層・19 層＋さ 6Dgr ﾀﾃﾀﾞ 内 19 層	頸 [11.4]、胴 [26.8]、高 (22.1)	製	堅緻	内外灰白	通常	-	-	外ﾀﾃ He 類、内当て具 He 類→ｽﾘﾀｼ、頸内 1 条沈線、胴外 2 条沈線、ゆがみ大、釉化
281	141	壺F	灰原	こ 6Bgr2 層・34 層＋さ 6Agr3 層・6 層・19 層＋さ 6Cgr3 層＋さ 7Agr13 層他	[19.1]、底 [13.1]、頸 [17.2]、胴 [25.6]、高 27.6、頸高 3.6	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	胴外 4 条沈線、胴内外ﾅﾃﾞﾅ?、釉化、容量 8.5L
282	174	壺F	灰原	こ 6Agr3 層＋さ 6Agr1 層・2 層・3 層・6 層・19 層＋さ 6Dgr13 層・19 層他	[20.2、底 12.6、頸 16.8、胴 24.2、高 28.5、頸高 4.3	製	堅緻	内灰、外釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	35	-	胴外ﾅﾃﾞﾅ、焼台痕、釉化、容量 8.4L
283	172	壺F	灰原	こ 6Bgr3 層・20 層他	[14.1]、底 [9.1]、頸 [13]、胴 [18.8]、高 16.6、頸高 2.2	転？	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	21	-	頸外 1 条沈線、胴外 3 ～ 4 条沈線、胴外ﾅﾃﾞﾅ、底外工具ﾅﾃﾞ ?→ﾍﾗ記号「|」、ｶｻﾀﾞ付着、ゆがみ大、釉化、容量 1.0L
284	161	横瓶	灰原	さ 5Dgr3 層＋さ 6Agr2 層・6 層・19 層＋さ 6Cgr8 層＋さ 6Dgr19 層＋し 6Agr5 層・14 層他	[10.8、頸 10.5、胴 30.9、高 24.8、頸高 2.6	製	堅緻	内灰白～明青灰、外灰白～灰	通常	27	-	底部側面：外ﾀﾃ Ha 類・内当て具 Da 類→ｽﾘﾀｼ、閉塞側面：外ﾀﾃﾀﾞ・内ﾀﾃﾀﾞ or ﾅﾃﾞﾅ、外 6 条沈線→閉塞面外ﾀﾃﾀﾞ Ha 類→ﾀﾃﾀﾞ、釉化、容量 5.8L
285	160	中甕	灰原	こ 5Bgr1-2 層・2-3 層・4/内底上＋さ 5Agr2 層・3 層・13 層	[20.4、頸 15.6、胴 30.6、高 39.9、頸高 4.8	製	良好	内外灰	通常	29	-	外ﾀﾃ He 類→ﾅﾃﾞ、内当て具 He 類→ｽﾘﾀｼ、頸内ﾅﾃﾞ、ゆがみ大、容量 15.7L
286	115	平底甕	灰原	こ 6Bgr ﾀﾃﾀﾞ 内 6 層＋さ 6Agr1 層・2 層・14 層・19 層他	[24.1]、頸 [20]、高 (8.3)、頸高 3.1	転	(2 次被熱)	内灰、外暗灰	砂礫多	15	-	外ﾀﾃ He 類、内当て具 He 類→ｽﾘﾀｼ、ゆがみ大
287	116	大甕	灰原	さ 6Dgr13 層＋さ 7Agr13 層・ﾀﾃﾀﾞ内 19 層＋さ 6Bgr6 層	[38]、頸 [30.8]、高 (11.3)、頸高 4.6	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	6	-	外ﾀﾃ He 累、内当て具 (SD 類 ?→ｽﾘﾀｼ、釉化
288	158	長胴釜	灰原	こ 5Bgr2-3 層・3 層・6 層・8 層＋こ 5Cgr1 層・3 層＋こ 5Dgr13 層	[20.4、頸 18.5、胴 21.6、高 (27.5)、頸高 1.9	製	やや不良	内灰～白、外青灰～白	礫極多	8	-	外ﾀﾃ He 類、内当て具ｽﾘﾀｼ、内ﾅﾃﾞﾅ?、釉化
289	154	長胴釜	灰原	こ 5Bgr2 層＋こ 5Cgr3 層＋さ 5Agr3 層・13 層＋さ 5Dgr1-16 層・2 層・13 層＋最上層＋し 5Agr 前面土坑全 2 層＋し 6Bgr2 層他	[21.8]、頸 [19.8]、胴 [22.2]、高 (17.9)、頸高 2.2	製	良好	内外灰白	通常	15	-	外ﾀﾃ He 類→胴外ﾅﾃﾞﾅ、内当て具 He 類→ｽﾘﾀｼ、ゆがみ大
290	128	小型瓶	灰原	こ 6Bgr1 層・2 層	[5.9]、高 (2.2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	釉化
291	123	小型瓶	灰原	こ 6Bgr6 層精査・20 層＋さ 6Agr19 層他	底 4.5、頸 3.1、胴 8、高 (7.2)	製	堅緻	内灰白、外釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ	通常	底36	右	回転糸切り、胴外ﾅﾃﾞﾅ?、底外ｺﾍﾗ記号「|」、釉化
292	124	小型瓶	灰原	こ 6Bgr ＋さ 6Dgr ﾀﾃﾀﾞ 内 19 層	底 4.8、頸 [3.5]、胴 [9.4]、高 (6.9)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	底36	右？	回転糸切り、胴外 1 条沈線、ｶｻﾀﾞ付着、釉化
293	125	小型瓶	灰原	さ 5Dgr2-3 層	底 [5]、高 (3.6)	転？	(2 次被熱)	内褐灰、外明青灰	通常	底25	-	回転糸切り、ｶｻﾀﾞ付着、釉化
294	126	小型壺	灰原	こ 5Cgr3 層・最上層	口 5、頸 3.8、高 (2.8)、頸高 2.2	製	良	内釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ、外灰白	通常	28	-	釉化
295	127	小型壺	灰原	こ 5Dgr 最上層	口 [5.4]、頸 [4.3]、高 2.7、頸高 2	製	良	内釉＝灰ｵﾘｰﾌﾞ、外灰白	通常	11	-	釉化
296	129	小型壺	灰原	さ 5Agr 最上層	口 [11.1]、頸 [9.5]、胴 [11.5]、高 (5.1)、頸高 1.4	製	良好	内明青灰、外青灰	通常	2	-	釉化
297	207	特殊蓋	灰原	さ 5Dgr2-3 層他	つ径 2.5、高 (5.5)、つ高 2.6	製	良好	内外灰白	通常	-	右	天外回転ﾅﾃﾞﾅ、天内ﾅﾃﾞﾅ
298	298	特殊蓋	灰原	2 区表上＋ 3 区表上 (灰原含)	口 [23.3]、高 (3.1)	転	(2 次被熱)	内外灰	砂多	1	-	回転糸切り ?、内ﾅﾃﾞﾅ?
299	299	円面硯	灰原外	4 区盛上流上	硯面内径 [10.1]、外径 [11.3]、高 (1.3)	製	堅緻	灰白	通常	-	-	ﾍｽﾞﾘ有、釉化
300	300	平瓶（把手）	灰原外	し 7gr 盛土	長 (13.4)、幅 1.8、厚 1.5	製	良好	青灰	通常	-	-	ﾍｽﾞﾘ有
301	301	平瓶（把手）	灰原	し 4Bgr1 層	長 (12.4)、幅 2.2、厚 1.4	製	堅緻	灰白	通常	-	-	ﾍｽﾞﾘ有、釉化
302	302	無足片	灰原	さ 5Agr6 層	高 (3.7)、幅 2.1、厚 2	製	堅緻	灰白	通常	-	-	ｶｻﾀﾞ付着
303	324	焼台B	6 窯床下 (13 窯)	6 窯 d 区床下 j 層	口 12.4、高 3.4	製	良	内灰白、外灰～灰白	砂多	35	-	土器（ｽﾀﾝﾌﾟ）付着、ｶｻﾀﾞ付着、釉化
304	326	焼台B	13 窯舟底ﾋﾞｯﾄ	13 窯 f 区床下 f 層	口 [12.1]、高 3.7	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	ｶｻﾀﾞ付着、釉化
305	323	焼台B	6 窯床下 (13 窯)	6 窯 g 区床下 s 層	口 7.2、高 3.2	製	良	内外灰	砂多	20	-	ｶｻﾀﾞ付着

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記（重ね焼き・焼痕等）
306	334	焼台Ｃ	灰原（13 窯）	こ 6Bgr タテﾋﾞ内ｶｳﾝ	口 4.4、高 4.1	製	良	内灰、外明青灰	砂多	23	-	ｶｳﾝ付着、釉化
307	325	焼台Ｃ	13 窯南底ﾟット	13 窯ｃ区床下ｃ層	口 [7.8]、高 6	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	上面片・ｶｳﾝ付着、釉化
308	335	焼台Ｃ	灰原（13 窯）	こ 5Bgr13 層＋さ 5Dgr4-5 層＋さ 6Agr6 層他	口 8、高 7.4	製	良	内外灰白	通常	24	-	ｶｳﾝ付着
309	336	焼台Ｃ	灰原（13 窯）	こ 5Cgr1-2 層＋さ 5Dgr2-3 層・1-16 層＋さ 6Dgr13 層他	口 [8.8]、高 9.1	製	良	内外灰	通常	18	-	ｶｳﾝ付着、釉化
310	330	焼台Ａ	6 窯埋土	6 窯Ｈ区 15' 層	口 11.4、底 9.3、高 3.1	製	良	内灰白、外灰～青灰	通常	31	右	回転糸切り
311	328	焼台Ａ	13 窯前庭部（6 窯最下＋灰原）	さ 5Bgr 前庭部 18 層＋こ 5Bgr2 層他	口 14.1、底 7.4、高 2.3	製	良	内外灰白	通常	20	右	回転糸切り、ゆがみ大
312	83	焼台Ａ	6 窯前庭部＋埋土＋東側堆積	6 窯前庭部（し 4Dgr)2 層＋Ｇ区 15 層＋東ｈ区 7 層・22 層	口 [19.8]、底 [8.6]、高 3.9	製？	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	右	ｶｳﾝ付着、専用焼台か
313	84	焼台Ａ	灰原（6 窯）	こ 5Bgr1 層（ｶﾊ内流上）＋さ 5Dgr13 層・最上層他	口 [18.7]、底 [8.3]、高 4.3	製？	(2 次被熱)	内外灰白	砂多	8	右	ゆがみ大、専用焼台か
314	321	焼台Ｂ	6 窯床面	6 窯 131	口 10.6、高 3.4	製	良	内灰、外青灰～灰	通常	36	右	体外回転ｶｽﾞﾘ
315	329	焼台Ｂ	6 窯埋土＋５窯上器集中＋６窯東側堆積	6 窯Ｇ区 9 層＋５窯上器集中Ｂ区下底＋SK04 全 2 層	口 13.6、高 3.5	製	良	内灰、外灰～明青灰	通常	26	右	
316	332	焼台Ｃ	6 窯埋土	6 窯Ｈ区 8 層	口 6.7、高 3.3	製	良	内外灰白	通常	36	右	ｶｳﾝ付着、釉化
317	322	焼台Ｄ	6 窯床面	6 窯 40	口 13.7、高 7.5	製	良	内外明青灰	砂多	8	-	ｶｳﾝ付着、ゆがみ大
318	331	焼台Ｄ	6 窯埋土	6 窯Ｇ区 15 層	口 12.6、高 5.1	製	良	内灰、外灰～青灰	通常	32	-	体外回転ｶｽﾞﾘ
319	315	焼台Ａ	5 窯床下	5 窯ｇ区床下	口 9.7、高 3	製	良	内暗赤灰 2.5YR3/1、外暗青灰	砂多	36	右	
320	316	焼台Ａ	5 窯床下	5 窯ｃ・ｄ区床下ｆ層	口 12.2、高 3.8	製	不良	内灰、外灰白～灰赤 2.5YR4/2	砂多	32	右	
321	317	焼台Ａ	5 窯床下	5 窯ａ・ｃ・ｄ区床下ｆ層＋床下ｅ層	口 13.6、高 4.2	製	良	内灰白、外明青灰	通常	28	-	
322	318	焼台Ａ	5 窯床下	5 窯ｄ・ｃ・ｅ区ｆ層	口 14.9、高 5	製	不良	内外灰～灰白	砂多	22	-	
323	319	焼台Ａ	5 窯埋土	5 窯Ｆ区 17-21 層	口 22.4、底 12.9、高 4.5	製	良	内灰白、外灰～灰白	砂多	28	右	回転糸切り、体外回転ｶｽﾞﾘ
324	314	焼台Ａ	5 窯床面	5 窯 27	口 9.5、底 6.3、高 2.4	製	良	内灰赤 2.5YR4/2、外青灰	通常	35	右	回転糸切り
325	320	焼台Ｂ	5 窯埋土	5 窯Ｅ区 17-20 層＋Ｇ-Ｈ区焼成部 6 層	口 10.4、底 10、高 3.2	製	良	内外灰～灰赤 2.5YR4/2	砂礫多	21	右	底外穿孔 4
326	333	焼台Ｂ	灰原（5 窯）	こ 5Bgr2 層	口 6.6、底 5.5、高 3.3	製	良	内外灰	砂多	26	右	回転糸切り
327	313	焼台Ａ	5 窯床面	5 窯 31	口 8.9、高 3.1	製	良	内外灰～明青灰	砂礫多	34	-	
328	327	焼台Ｄ	5 窯上器集中＋灰原	5 窯上器集中 97＋こ 5Agr8 層＋こ 5Bgr2 層	口 [12.6]、高 4.8	製	良	内外灰白	通常	14	-	ｶｳﾝ付着、釉化
329	309	上師盤Ａ	SJ02	SJ2 横ｶｳﾝ	口 [15.2]、底 [13.1]、高 2.1	製	良	内外淡黄 2.5Y8/4	通常	2	-	
330	310	上師釜	SJ02	SJ2-13	高 (1.9)	製	良	内外黄橙 10YR8/6	通常	-	-	
331	337	上師釜	SJ02	SJ2-3	高 (3.1)	製	良好	内外黄橙 7.5YR8/8 ～ 8/6	砂礫多	-	-	内カキメ
332	308	上師赤彩埦Ａ	SJ03	SJ3F 区	底 [6.1]、高 (1.3)	製	良好	内外黄橙 7.5YR8/8	通常	-	右	体外回転ｶｽﾞﾘ、内ｺﾞｷ
333	312	上師短脚釜	SJ03	SJ3-16	底 8.9、高 (2.6)	製	やゝ良	内外黄橙 7.5YR8/8 ～ 8/6	礫極多	-	右	回転糸切り、体外回転ｶｽﾞﾘ、体内ｺﾞｷ
334	311	上師鍋	SJ03	SJ3A	口径 [30]、高 (5.3)	製	良	内外黄橙 10YR8/6	通常	2	-	体外ｺﾞｷ
335	340	上師円盤	SJ03	SJ3B 区上層	長 (5.1)、幅 (2.8)、厚 0.9	製	良	内外黄橙 7.5YR8/8	通常	-	-	片側穿孔 1、周縁は孔以外破面
336	338	上師釜	SJ04	SJ4G 区	高 (1.7)	製	やゝ良	内外淡黄 2.5Y8/4	通常	-	-	内カキメ
337	339	上師釜	SJ04	SJ4H 区	高 (2.2)	製	良好	内外黄橙 10YR8/6	砂礫多	-	-	内カキメ？
338	166	坏Ｈ	SK07	SK07D 区中層・下層	口 [14]、底 [8.6]、受部 [16.2]、高 (3.9)	製	良好	内外灰	通常	-	左	底外回転ｶｽﾞﾘ、混入品 (6C 後半)

付章　その他の遺構

はじめに

付章として、窯跡以外に検出したその他の遺構を報告する。なお、SK01 及び SK04・05（6 号窯東側堆積）は窯跡に付随するものとして扱い、SK02・03 は遺物編 1 付章にて報告済みである。本章では、SJ01 ～ 04（土師器焼成坑）、SK07（大型土坑）、SK06・08（焼土坑）を報告する。

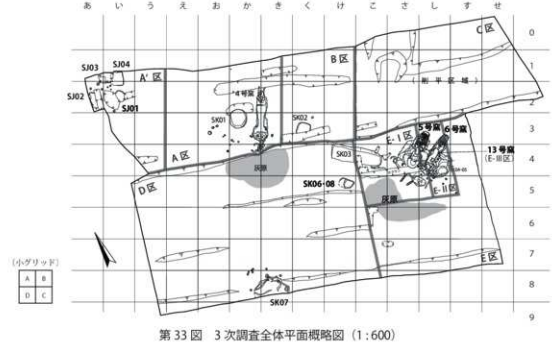
(1)　SJ01 ～ 04〔土師器焼成坑〕

今調査区の北西端（A' 区）で検出した 4 基の土師器焼成坑である。いずれも撹乱が激しいため、残存状況は極めて悪く遺物の出土も少ない。なお遺構の提示方法は（小松市教委 2002）を参照し、遺構平面図は奥壁側と判断される斜面上方を上にして示している。

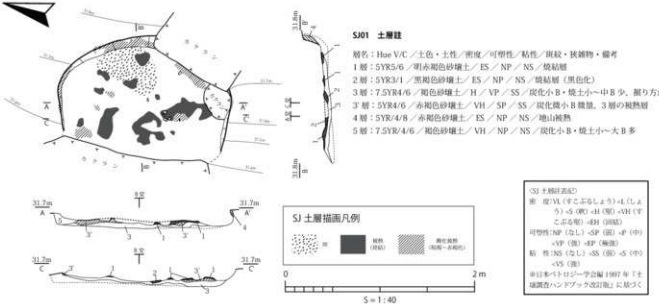
SJ01 は標高 31.75m 付近に奥壁が設定されており、横長型隅丸方形状の平面形を呈すると推定される。縦軸残存 1.30m、横軸推定 1.81m、奥壁深 17.5cm 程を測る。撹乱によって床面が所々削られているが、床の焼結面・被熱面、床下貼床、地山壁面被熱が部分的に確認でき、中央から奥壁側の床上面には炭化物がやや多めに混じる。出土遺物は土師器煮炊具片がわずかに出土しているが、細片ばかりで器種器形の詳しく分かるものはない。

SJ02 は撹乱によって奥壁と前壁が大きく削られているため詳細が不明だが、標高 30.9 ～ 31m 付近に奥壁が設定されているものと推測される。平面形は残存する側壁から想定すると平面横長型になると思われる。縦軸残存 0.85m、横軸残存 2.46m、左側壁深 12.8cm 程を測る。中央付近では比較的床面の残存が良好で、被熱面が一体に広がって一部焼結し、左側壁も被熱する。また炭化物がブロック状に分布する部分もある。出土遺物は土師器片と須恵器片（食膳具口縁部片 2 点、甕胴部片 2 点）が出土している。329 は盤 A で、厚手の底部から体部が丸く立ち上がる。おそらく赤彩が剥落したものと思われる。330 と 331 は釜の口縁部で、330 は端部をやや斜め上へ、331 はわずかに上へ摘み上げている。

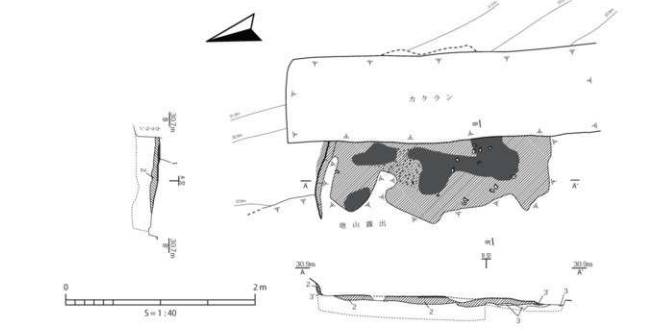
SJ03 と **SJ04** は切り合って構築されているが、切り合い部分が撹乱によって消失しているため、切り合い関係は不明である。SJ03 は標高 31.84 ～ 32.05m 付近に奥壁が設定され、縦軸推定 2m、横



第 33 図　3 次調査全体平面概略図（1：600）



第 34 図　SJ01 平面図・断面図



第 35 図　SJ02 平面図・断面図

第 36 図　SJ02 遺物実測図

軸 2.09m、奥壁深 24cm 程を測り、平面形は正方形状を呈すると推測される。SJ04 は残存が悪く、前壁側で横軸残存 1.32m、右側壁深 8.4cm 程を測り、残存する側壁から想定すると平面方形状と思われる。SJ03 は奥壁側を中心に焼結面が広がり、奥壁面と側壁面にも被熱がみられる。SJ04 は前壁側の一部で焼結面が確認でき、わずかに右側壁面にも被熱が確認できる。両遺構からの出土遺物は SJ01・02 に比べて多く、土師器煮炊具片が主体である。332 は赤彩椀 A 底部、333 は小釜底部で、体部下位にヘラケズリ、内面にカキメを施し、糸切り痕が残る。334 は鍋の口縁部、335 は焼成道具と思われる土師質円盤片である。336 と 337 は釜の口縁部で、336 は端部外面ナデ、337 は上方へ摘み上げている。

以上、土師器焼成坑 4 基は近接して検出され、連続構築されたと考えられる。所属時期は出土遺物から概ねⅣ$_2$ 期の範疇で捉えられる。近隣の二ツ梨一貫山窯跡 F 地区で総数 28 基の土師器焼成坑が調査されているが、Ⅳ$_1$ ～Ⅴ$_2$ 期までの操業期間の中でⅣ$_2$ 期は最も焼成坑が増加し、同じ場所で連続構築されて群集する傾向にある（小松市教委 2002）。

(2) SK07〔大型土坑〕

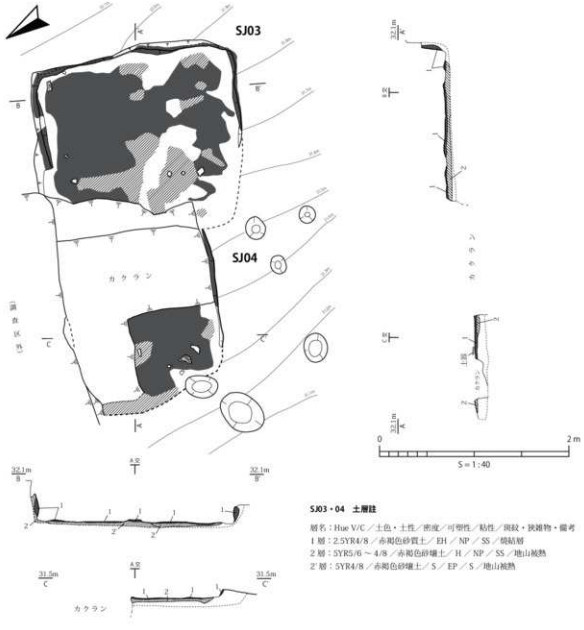
調査区 D 区の斜面最下方で検出された大型土坑で、北辺で推定 3.45m、東辺で 3.33m 程を測る平面正方形状のように見えるが、やや歪で遺構の半分程が調査区外にあるため、不明確である。土層断面からは複数の掘削が重なっているようにも見える。遺構北辺には被熱層があり、ここを火処と想定すれば、土坑が竪穴状の工房跡としての機能を担っていたようにも思えるが、被熱層自体も後世の掘削によって切られており、地山被熱や床硬化面等も検出できていないため、確定できない。出土遺物は多いが、やや時期は混在している。出土層位から整理すると、遺構に伴う遺物の可能性があるのは下層の 13 層を中心に出土したⅥ$_3$ 古期段階のものと推測される。既に 5 号窯の節で示した鉢 B や瓶 D がそれに該当する。ほかに 4 号窯由来の食膳具（ヘラケズリをもつ坏 B 蓋や丸味のある宝珠形つまみ等）・貯蔵具（壺 A・甕等）がまとまって出土しているが、上層の 1 層からの出土が大半を占めるため、斜面上方からの流れ込みと考えられる。

なお 338 は中層～下層に混入した坏 H で、望月編年（望月精司 2009「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号）の古墳第 4 様式 III 期（陶邑編年 MT85 型式・二ツ梨東山 1 号窯段階）に比定される。ほかにも、6 号窯埋土や灰原外区域で 6 世紀代の坏 H 片 3 点、長脚の高坏脚部片 3 点（同一？）、提瓶片 1 点を確認している。

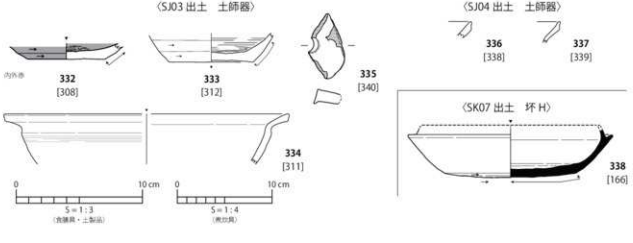
当窯跡群には 11・12 号窯があり、灰原試掘資料から第 4 様式 II1 期（MT15 型式後半～ TK10 型式前半）には操業が始まり（望月前掲書）、6 世紀末頃まで生産が続いたことが分かっている（小松市教委 2005）。また周辺には二ツ梨豆岡山窯や二ツ梨殿様池窯といった 6 世紀代の窯跡が近接しており、外部からの混入も想定される。

(3) SK06・08〔焼土坑〕

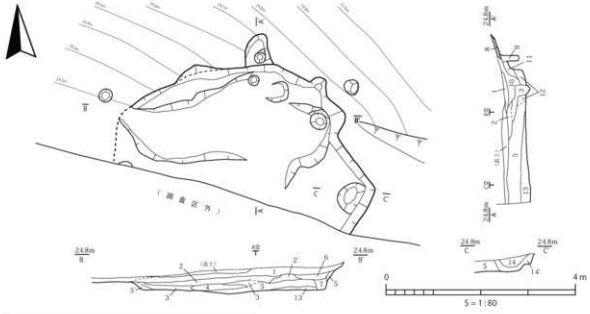
調査区 D 区の標高 28.9 ～ 29.2m 付近で検出された 2 基の土坑である。SK06 は等高線に沿って築かれており、縦軸 1.41m、横軸 1.35m 程で、土師器焼成坑のような平面台形状を呈するが、床に被熱痕跡はない。覆土中に多量の炭化物を含む層がある。SK08 は斜面上方の地山壁面が焼結しており、その壁が SK06 につながるようにして接している。撹乱により斜面下方の壁面や SK06 との切り合い部分は削られていて不明瞭であるが、SK06 同様下層に炭化物層があり、一体の遺構である可能性もある。両土坑ともに出土遺物は確認できず、時期や性格は不明である。なお本調査区南側に近接する二ツ梨グミノキバラ遺跡で、坑底は焼けず壁面のみ焼けた同様の焼土坑が確認されており、製炭土坑の可能性が指摘されている（石川県埋文 2007『小松市二ツ梨グミノキバラ遺跡』）。

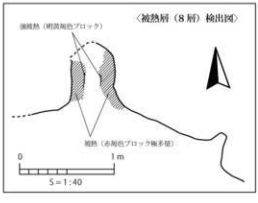


第 37 図　SJ03・04 平面図・断面図



第 38 図　SJ03・SJ04・SK07 遺物実測図

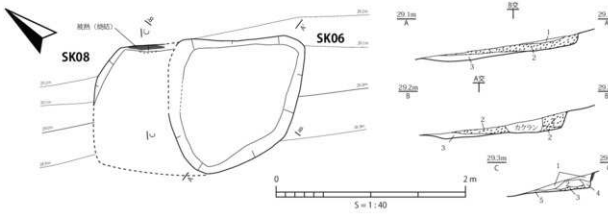




SK07　土層註

層名：Hue V/C ／土色／備考
1 層：7.5YR4/4 ／褐色土／砂質、焼土小 B 少、土器多量、流土層
2 層：7.5YR3/3 ～ 4/4 ／（暗）褐色土／粘性あり、炭化小 B・焼土小中 B 少、土器多量
2' 層：7.5YR4/4 ／褐色土／還元微小 B 極少
3 層：7.5YR3/3 ／暗褐色土／粘性強、炭化小中 B・焼土中 B 多
4 層：7.5YR2/2 ／黒褐色土／粘性強、炭化小 B・焼土小中 B 多、土器含有
5 層：7.5YR4/4 ～ 4/6 ／褐色土／粘性強、炭化小中 B・焼土小～大 B 少
5' 層：7.5YR4/4 ／褐色土／粘性強、炭化小 B・焼土小 B 微量
6 層：7.5YR3/3 ～ 4/4 ／（暗）褐色土／2 層類似、炭化小～大 B 多、焼土小 B 少
7 層：7.5YR4/4 ／褐色土／しまりなし、焼土小 B 多
8 層：5YR4/8 ＋ 2.5YR4/4 ／赤褐色 粘 ・褐色土（8.2 の割合）／被熱層
9 層：7.5YR4/4 ／褐色土／しまり弱、炭化小～大 B 多
10 層：7.5YR3/3 ～ 4/4 ／（暗）褐色土／ 2 層類似、炭化小 B 少、焼土小～大 B 極多
11 層：7.5YR5/6 ～ 4/6 ／（明）褐色土／しまりあり、炭化小 B 微量
12 層：7.5YR5/6 ＋ 10YR5/6 ／明褐色土＋黄褐色土／砂質、しまりあり、焼土中 B 微量
13 層：7.5YR5/6 ～ 4/6 ／（明）褐色土／しまりなし
14 層：6 層と同質だが、炭化小中塊少、焼土小中塊多
14' 層：6 層と同質だが、炭化小塊少、焼土微量

第 39 図　SK07 平面図・断面図



SK06　土層註（A - A' ・ B - B'）

層名：Hue V/C ／土色／備考
1 層：10YR4/3 ～ 4/6 ／褐色土（黄褐色砂質土混在）／流土層
2 層：10YR4/3 ～ 4/6 ／褐色土／粘性あり、炭化材・炭化塊多、焼土塊少
3 層：10YR4/4 ＋ 10YR5/3 ／褐色土（にぶい褐色土混在）／炭化塊少

SK08　土層註（C - C'）

1 層：10YR4/4 ～ 4/6 ／褐色土／炭化大塊多
2 層：7.5YR4/4 ／褐色土／やや粘性強め、炭化小 B 多、焼土小 B 少
3 層：7.5YR4/3 ～ 4/6 ／褐色土／炭化大 B・焼土大 B 多
4 層：7.5YR4/4 ／褐色土／焼土小中 B 少
5 層：7.5YR4/4 ／褐色土／粘性強

第 40 図　SK06・08 平面図・断面図

第Ⅲ章　まとめ

二ツ梨豆岡向山窯跡群の窯場動向

これまでに当窯跡群では、改修や改造をされたものも含めて計 15 基の窯跡が検出された。最後に操業時期から 4 期に区分し、窯場動向をまとめたい（第 12 表、第 41 図）。なおこれまでの調査は（小松市教委 1993・2005・2015・2017）を参照し、窯体構造の変遷は（望月 2010）にしたがった。

【1 期】　当窯跡群の操業開始段階にあたる。東側斜面の灰原試掘調査で 6 世紀代の須恵器とともに埴輪が検出され、県内 2 例目の埴輪併焼窯の存在が確認された。窯体未調査ではあるが、陥没痕から 11・12 号窯が設定されている。時期は古墳第 4 様式 II1 期（陶邑編年 MT15 型式後半～ TK10 型式前半）を上限として（望月 2009）、Ⅲ期頃（MT85 ～ TK43 型式）まで継続すると考えられるが、新相資料については充分な検討が行われていない。近隣には同じく埴輪併焼窯の二ツ梨殿様池窯や、同時期に操業される二ツ梨豆岡山窯、二ツ梨東山窯が存在する。

【2 期】　7 世紀代に入ると北方の戸津・林地区へと窯場が移るため、空白期間となる。当期はその後の生産再開～盛行期があたる。まず北側斜面で 8 － Ⅰ号窯（1 次床＝古代Ⅱ$_3$ 古期～）の操業が始まり、8 － Ⅱ号窯（Ⅱ$_3$ 期）へと造り替えられ、同じ頃に西側斜面で 2 号窯の生産が開始する。そして中断をはさんで南東側斜面の 9・10 号窯（Ⅱ$_3$ 新期～Ⅲ古期）へと移る。窯の構造は焼成部が 20 度前後となる緩傾斜の直立煙道型で、床や壁の修復が少なく短期間で操業を終えることが特徴である。概ね 8 世紀前葉に相当する時期である。この中で 8 － Ⅱ号窯と 2 号窯で置台転用された鴟尾が確認されているが、当窯跡群で生産されたものではなく搬入品である。その供給元は未解明である。また、南東側斜面で同時期頃の土師器がまとまって出土しており、生産遺構の存在を窺わせる。

【3 期】　8 世紀以降は二ツ梨オオダニ地区・戸津オオダニ地区に窯場が集約していく。当窯跡群はその 2 つの支谷地区の分岐点付近に位置し、周辺一帯に次々と築窯される。当期は南側斜面に窯場が移り、4 － Ⅰ号窯→ 4 － Ⅱ号窯（Ⅳ$_2$ 新期～Ⅴ$_1$ 期）と継続して生産が行われて、斜面南東側の 13 号窯（Ⅴ$_2$ 期）へと移る（8 世紀末～ 9 世紀中葉頃）。4 － Ⅰ・4 － Ⅱ号窯で焼成部床傾斜が 30 度前後と急になり、13 号窯になると焼成部の絞込みが明瞭となる。製品は白色系堅緻焼成の優品率が高まり、13 号窯では鉢 E や平瓶、円面硯等が生産される。このほか、斜面北西側では窯操業の時期よりやや古い時期の土師器焼成坑 4 基（SJ01 ～ 04）が確認されている。

【4 期】　9 世紀中葉～後葉の時期は、やや停滞していた南加賀窯跡群の生産が拡大し再興期を迎える。当期はその流れから須恵器生産の終焉に向けて、製品は食膳具が椀皿主体となる一方で、明らかに品質は低下する。窯構造は量産や低コストを意識したつくりとなる。6 号窯から 5 号窯、1 － A 号窯とⅥ$_3$ 期でも 10 世紀前葉の古い段階に操業され、須恵器生産の最終段階にあたるⅥ$_3$ 新期の 1 － B 号窯、7 号窯で当窯跡群の生産活動は停止する。1 － A 号窯と 7 号窯は須恵器以外に瓦や風字硯等の特殊品生産を行っている。

参考文献

望月精司 1992「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』2 号

小松市教育委員会 1993『二ツ梨豆岡向山古窯跡』

小松市教育委員会 2005『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』

望月精司 2009「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号

望月精司 2010「北陸」『古代窯業の基礎研究』窯跡研究会

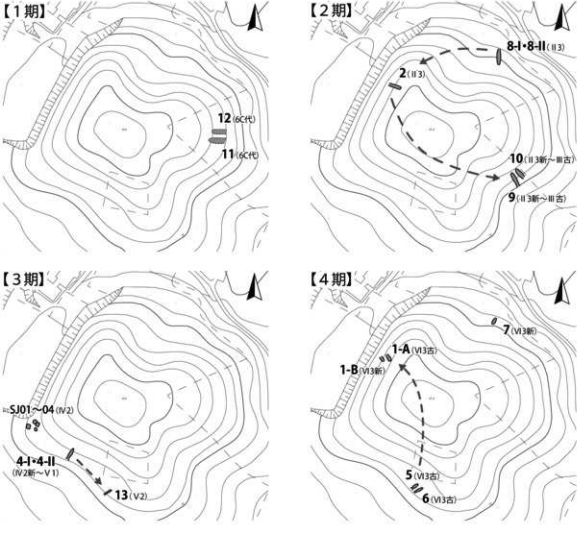
小松市教育委員会 2015『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』

小松市教育委員会 2017『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』

第 12 表　二ツ梨豆岡向山窯跡群　窯跡一覧表

窯跡	窯構造（焚口・燃焼部・排煙口）	操業時期	実効長 m	最大幅 m	焼成部床傾斜	特記（窯体補足／出土特殊品等）
1-A（旧 1）	下降傾斜燃焼部構造	Ⅵ 3 古（10C 前葉）	残 4.10	1.60	50	瓦陶兼業窯／瓦、風字硯、コップ形、管状土錘、土師質円盤
1-B（旧 3）	下降傾斜燃焼部構造・奥部開口タイプ	Ⅵ 3 新（10C 前葉）	3.62	0.98	58	コップ形、特殊蓋、管状土錘
2	一般構造広短型・直立煙道タイプ	Ⅱ 3(8C1/4)	7.26	1.62	19	鍋、鴨尾（置台転用）
4- Ⅰ	一般構造型	Ⅳ 2 新～Ⅴ 1（8C 末～9C 前葉）	残 5.51	1.20	28	
4- Ⅱ	広口燃焼部構造	Ⅳ 2 新～Ⅴ 1（8C 末～9C 前葉）	残 6.31	1.54	30	4- Ⅰ 号窯改修窯
5	下降傾斜燃焼部構造	Ⅵ 3 古（10C 前葉）	残 4.37	1.75	42	コップ形
6	下降傾斜燃焼部構造	Ⅵ 3 古（10C 前葉）	残 5.24	1.35	39	13 号窯改造窯／管状土錘
7	下降傾斜燃焼部構造・奥部開口タイプ	Ⅵ 3 新（10C 前葉）	残 4.80	1.45	50	瓦陶兼業窯／瓦、風字硯、コップ形、管状土錘、特殊蓋、特殊陶製品
8- Ⅰ	-	Ⅱ 3(8C1/4)	残 6.44	1.80	18	1 次床＝Ⅱ 3 古期
8- Ⅱ	一般構造通常型・直立煙道タイプ	Ⅱ 3(8C1/4)	8.56	1.78	18	8- Ⅰ 号窯改修窯／移動式カマド、鴨尾（置台転用）
9	一般構造通常型・直立煙道タイプ	Ⅱ 3 新～Ⅲ 古 (8C 前葉)	7.80	1.84	20	
10	直立煙道タイプ	Ⅱ 3 新～Ⅲ 古 (8C 前葉)	残 6.02	2.00	18	
11	-	6C 代（MT15 ～ TK43）	-	-	-	埴輪併焼窯　＊未調査
12	-	6C 代（MT15 ～ TK43）	-	-	-	埴輪併焼窯　＊未調査
13	一般構造型	Ⅴ 2 期（9C 前葉～中葉）	-	1.52	-	円面硯、特殊蓋、平瓶

（実効長：一部欠損の場合は残存水平長）



第 41 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群　窯場動向図（S=1/2000）

13 号窯関連遺物　　撮影：田邊朋宏

6号窯関連遺物

撮影：田邊朋宏

5 号窯関連遺物

撮影：田邊朋宏

13 号窯関連焼台

6 号窯関連焼台

5 号窯関連焼台

管状土錘

6 号窯・灰原出土遺物

灰原出土遺物

165・166・291～293

299

302

297

298

300・301

233

SJ01 ～ 04　全景

SJ01　全景

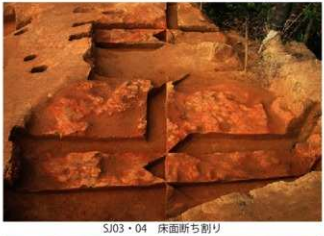
SJ01　床面断ち割り（上段 A-A′・C-C′ ／下段 B-B′）

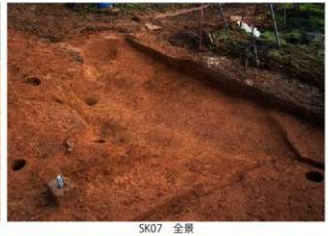
SJ02　全景

SJ02　床面断ち割り（A-A′）

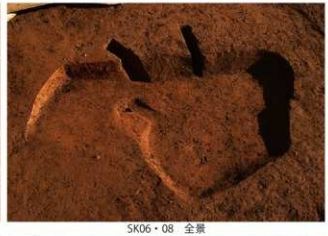
SJ03　全景

SJ04　全景


SJ03・04　床面断ち割り


SK07　全景

SK07　セクション（A-A' 被熱層付近）


SK06・08　全景

SK06　セクション（A-A'）

SK08　被熱壁

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 14
書　　名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV
副 書 名	二ツ梨豆岡向山窯跡群
巻　　次	
編・著者名	横幕 真、宮田 明
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒923-0075　石川県小松市原町ト 77-8　TEL (0761) 47 - 5713
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
二ツ梨 豆岡向山	石川県小松市 二ツ梨町	17203	03014	36° 19′ 53″	136° 25′ 48″	2005. 7.21 ～ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ～ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ～ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ～ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ～ 2009.12.11	600	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯　跡	平　安	須恵器窯跡 3、土師器焼成坑 4、土坑 3、灰原	須恵器、土師器、陶錘、陶硯	遺物編 2

要　約	5・6・13 号窯調査の遺物編。付章として、その他の遺構（SJ01 ～ 04、SK06 ～ 08）の報告を掲載。

小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

平成 31 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8　TEL (0761) 47-5713

印　　刷　株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32　TEL (0761) 22-7031